

がら、同寺のすぐ隣の建物にかかる貴重な遺物があると知らずに過したことを、今更痛恨する次第です。

媾和談判が始まつてからの行長の行動は、後世に至るまで非難的である。外交談判に慣れない日本武將は、行長にあらすとも、行長同様の失敗を繰返したであらう。況んや行長には清正以下反対派が多かつたから、その反対派の主張には行長の缺點を過大に吹聴する傾があつたものと認めねばならぬ。朝鮮役に於ける行長の功過を判断するには、充分の注意と研究とが必要であらう。日本の委員として北京に赴いた行長の家臣小西如安は上方から肥後へ落ちて來た古切支丹の一人ジョアン内藤であることを附加へて置く。如安はジョアンに同音の漢字を充てたに過ぎまい。

一五九八年秀吉の薨去によつて朝鮮役は不完全な局を結び、それから滿二年で關ヶ原の戦争が起つた。行長以下大阪方は中々よく戦つたが、小早川秀秋の裏切が敗北の切掛で、遂に總崩れとなり、行長は伊吹山の東、糟賀部村で捕虜となり、石田三成・安國寺惠瓊と共に先づ大阪に、次いで京都に送られ、三人共六條磔で斬られた。時に一六〇〇年十一月六日、日本曆の慶長五年十月一日である。

行長の末期は一六〇一年二月十五日、長崎の耶蘇會神父バレンチノ・カルバリヨから會長アクワビバ宛に送つた「一六〇〇年年報補遺」(獨譯本九五頁以下)に委しく載つてゐる。「三人は死刑

を宣告せられ、大阪では馬上、京都では車上で町々を引廻された。第一が治部少輔、第二が安國寺、第三がアゴスチーニヨである。一人の番人が天下に對して謀叛をした故死刑に處すと高聲に觸れまはる。二人は死の苦痛を顔に見せてゐるが、アゴスチーニヨにはそんなものがない。そこに區別がある」と書出し、それから愈々刑場間近くなつた時、教徒の一人が神父等の命を奉じ、番人に紛れてアゴスチーニヨに接近し、最期の準備を爲すべしと勧めたこと、僧侶等が佛教の儀式を行はんとしたるに、彼は念珠ローゼンクランツを手にして讚美歌を唱へ、僧侶等を斥けたこと、更に一人の高僧が經卷を彼の頭上に戴かせんとした時、彼は之を辭し、我は切支丹なり、とくとく立去られよと明言し、イエスとマリヤとを描ける小畫像を兩手で三たび高く頭上に捧げ、悠然としてわが魂を神に任せ、イエス・マリヤの名を唱へながら斬られたこと等が記してあるが、その記事は先般「中央公論」に出した「アゴスチーノ攝津守殿」と題する伊太利劇の序文に殆ど全部轉載せられてゐるから、ここには省略する。イエスとマリヤとを描ける小畫像は西班牙王としてはカルロス一世、獨逸皇帝としてはカール五世といはれた人の姉で、葡萄牙王ジョアン三世の皇后ドンナ・カタリナから行長に贈られたものである。

カルバリヨは更に「彼の遺骸は絹の衣服に包まれて京都の我等の住院に運ばれ、羅馬教會の例規によつて地下に葬られたが、彼の魂は聖なるミサを受けて神の家にあるべし。彼の着服中から



夫人ジュスタ及び子供等に宛てた遺書が発見せられた……これは彼が豫め家臣の一人に、埋葬に際し、着衣を搜索せよと命じたからである」といひ、遺書の一節を載せてゐますが、その文章はクラッセ（卷二、一〇八頁）に轉載せられ、既に日本譯がありますから、茲には省略します。

行長の没落はまたその一族の没落である。大阪城内にゐたマダグレナは前に放逐令が出た時、秀吉夫人の止めるのを固辭して城を去り、夫隆佐の家で平穩に生活してゐた。秀吉の薨後秀吉夫人は再びマダグレナを呼返したが、關ヶ原の敗報傳はるに及び、彼女は悲歎のあまり間もなく歿した。

行長の妻ジュスタは何人の娘か不明である。カルバリヨの年報補遺（六五頁）に、在長崎の耶蘇會員等が上方の敗報を聞いて痛心する有様を敘し、「今アゴスチーニョが捕縛せられ、死刑を宣告されたといふ通知が来るかと思へば、すぐ後から夫人ジュスタ・子息・從兄弟その他の親戚が全日本を通じてお尋者となり、愚ふ者は死罪に處すとの通知が来る。ジュスタ夫人及びその兄弟にして前の堺奉行が捕はれ、將に死に處せられんとすといつて来るかと思へば、アゴスチーニョの獨子息の十二歳になる少年が裁判のために京都へ護送されたと告げてくる」とあります。前の堺奉行といふのは隆佐の長子ベント如清である。然らばジュスタ夫人とベント如清とが血縁の兄弟で、行長は隆佐の義子に當るのではないかといふ疑が再びここに生ずる。肉親の兄弟に限り

ブルーデルといふか、義兄弟でもブルーデルといふか。ブルーデルの字義如何によつて行長が隆佐の實子であるか、義子であるかが、決せられることと思ひます。但し非常の際には浮説流言が横行するから、一々字義を正して使つてはゐまいといへばそれまでです。ジュスタ、ベント如清、及び行長の妹カタリナの末路は残念ながら不明です。

行長夫妻の間には十二歳になる男兒の外に數名の女子があつたらしい。一人は教名をマリーといひ、對馬の宗義智に嫁したが、關ヶ原役後氣の毒にも離縁となり、長崎に移り、信心堅固の生涯を守り、一六〇五年に歿した。年報補遺（七二頁）に「間もなく内府様はアゴスチーニョの夫人ジュスタ及び娘共を許した。またマリー夫人もすべての危険から自由にされた」とあるので、行長夫妻の間にマリーの外にまだ女の子供があつたことが分ります。

十二歳になる男子はその名前を詳かにせぬ。切支丹の家臣數名と共に、毛利家に預けられてゐたが、一層生命の安全を計るといふ虚偽の口實の下に、同年輩の少年數名及び家臣一人と共に大阪に送られ、そこで毛利殿の命によつて密かに殺され、首級は家康の許に送られた。この少年が大阪へ行けよと毛利殿から命ぜられた時、少年に面會した神弟が廣島から歸つて語る所によると、若干日前に聖餐を受け、固く神の恩寵を信じ、死を怖れず、己が父既に天にあること疑ひなし、己れも亦父に倣つて地上の死の苦に堪ふべしといつたと、カルバリヨは補遺の最後に記述してゐ



ます。

關ヶ原の戦争を本戦とし、大阪方と家康方との戦争は各地で行はれた。清正の軍勢は行長の居城宇土を圍んだ。留守の小西隼人以下防戦甚だ力めたが、偶々關ヶ原の敗報到り、防戦も無益となつたので、隼人は自分の自殺と城中將士の赦免とを條件として開城し、八代の守將ジャック小西美作守は妻子及び男女五百人を率ゐて薩摩に奔り、矢部の守將ジョージ結城彌平治は有馬晴信の許に亡命した。カルバリヨは宇土の主將をアゴスチーニョの兄弟といつてゐますが、行長と隼人と果して兄弟であるか。小西姓であるからといつて血縁のあるものとは一概に言へない。ジャック美作守は一六〇二年薩摩で死んで遺骸は長崎に送られた。コンテンツス・ムンデの邦譯文を愛讀し、手卷を離さずと傳へられて居る。ジョージ彌平治は有馬晴信のために一方の守將となつたが一六一二年金山カキヤマに退き、翌年終に晴信の子で基督教を棄てた直純によつて有馬領から逐はれた。彌平治は神父の筆蹟類を珍重し、聖ザビエーの消息を二通までを持つてゐたと、フロイスの手紙（一五七七年九月九日付）にありますから、好事の人と見えます。有馬領を逐はれた時は可成の老年で、間もなく死んだことと思ひますが、歿年は不明です。

一六二七年長崎からマカオに向ふ船中に小西姓を名乗る三人の武士がゐた。（一）レオ小西ヤザエモン（二）デエゴ小西チュージロ（三）トーマ小西センエモンで、彼等は切支丹なるがため、

その家族と共に日本を逐はれたのである。レオの父は志岐の代官といへば、これはビゼンテの倅、デエゴの父は八代の城代といへばこれは美作の倅に相違ないが、トーマは何人の倅か分らぬ。彼等は同年十月マカオに達し、大歓迎を受けたが、不順な氣候は不幸な人々に影響し、同年のクリスマス頃小西の一族で生存へてゐたのは三人の赤兒と一人の小兒と二人の少女とに過ぎなかつた。かくの如くにして小西隆佐の後裔は日本最初の基督教の使徒聖フランシスコ・ザビエーが永久の天に歸した上川島の陰で亡び失せたのである。（昭和八年八月初稿、同九年二月再稿）

# 小西標津守行長

原本島津公爵家藏

東京帝國大學史料編纂所藏の寫眞による



### 悲劇「アゴスチーノ攝津守殿」の筋書

昭和五年二月、自分は歸朝前の數日を羅馬教皇に對する西班牙大使館の書庫で費したが、その節小西行長を主人公とした悲劇の筋書一篇を發見し、拍案警奇、直ちに寫眞師サンサイニにその採影方を依頼した。歸朝後間もなく寫眞は到着したが、伊太利語で書いてあるため、所謂猫に小判でどうにもならぬ。そこで東京外國語學校教授粟田三吾氏に依頼し、同氏の親切によつてこの翻譯が出来た次第です。

本書は縦五寸七分横三寸五分ばかりの小冊子で、タイトルページ一丁・事實の説明十二頁・筋書十五頁より成る。タイトルページの上には「日本王アゴスチーノ攝津守殿と題する悲劇の筋書、グハスタート學院において耶蘇會員某作、一六〇七年 興行」、下部には「ジェノバにおいて、ジュゼッペ・パボニ、一六〇七年、長老の許可を以て」とあります。

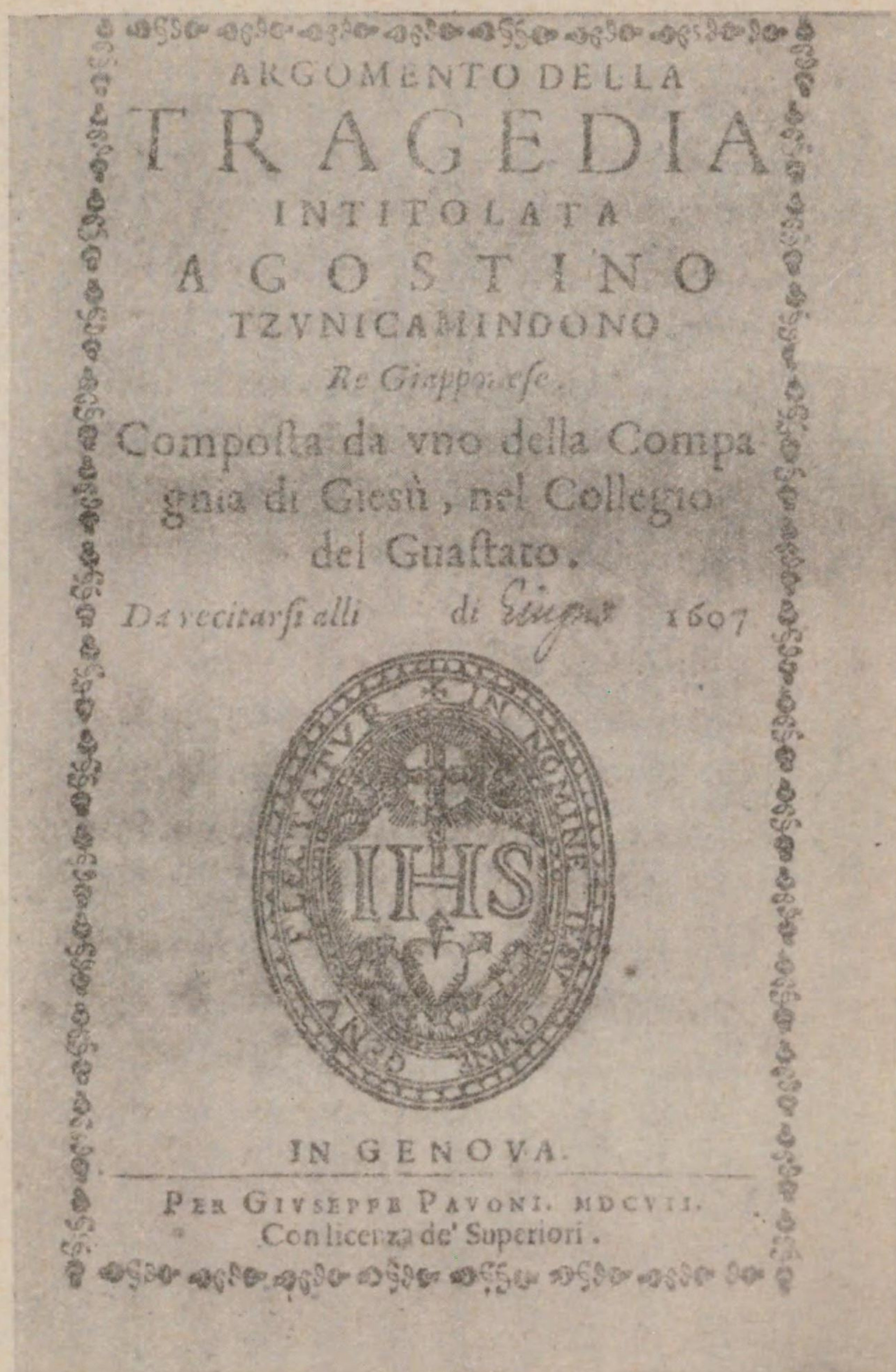
アゴスチーノは小西行長の教名、ツニカミンドノはツノカミドノの訛稱、攝津守をセツツノカ

ミと讀まず、當時はツノカミと讀んだのであらう。作者は匿名ですが、耶蘇會員の一人とあるから僧侶に違ひない。興行の月日は印刷してなく *Giugno* (六月) とペン字の書入れがある。日附が無いので、果して實演されたかどうかは一寸疑問です。ジェノバは英語流にいへばジェノアで出版地、ジュゼッペ・パボニは出版者の氏名、一六〇七年は刊年であることは申す迄もない。

小西行長が關ヶ原の一戦に敗れ、石田三成や安國寺惠瓊と一緒に六條河原で斬られたのが慶長五年十月一日、西洋曆に換算すると一六〇〇年十一月六日となる。然らば彼が死んでから、數年後に彼を主人公とした悲劇が、日本を距る幾百千里外の伊太利に出來て、さうしてその筋書が伊太利で出版されたのである。パジェス、コルヂエー、ストライト等の目録に見えぬ所から考へても、天下稀有の珍本と言はねばならぬ。

本書を手にする以前、日本人を主人公とした悲劇として、自分はただ「日本の殉教婦人アーネゼ」一篇を知るのみであつた。アーネゼは肥後の八代の人シモン・タケダの妻で、夫のシモンは加藤清正が下した改宗令に應ぜずして先づ殺され、次いでアーネゼは姑のジョアンナと同時に殺されてゐます。本書は頗る立派な出版物で、書物の大きさは前者に四倍し、挿畫一丁・タイトルページ一丁・前附八丁・本文百二十二頁より成り、一七八三年バルマの出版で、印刷史上有名なポドニ版の一つといはれる。





扉の「守津攝ノ一チスゴア劇悲」  
藏所館使大牙班西るす對に皇教

「アゴスチーノ」と「アーネゼ」とを比較すると、用紙や印刷については前者は到底後者の足許にも寄付けぬが、刊年を論ずれば、前者は後者に先立つこと約百八十年である。「アゴスチーノ」の「事實の説明」はバレンチノ・カルバリヨ師の一六〇〇年年報補遺により、またアーネゼの事蹟は「前附」中にクラッセの西教史の本文がそのまま引用せられ、前者が單に筋書に止まるに反し、後者は完全な臺帳である。さりながら是等の相違を除いて、兩者に共通な最大の點は、敬虔な信者の流した血によつて、新しい信仰の種子を培はんとする作者の期待であらう。

栗田氏の翻譯は一字一句を忽せにせざる忠實な翻譯であるだけ、或は讀み難い點があるかも知れない。彼我文法語脈を異にしてゐるのだから致し方ない。兄弟・姉妹といふ文字には毎々當惑するが、これは出来るだけ長幼の順序を正し、また固有名詞も出來得る限り正しい日本語を宛て、いよいよ不明な分は片假名で發音を表はした。作者が架空に作つた人物もあらうから、正しい文字を宛て得ぬ場合もあるものと言はねばならぬ。

この小冊子は一六〇〇年及一六〇一年に、日本に起りたる奇しき事件の物珍しきがため、ジエノバの諸賢の請により、印刷に附して世に現はれたるものなり。

このアゴスチーノの悲劇をよりよく世人に了解せしめんがため、事實を明瞭ならしむべきニ



三の事項を左に物語らん。

日本は西班牙を距ること八千八百四十伊里にして、伊太利に約三倍する大國なり。三つの主なる地方、即ち下・京・四國に分れ。この三つの地方は七十三の「シニョリーヤ」即ち小王國をその中に包含す。この小王國は我々の間に於ける公爵領又は侯爵領の如きものなり。何人たりとも武力を以て都とその附近の貴き諸王國（この土地を通稱して天下と云ふ）を占めたるものは、あらゆる日本人の中にて最も勝れ且つ最も勢力あるものと認めらるるなり。かかる名譽は戦争により太閤様の占むる所となれり。この人天下を治むること既に久しきに及びしが、一五九七年六月の末病を得、同年九月五日に死す。死に先だち、年六歳なる彼の幼兒をして帝國を繼承せしめんと欲し、關東即ち八州の君家康の娘、當年二歳になるものを娶らしめたり。そは家康は日本にて最も勢力ある武將にして、血統貴く、衆人より愛せらるる人なればなり。その後太閤様は家康及びその他の諸侯をして、幼君に對し服従と忠節とを誓はしめ、且つ臚ては幼君をして帝國を領せしむるやう取計らふべきことを約せしめ、これ等の人々に多分の黄金を贈り、また四人の執政等に更に一人を加へて之をその上席となせり。この上席は淺野彈正なり。而してこの五人の執政に命じて家康を上長と認めしめ、執政等相互の間に最大の一致を保たしめんがため、互に子女を婚嫁せしめ、姻戚の絆を以てその間を取結ばしめんことを欲し、他の諸侯にも亦同様のことを爲さし

めたり。果ては己が名を永く後世に傳へ、神として崇められんことを欲し、我を神（生前君公たり武將たりしものにして、死後神として尊み崇めらるるものをかくいふ）たらしめよ、且つ我は戰に勇なりしかば新八幡と呼ばしめよと命じたり。八幡とは彼等未信者の間に於いて、羅馬人のマルテの如く、軍神のことなり。以上のことはすべて彼の死後に實行せられたり。されど一六〇〇年に至り、今や内府様と號しむる家康と執政等との間不和となり、戰起る。戰始まるや、この時まで執政等の味方と伴りたりしもの、内府様の軍勢の中より出でたり。是に於いて執政等の軍中に謀反の叫高まり、大いに擾亂し、九箇國の主、毛利殿は戰意なくして退きぬ。かくしてしばしの間に執政等の軍は敗北し、勝利は内府様の手に歸せり。この戰に於いて多くの諸侯は或は討死し、或は敵手に陥らざらんがため（敵手に陥るは大いなる不名譽と認めらる）切腹し（切腹はこの國の習なり）、或はまた捕虜の身となりたり。この中には憐れなる治部少輔・坊主安國寺・切支丹王アゴスチーノありたり。アゴスチーノは彼の奉ずる基督の掟によりて禁ぜられたれば、切腹せず。その次第は後に明確に述ぶる所あるべし。何となればこのいとも奇しき場合に於いて、信心堅固にして眞に基督のナイトたるこの英主の示したる徳と金剛心とは特筆に値するものなればなり。執政等の軍を打破りたる後、内府様は前進を續けて勝利を博し、美濃の城を抜き、近江の國にては治部少輔の領する佐波山の城を抜きたり。この城の大將たりし治部少輔の兄は先



づ財寶を將士に頒ち與へ、無殘にも治部の妻子を殺したる後、城に火を放ちて腹を切りたり。その後内府様は更に軍を率ゐて大阪に向へり。毛利殿は他に彼が所領を有しながら、恰も執政等の長たるが如く、大阪城中嘗て太閤様の起臥せし御殿の中に住みゐたり。毛利殿は九箇國の主にして、太閤様の財産と幼君とを擁し、あらゆる諸侯はいふに及ばず、内府様に味方する諸侯より徴したる人質をも抱へて、日本一の御殿に住ひ、且つ手兵四萬を有し、多年に亙りて戦争を支ふるに足る兵糧その他の軍需品を備へしに拘はらず、敗戦の報を聞くや、忽ちいたく恐怖の念に打たれ、防戦の意氣を闕けり。彼は何等の困難なく所領に退きて、一身の安全を計り得たりしも、その擧に出でず、又和を媾することもせず、手兵を引具して大阪城を出で、城外にある彼の屋敷に退きて、敵の爲す儘にまかせたり。かくして内府様は大阪城を占領せしかば、數日ならずして日本全國も亦彼に降れり。

前約を果さんがため、左にアゴスチーノの人となり、その死及び死の原因を語らん。

さてもアゴスチーノは耶蘇會の教父によりて、聖教に改宗したる人なり。彼は自己の靈魂及び全日本國の基督教徒のために大いに力を盡くしたる信心深き眞の基督教信者なり。同情の念に富み、貧者の友として施與を吝しまず、勇敢にして兵事に精しければ、肥後の國王となり、太閤様

に重用せられ、その死に臨み、執政の一人として遣されたり。アゴスチーノは太閤様の幼兒の帝國を守護せんがため、前に述べたるが如く、太閤様に立てたる誓を守り、無法にも日本全部を領有せんと僭望せる内府様に抗して、干戈を執り、戦を交へたりしが、衆に見放されて捕へられ、内府様の軍勢に縛しめられたり。内府様は彼を打首にせよとの宣告を與へたれば、馬に乗せられて大阪の市街を引廻され、次いで車に載せられて都の道路を引廻されたり。この事たる日本にては大いなる不名譽また大いなる恥辱と認めらる。されど彼はそれ等の街々を引かれ行く途中、毫も顔色を變ぜざりき。これ誠に大度不撓の徵なり。やがて京の背にある仕置場に近づけると、耶蘇會の教父達より差遣されたる一人の基督教信者、番卒の中に打交りて、アゴスチーノの傍により、先づ、教父等は懺悔聽聞のため此處に來らんとして、様々手を盡くしたれど、番卒の見張り厳しく、且つ内府様の嚴命により、番卒どもは教父等がアゴスチーノと會談することを肯んぜざりし旨を語り、次いで、臨終の際に自己の罪障を悔い給へよと勧めければ、アゴスチーノは、先づ、教父等が我を忘れ給はず配慮奔走ありし證左を示し給ひたるを謝し、次いで、懺悔聽聞僧を得ること能はざりしが故に、御身が今我に語れる如く、我自らその用意を爲したり、而して天帝に對する我が罪科につき、先頃來我々の御主は、日々いみじき苦痛を我に感ぜしめ給ひたれば、我は我が救済について多少の信念を得たりと語れり。彼が心地よく安らかなる往生を遂げたるは、



恐らくはこれがためならん。語り終りて彼はまた引かれ行きしが、忽ちにして數名の坊主現はれて彼を取巻きぬ。彼等は彼等の常とする迷信的の儀式をとり行はんがため、彼に會見せんとして此處に来れるなり。彼は當惑の面持をなして彼等を追ひ拂ひ、携へたる念珠コノナを手にして、パール・ノステルを唱ひはじめたれば、坊主共は狼狽して愧入りぬ。愈々仕置の場所へ達したるとき、再び一人の坊主出で来れり。この坊主は頗る重立ちたるものにして、稀有の場合の外、外出することなく、それとても貴人の死に臨むときに限れり。この者、未信者どもが聖物と崇むる所のむさくるしき一卷の書を、アゴスチーノの頭上に戴かしめんとしたりしかば、アゴスチーノは常に肌身を離さざりし小さき有難き繪像と念珠とを手にし、聖なる憤怒を帯び、サタンに奉仕するこの者に打ち向ひ、我に構ひ呉るなとくとく我が面前より引退れといひ放ちぬ。そもこの繪像は我等の救主耶蘇・基督並びに聖母マリヤの御姿を描きたるものにして、辱なくもカルロ五世の姉君葡萄牙の女王ドンナ・カテリーナより彼に賜へるものなり。かくては彼は三たび兩手をもつて、恭々しくかの繪像を頭上に戴き、己の魂を神に捧げ、いと朗らかなる顔容光はせして天を凝視し、次いで繪像に眼を注ぎて、頸を刑吏に差延べたり。刑吏は三たび大刀を振へば、首は胴を離れたり。その間彼は跪きたるまま耶蘇及びマリヤの御名を叫びぬ。これをアゴスチーノの最期とす。されば彼に就いては、神は彼の罪障に對する苦難と善行とを思召され、かくも惡逆非道に陥りをる日

本のそれと全く異なる状態（天國の生活をいふ）を彼に授け給ひたりと期待し得らるるなり。されどこの悲劇はアゴスチーノの死と共に終局を告げざりき。何となれば彼の死後幾許もなく、彼の嗣子にして前途ある十二歳なる一子、毛利殿の命により打殺されたればなり。こは毛利殿が内府様の歡心を買はんとする考に出でたるものなりしが、事實は之に反し、内府様は却つてこれに就いて大なる苦痛を感じたる體なりき。さはれこの子は從容として死に就き、衆人の驚歎する所となれり。以上は本悲劇の骨子にして、諸人の理解に資せしめ、世人に之が全約を分り易からしめんがため、出來得る限り平易なる言葉を以て書き綴りたるものなり。

#### アゴスチーノ攝津守殿の筋書

##### 齣と場面

例によりて五齣とす。

#### 第一齣

##### 第一場

第一齣は劇の序段プロタシスなり。序段に於いて、日本の重立ちたる切支丹大名の一人、日本の動亂を歎じ、この國の基督教徒が悉くこの動亂のために苦しみ、又かの盲目の民によつて神と崇めらるる



神、佛（前者はもと王又は王の子たりしものにして、顯著なる功績を立て、これによりて偽神たるの譽を獲たりし者、後者は阿彌陀・釋迦などと呼ばれ、世人より後世の安樂を祈願せらるる者）を眞神として崇拜し、過酷なる憎惡を以て、基督教徒に加ふる迫害のためにも難澁するを啣つ。されど福者フランチェスコ・サベリオに慰められて退場。

#### 第二場

日本にて重立てる坊主（坊主とは日本人の間に於いて司祭のことをいふ）の一人と、嘗て坊主にして今は基督教信者となれるジョアキーノといふ盲人と相争ふ。前者は己れの神・佛を譽め、後者は基督の掟を稱ふ。

#### 第三場

この時惡魔に取憑かれたる者一人、その家族の監視をのがれて出で来る。されど取押へられ、惡魔はジョアキーノの頸にかけたる小さき十字架の功力によりて拂ひのけらる。例の坊主は同じ效驗を示し能はざりしが故に、大いに怒りて基督教徒の破滅、殊に基督教徒として又その保護者としてアゴスチーノの破滅を呪ふ。敬虔なるジョアキーノは驚き怖れ、かの坊主に向つて神怒の來らんことを豫言しつつ退場。

#### 第四場

坊主は憤怒に満ち、プルトーネ・地獄の荒神・並びに前には基督教徒の味方たりしが、後には基督教徒に對し最も殘酷なる迫害者となりしフランチェスコ・コロナ王の王妃の魂魄を呼び迎へて援を求む。これ等の者一團となりて、内府様とアゴスチーノとの間を離間せんと企つ。

#### 第五場

惡魔等はその惡行を了へるや、直ちに聖・ミケレ・アルカンジェロの命により、プルトーネ諸共皆縛せられ、嚴罰を以て脅かさる。これがため坊主は恐懼して逃げ去る。

#### 第一幕 開 狂言

死に先だち太閤様の遺したる命令により、その禮拜式を舉行す。この禮拜式により日本の風習に従ひ、太閤様に對して執り行はるる式の模様・興行物・祭禮・及び祝典を看ん。

#### 第二齣

劇の第二段は始まる。第二段に於いて大動亂の原因並びに内府様とアゴスチーノとの間の葛藤の發端を見ん。

#### 第一場

曩に家康と名乗りゐたりし内府様は、今や日本の政をその手に收め、天下となるの時運に際會



したるを見て、部下の諸將を集めてアゴスチーノ討伐の評定を爲す。この時彼は最高顧問の一人よりこの事について示されたる危惧のため茫然として自失す。されど反つて顧問を譴責し、一切の方法を以てこの目的の爲めに出来得るだけ大兵を集めんことを命ず。

第二場

アゴスチーノ、治部少輔と共に来る。治部少輔は内府様が太閤様よりその幼子の保護者として遺されたる一人なるに拘はらず、かかる決心をなしたる旨聞き及びしを以て、太閤様に立てたる誓の爲に、勇敢に戦はんことをアゴスチーノに勧め、且つ切支丹大名たる有馬殿・大村殿並びに多くの有力者が合同して内府様に近づくことを阻止せんがため、佐賀殿を使者として彼等を招かしむ。治部少輔退場。アゴスチーノ残る。

第三場

アゴスチーノは太閤様より遣されたる執政の一人淺野殿より激勵さる。

第四場

第一齣に出でたるサコン殿 (Saccondano) といへる坊主、その徒黨のものと評議して、基督教徒の破滅、特に切支丹大名にして基督教徒の味方たるアゴスチーノの破滅を策す。

第五場

薩摩の王、毛利殿と共に軍の評定を爲しをる時、重立てる部將一人出で來りて、内府様が美濃の國の本城オアリ (Yorii) (Yorii は尾張なり國名を城の名と誤りしなり) に來りたる報を齎らす。これがため毛利殿大いに怖る。薩摩殿彼を勵まし、部將を返して尙詳報を探らしめ、二人相携へて、この由をアゴスチーノに知らせに行く。

第六場

内府様の主將にして重立てる大名ジューロ (Giurcho) フカモ (Fucanno) の兩人は、不具を装うて出陣せざる者あるを發見して、その詭計をあばく。されど同人の請を容れて罪を宥す。

第七場

アゴスチーノ・治部少輔・薩摩の王・及び安國寺登場。安國寺は神・佛の大司祭の一人なるが故に、治部少輔はこの者の忠告を信じひたりしなり。一同アゴスチーノの言に勵まされをる折しも、佐賀殿敵の手を脱がれて出で來り、大村殿と有馬殿とは内府様に味方せる旨を告ぐ。されどアゴスチーノはこれが爲に勇氣を失ふことなし。かくて戦争の用意を爲さんがため一同退場。

第八場

内府様來り、最も重立てる大名にして軍師なる官兵衛殿 (黒田孝高をいふ) と共に、敵の全滅を評議す。



第九場

やがてサコン殿その徒黨を率ゐて來り、敵を滅すことは神・佛の思召なりと、十分に内府様を説得し、一切の準備を爲さんがため退場。

第十場

毛利殿内府様を怖れ、己が所領に引き上げんがために、ハシバコ (Fasibaco)・タングーノ (Tanguno)・グエンザブロ (Gouenzaburo) 等の顧問・主將と評議し、アゴスチーノに祕して密かに引上ぐ。

第十一場

サコン殿・ホイノ (Hoino)・立以法印等の坊主ども軍のことを語りぬる。この時二人の鎧武者虚空に現はれて烈しく相闘ふ。サコンはこの怪事こそ日本に大戦の起る徴なりと解きければ、一同満足す。茲に第二齣を終る。

第二幕 閑狂言

内府様は神・佛の加護によりて、彼の志を遂げんと欲し、神・佛に奉納せんがため、日本の風習として常に行ふ所の一種の戦事を催す。こは又兵士の武勇を試すに役立つものなり。次いでこの國に行はるる習によりて軍の檢閲を行ふ。

第三齣

本齣は中段の始り。

第一場

内府様の陣中の様子を探りに行きたるアゴスチーノの兵士捕へられて、内府様の面前に引出され、死刑を宣告せらる。内府様は勝利を得ることの難きを危ぶむ。この時、一人あり、身を挺してアゴスチーノの陣中に忍び込み、アゴスチーノを殺害せんといへば、議これに定まり、この者首尾よく事を爲果せんがために去る。

第二場

死罪を宣告せられたるかの兵士、計を構へて逃走す。士卒その行衛を捜す。

第三場

ジョアキーノはアゴスチーノの軍勢の敗北を氣遣ひて歎く。逃走せるかの兵士を捜索中の内府様方の部將ども突然入り來りて、この老人を捕へんとす。されど人違なること分りて宥さる。

第四場

アゴスチーノを殺害せんがために赴きたるかの部將、アゴスチーノ及び治部少輔の面前へ引出



さる。この者はアゴスチーノに容貌の肖たるものを誤つて殺したれば、アゴスチーノは難を免れたるなり。この者直ちに治部少輔の命によりて縛せられ、次いで牢獄に引かる。

#### 第五場

部將二人、アゴスチーノを殺さんと協議しをる所を、アゴスチーノの軍勢の一人に發見せらる。兵士はこの者どもを殺さんためにその跡を追ふ。

#### 第六場

内府様は諸將に夫々命令を授く。

#### 第七場

他の諸侯達は内府様に味方せんと評議し、議定まる。この協定を實行せんがため一同退場。

#### 第八場

治部少輔はアゴスチーノを殺害せんと企てたるかの部將二人を殺さんために人を遣り、兵士を随へて出陣す。

#### 第九場

サコン殿は出現せる彗星のことに就いて、徒黨の坊主共と語り合ふ。折しも雷鳴聞え、電光閃き、火焰の風起る。坊主どもは焼死を免れんために逃げ去る。茲に第三齣を終る。

### 第三幕 開狂言

アゴスチーノを援助せんと欲し、然も途中にて、内府様の軍勢に捕へられたる諸王及びその子等の愁歎よろしくあり。また内府様の手に捕へられざるやう、基督教徒が亡命を選ぶが如くに、逃走せる諸侯もあり。

#### 第四齣

中段の續き。

#### 第一場

内府様は地震並びに先頃聞えたりし雷鳴の原因を質す。サコン殿は戦の後るることその原因なりと答ふれば、内府様は執政等の陣を攻撃せんと直ちに出で行く。

#### 第二場

太閤様の息子は熱心なる依頼と計略とを以て、漸く毛利殿の息子より内府様の意圖を聞き、大いに悲歎し、太閤様の子として當然我が手に歸すべき日本國を篡奪せんとするにあらずやと疑ふ。

#### 第三場

合戦はじまる。治部少輔・安國寺その他大勢捕へらる。治部少輔は切腹す。(第十場には治部少



輔・行長・安國寺と共に大阪に引かるとあり。されどアゴスチーノは基督教信者としてかかる重大なる過失を犯さんより、寧ろ敵に捕へられんものと所存の臍を固む。次いで薩摩の王は敵軍の中央を通りてその王國へ引上ぐ。

#### 第四場

アゴスチーノは敵に捕へられしが、楯の印しほしによりて、アゴスチーノたること判明し、甲斐守の下知により繩目を解かる。

#### 第五場

甲斐守はアゴスチーノの懺悔聽聞僧として、耶蘇會の教父を招かんことを内府様に請ふ。こはアゴスチーノの希望なりしなり。されどこの願は許されざりき。その後甲斐守は敵國を滅すため派遣せられて出發す。内府様は大阪城を占領せんとしてその方面へ向ふ。

#### 第六場

治部少輔の兄は執政の敗軍を聞き、城に火を放ち、治部少輔の妻子を殺し、兵士に財産を頒ち與へて切腹す。

#### 第七場

最も勢ある國王、紀伊守殿コノヨシノリ亡命す。

#### 第八場

アゴスチーノの重臣一人及び彼の息子は、戰場より歸來せる者より父の捕はれたることを知り、兩人悲歎に暮れる。

#### 第九場

毛利殿内府様を怖れ、城を棄てて城外にある己の屋敷に引上ぐ。

#### 第十場

内府様の命によりアゴスチーノ・治部少輔・及び安國寺は縛せられて大阪へ引かる。

#### 第十一場

内府様は先頃聞えたる雷鳴の原因を質す。サコン殿これに答へ、基督教信者として又その擁護者としてアゴスチーノを死に處すべしといへる神カミ・佛ホトケの思召なりといへば、内府様は即刻アゴスチーノを殺せと命す。

#### 第十二場

アゴスチーノを殺せんがために出で行きたる内府様の勇將カング・イトソ(Canguaitoso)はアゴスチーノを討ち漏らし、内府様の軍勢の方へ退かんとす。されど身に數箇所の痛手を負ひ、三度地に倒れ、出血夥しく遂に途上に死す。後、内府様の軍勢の重立てる大名の一人によりて發



見され、その人たること判明して哀惜さる。

第十三場

坊主どもはアゴスチーノの死を祝す。されどその後十字架の空中に現はるを見る。彼等はその悪事の苛責として、神の裁きに脅かされ、大地に呑込まる。茲に第四齣を終る。

第四幕 閉狂言

カンダハイトソの葬儀、日本の風習によりて執り行はる。

第五齣

本齣は悲劇の大詰カクストワエにして、アゴスチーノとその長子の悲慘なる最期を示す。

第一場

内府様の下したる宣告により、アゴスチーノは馬に跨がり大阪市街を引廻さる。アゴスチーノの態度には死を喜ぶの風あり。

第二場

アゴスチーノの郎黨の一人、主君死刑の報を聞いて愁歎す。この時アゴスチーノ死罪に處せられんが爲、車に載せられて出で来る。迷信深き坊主どもを拂ひ退け、敬虔なる眞の切支丹大名た

る種々の證據を示したる後、首を刎ねらる。主君の死を見るや、斷頭臺の場所近くにてアゴスチーノの家來の一人昏倒す。この者は事の次第を逐一見届けんがため、アゴスチーノの兄より差し遣はされたる者なり。傍輩ども同人を慰撫す。

第三場

アゴスチーノの子、父の悲運を歎く。

第四場

毛利殿の使者、贈物を携へて内府様の許に来る。内府様は使者に命ずるに、もし和を欲するならば秀頼ヒシノと黄金とを引渡すべし、然らずんば一人も残さず刺殺さんといふ。

第五場

アゴスチーノの刑死の報を聞き、アゴスチーノの兄及び子息悲歎に暮れる。

第六場

毛利殿の部將若干名アゴスチーノの子に生命の安全を確保す。この子逃走す。これ等の部將どもは彼の生命を保護することを約したれど、その實、彼等の間に結びたる約束によれば、彼を殺す意思を有せしなり。

第七場



使者再び内府様の許に來り、アゴスチーノの子の首級を獻す。内府様大いに之を悲しみ、これ等の惡人輩を譴責す。されど虚偽の分疏を聞きて心ならず。

第八場

アゴスチーノ及びその子の死骸、華美なる輿にて運ばれ來る。こはアゴスチーノの兄の心盡しによりて、手に入りたるものなり。アゴスチーノの宮廷は擧つて主君と子息との死を悼む。かくしてこの悲劇は大團圓となる。

日本人が得た最初の和蘭醫術得業證書

平戸<sup>うら</sup>上町の嵐山しな女方に、先祖甫庵が一六六五年一月廿一日附長崎の和蘭商館長ヤコブ・グライス外二名から與へられた蘭文の醫術得業證書がある。この證書と、これに副つてゐる寛文四年十二月十三日附和蘭通詞志築孫兵衛外六名出島乙名馬田九郎左衛門連署の日本文の證明狀とは、彼是の著述に挿畫として掲載されてゐるが、蘭文の證書の翻譯はまだ無いやうであるから、左にその逐字譯を載せる。

我等下記の者共は、平戸侯の臣にして甫庵と名乗る日本人が、久しい間和蘭の外科醫に就いて勉強し、(我等の知る如く)充分外科醫の技術を教授せられたことを承認し、且確知す。之によつて彼は和蘭醫藥の效驗に精通し、それについて我等に充分の證據を與へた。仍て我等は彼を良外科醫と宣言する。

日本長崎の商館にて、一六六五年一月廿一日



一六六五年一月廿一日は日本曆に換算すると寛文四年十二月六日となります。署名者のヤコブ・グライスは一六六四年の秋から一六六五年の十一月五日まで館長の職にあつた人。ニコラス・ドロイはオンデルコープマン即ち館長次席と思ひます。外科醫のデー・ブッシュは甫庵の先生、少くとも卒業試験官といへませうが、何時から出島に来てゐるのか、自分の手許では解りかねます。甫庵の性は下記の記請文に判田となつてゐますが、日本文の證明狀には明らかに伴田とある。どちらにしてもはんだと讀んだに違ひない。又甫庵を甫安と書いたものもあります。どちらにしても醫者の名は音讀が通例ですから、蘭文の得業證書にある通り、ホアンと發音したことは申す

Wij onderges hreven getui-  
gen/ende attereren voor de  
waerheit, dat/den Japander  
genoemt Choan, dienaer/van de  
Heer van Firando, eenen ge-  
reuimen/tijt bij de hollandse  
Chirurgijns heeft/geleert,  
ende in de ars van die/chi-  
rurgin (voor soo veel ons be-  
kent is)/volkomen is onder-  
wesen, So dat hij/de kraghte  
van de hollandse medica/menten redelk wel is bewust, /  
daer van hij ons volkomen  
blijken/heeft laten sien, ende  
dienvolgende/den selven voor  
een goet geneesme/verklaren.

Japan ten Comptoire Nan-  
gasackj desen 21<sup>en</sup> Januarij  
a<sup>o</sup> 1665

Jacob Gruijs

1665

Nicolaes De Roij

D. Busch Chirurgijn

des Eilandt Decima.

Wij ondergeschreven getuigen  
ende attereren voor de waerheit, dat  
de Japander genoemt Choan, dienaer  
van de Heer van Firando, eenen gereuimen  
tijt bij de hollandse Chirurgijn heeft  
geleert, ende in de ars van die  
Chirurgijn (voor soo veel ons bekend  
is) volkomen is onderwesen, So dat  
hij de kraghte van de hollandse  
medicamenten redelk wel is bewust,  
daer van hij ons volkomen  
blijken heeft laten sien, ende  
dienvolgende den selven voor  
een goet geneesme verklaren.  
Japan ten Comptoire Nangasackj  
desen 21<sup>en</sup> Januarij a<sup>o</sup> 1665

Jacob Gruijs  
Nicolaes De Roij  
D. Busch Chirurgijn  
des Eilandt Decima

書證業得文蘭の庵甫山嵐

(藏子氏なし山嵐 戸平)

出島島の外科醫

デー・ブッシュ

ニコラス・ドロイ

ヤコブ・グライス (一六六五)



までもありません。最初李庵といつたのを甫庵と改め、又京都へ上つてから姓を嵐山と改めたのでした。

甫庵が寛文元年九月若しくはその少し以前に長崎へ出たことは、起請文によつて明白です。さうして卒業證書を得たのが寛文四年の末ですから、甫庵の修業年限は三年餘となる。彼の長崎遊學は主君松浦肥前守鎮信の命で、鎮信から長崎奉行黒川與三兵衛に依頼があつたため、出島に入する便宜を得たのでせう。起請文を読めば、その筋で耶蘇教の輸入、日本の國情の漏洩、密貿易の紹介等を憂慮したこと、並びに主君の命令による外、一切他見他語を禁ずといふ修業後の心得は知れますが、不幸にも修業そのものについては、「其頃蘭人出府ニ付附添、道中筋にて種々藥草等功能和解いたし候由、其書寛政之頃迄は有之由」といふ記事がある位なものです。これとても當時和蘭商館長は年々出府してゐますから、何年のことか曖昧です。

阿蘭陀人の外科稽古入門之節起請文前書之事

- 一 對阿蘭陀宗門之儀一圓承申聞敷事。
- 一 一たらんだに對し、日本之風俗土地之様子、一切咄申聞敷事。
- 一 阿蘭陀外科傳授之通他見他言仕聞敷候。併、右之流相殘ため、肥前守(鎮信をいふ)弟子を申付習せ候は可爲各別、雖然他方には一切此流洩し申聞敷候事。

- 一 阿蘭陀に此方より何ニても音物遣申聞敷候、勿論衣類食物其外少之物ニても囉申聞敷事。
- 一 阿蘭陀と少之商賣も仕聞敷事。
- 一 阿蘭陀ニ被頼、何ニても商賣之取次仕聞敷候。尤日本人よりも被頼、商賣之取次仕聞敷事。
- 一 對阿蘭陀何ニても隱密の談合密々之筆談一切仕聞敷事。
- 一 稽古の内出島ニても何ニても不作法或は酒宴仕聞敷事。

右之條々於相背は(以下誓詞の文言)

寛文元辛丑年九月四日

判田李庵(血判)

大河全之助殿

和田與右衛門殿

甫庵は元祿六年十一月晦日平戸で歿してゐる。嵐山家は六代目の甫庵春生の時、再び家名を擧げたのですが、この人の歿後祖先傳來品も追々散るやうになつたと見え、現在では前記の卒業證書證明狀の巻物と、甫庵が使用したといふ横文字を鑄出した乳鉢が残つてゐる位です。自分の手帳に、昭和二年三月長崎の縣立醫學校にて、外科宗傳二冊(寶永三年九月朔日貝原益軒の序文あり)と和蘭國藥油集解とを見る。兩書とも嵐山家にありしものとあります。



### シーボルトの「日本」の複製及びその補遺につき

シーボルトの大著「日本」の複製は昨年、新刊の補遺は本年になつて配付せられた。複製は本文二冊クォート版一四四〇頁、挿畫二冊フォリオ版三八三丁より成り、又補遺はクォート版本文四三五頁挿畫二八丁を有し、豫約の頁數より約三分の一の増加である。「日本」の複製及び補遺新刊の計畫が一九二八年二月十七日シーボルト第三百三十回の誕辰に、ベルリンの日本學會で發表せられた時、一部の人々はその成否を危んだ位であつたが、編修者ドクトル・エフ・エム・トラウツ氏の努力と出版元エルンスト・ワッスマート會社の勇斷とにより、遂に完成を見るに至つた。我等は本書を播くに當り、先づ感謝と祝賀の意とを編修者及び出版元に寄せるものである。

一口に複製といへば世人は容易のことのやうに考へる。なる程印刷技術の進歩した今日、寫眞術を應用した複製は左したる難事ではあるまい。併しながら「日本」の場合に於ては複製すべき完全な原本を得ることに非常な困難があつた。それがトラウツ氏をして補遺の編修に優るとも劣らざる苦心を複製に費さしめた所以である。左にあら／＼その次第を述べて見よう。

「日本」の初版本は纏つた一部の書物として出版せられたのではなく、分冊として追々に出版せられたものだ。和蘭のライデンで第一分冊が出版になつたのは一八三二年で、それには同年二月附の著者の序文がある。シーボルトが日本を放逐されて和蘭のフリッシンゲン港に安着したのが、前年の七月七日ですから、僅々七八ヶ月の中に原稿の一部を取纏めて出版に着手した譯になります。勿論著者は一八二三年から一八三〇年まで日本に滞在し、バタビヤ總督府の特別の奨励と多數の日本の官吏學者の援助とを得て、豊富な材料を有して居つた。「日本」の原稿の或る部分は滞在中に既に出來て居つたかも知れませんが、その整理訂正すら容易ではなからうと考へます。況んや彼が日本を去つたのは尋常の歸國ではなく、罪を獲て放逐されたのです。所謂シーボルト事件が一八二九年十二月に突發してから、日本を去るまで、滿一年間といふものは内外多事多端で、殆ど寢食を安んぜなかつたらうと思はれる。それにも拘らず歸國後休養の暇もなく、直に畢生の著述に着手し、數月にしてその一部分を發表するに至つた。この點は眞に我等後學の龜鑑とすべき所と存じます。

第二分冊及びその以下が何年何月に發行せられたか、一々承知致しません。自分が日本學會所藏のシーボルト遺品中に見出した「日本の動物」の豫約募集の一枚摺（佛蘭西文）には、最後に







書いたエフ・エル・フォークスは、その旅行記の中に、本書は著者自身の自慢と合衆國及び日本派遣艦隊を誹謗するために書かれたものだといひ、又シーボルトが日本派遣艦隊に對して獻策した六箇條は、一として用ふに足るものが無かつたと述べてゐます。交渉不調の結果、双方とも多少激越の口調を用ひるに至つたと解すべきでせう。

一學究として著述に出版に没頭してゐたシーボルトをして、政治的方面に向はしめたは、一八五二年の交渉事件であつた。爾來彼は日本を平和の裡に歐洲の文明世界に仲間入せしむることを以て自己の使命と感じ、之に奔走するに至つた。一八五九年八月長男アレキサンダーを伴なつて長崎に上陸し、江戸へ出て幕府の諸有司と會合したが、色々の事情の下に遂に志を得ずして再び和蘭に歸つた。また一八六四年にはパリへ出張して日本使節のために斡旋する所があつた。さうしてそれから二年たつて彼はミュンヘンで死んでゐます。

要するにシーボルトの政治的生活は失敗であつた。之はシーボルト自身からいへば甚だ遺憾であつたらうが、我等讀書子は、彼が政治的運動に従事したため、日本の最後の一分冊が出版せられず、名著「日本」が永久に不完全に残るのを見て、一層遺憾とするものです。

「日本」は分冊として二十年間引續き配付せられた。配付を受ける方にも、二十年間には住所身分その他の變動が生じ、二十分冊漏れなく請取つた人は最初の豫約者の何割かであつたらう。

さうして之を完全に保存し得た人は更にその何割かであつたらう。加ふるに「日本」は本文挿畫共に七部に分け、本文は部の内に更に區別があつて、頁數はその區別毎に一頁から始まり、挿畫は部の内に更にabc等の區別があつて、各々第一圖から始まつてゐる。最初から一貫した頁數や挿畫の番號が無いのみか、最後の一分冊が出なかつたために、途中で斷絶して結了しない分もある。それ等の次第で、本文が何頁あつたら又挿畫が何丁あつたら、既刊の分大揃と認むべきか、判定に苦しむ。試みに甲乙二本を比べれば、必ずその本文及挿畫に異同があり、更に丙本を加へれば、甲乙丙三本共に異同があるといふ始末です。シーボルトの歿後三年、ロンドンの書林ベルナルド・クォーリッチがミュンヘンから「日本」の殘本全部を引請けた節、内容對照四頁（最後の二頁は空白）と表題一六枚とを出版したのは、甚だ有意義なことでした。

自分が日本學會で「日本の動物」の豫約募集廣告と同時に見た「日本」の廣告、——それには四分冊既刊といふ一句がありますから、一八三五年のものと思ひますが、——によると、印刷の用紙や挿畫の色刷の有無によつて三種に分け、甲は一分冊二十五フロリン、乙は十五フロリン、丙は七フロリンとあります。この豫約者が合計でどの位あつたか、クォーリッチがミュンヘンから殘本全部を取寄せたといへば、豫約者の人員に十なり二十なりを加算した數字が、印刷部數であつたでせう。トラウツ氏は今度の複製の底本を作るために、獨逸境地利各地の圖書館及び個人



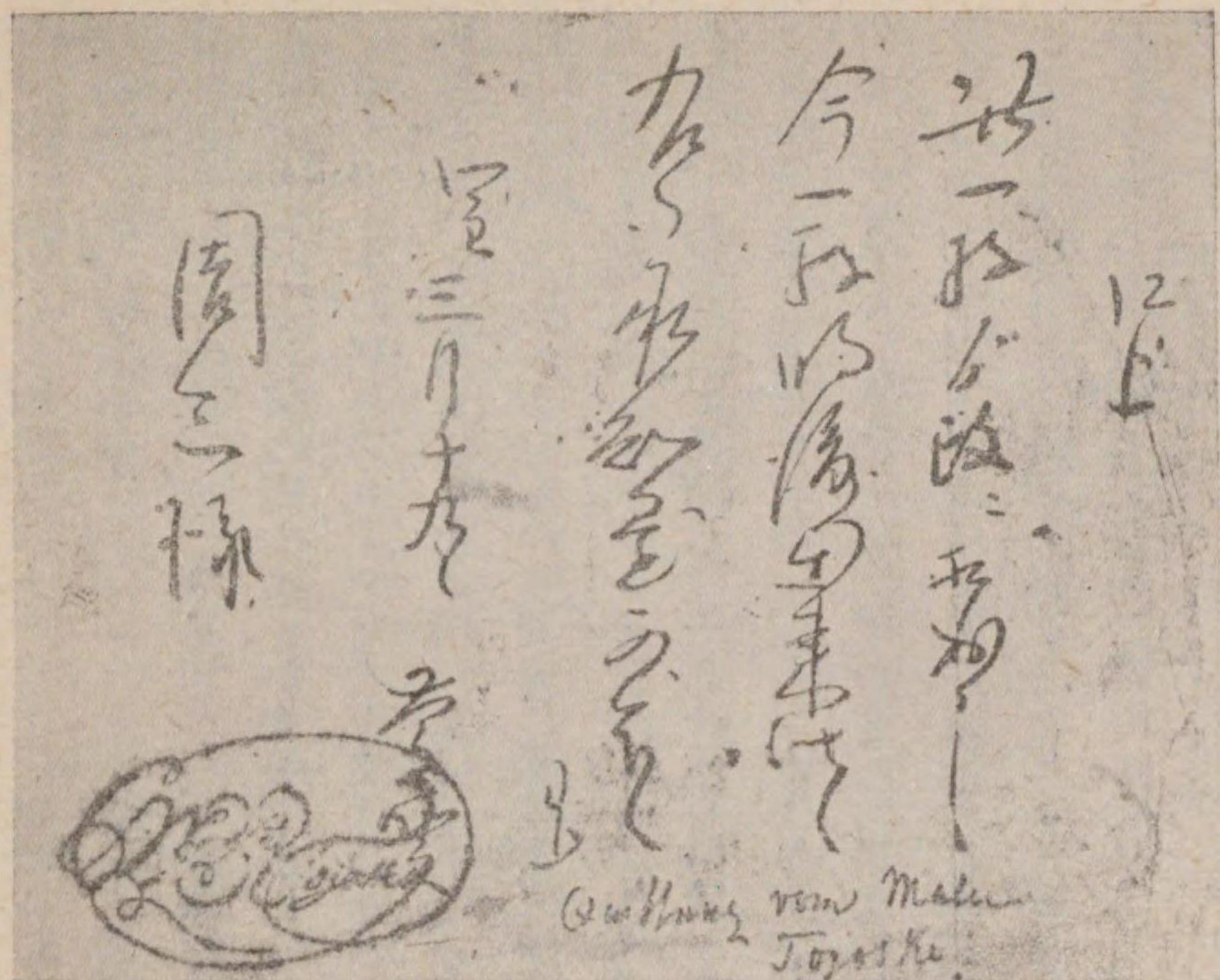
の所藏本三十六七部を調べたといはれます。尤もこれは完全に近いと評判のある本だけだといふことですから、假に不完全の本が同じ位あるものとし、又獨逸以外の諸國に於て善本と然らざるものとが獨逸二國同様にあるものと見て、ざつと百五十部となります。百五十部多くて二百部が最初の印刷部数であつたでせう。補遺の卷頭に見ゆる今度の豫約部数が百五十餘部であることも一つの旁證になります。尙トラウツ氏の話に、「日本」の第七部の最後にある琉球島の記事は六十部外摺らなかつたため、大抵の「日本」には缺けてゐるとあります。最初百五十部乃至二百部も摺つたものが、最後に六十部に減じたと見て宜からう。

上記種々の理由により、「日本」の初版は何圖書館又は何氏の藏本を以て完本と認むべきか、甚だ困難な問題であつた。然るに日本學會が買入れた「日本」は、獨逸の舊皇室ハプスブルグ家の藏本で、所藏者の家柄からいつて完本——假令完本でなくとも尤も完本に近いものに相違なからうといふことが、「日本」複製の動機となつた。シーボルトの遺物で、長男アレキサンダーの家に傳はつた分を、アレキサンダーの長女ドクトル・エリカ・フォン・エルバルト・シーボルト夫人から日本學會が全部買入れたことが補遺新刊の動機となつた。そこへベルリンのエルンスト・ワッスマート會社が一切の費用を負擔して印刷販賣を引受けるといふ申出があつたので、遂に計畫發表豫約者募集といふ順序となつた。

原稿の整理は日本學會のトラウツ氏が擔當した。同氏はハプスブルグ家の藏本を底本とし、獨逸各地の圖書館及び個人の藏本三十六七部と對校して、愈々複製に使用すべき本文の頁數及び挿畫を決定し、本文全部に通ずる頁付、挿畫全部に通ずる丁付を加へた。「日本」の複製に用ひられた最も完全な初版の底本は、かくの如き困難を経て成就したのである。

シーボルトの長男アレキサンダーは一八五九年十四歳の時父に伴なはれて日本に來朝し、父は和蘭に歸つたが同人は日本に踏留り、日本語がよく出來るといふ所から、先づ英吉利公使館の通譯となり、それから日本の外務省に奉職して歐洲各地に赴任し、在職四十年、一九一一年一月を以て永眠した。その長男アレキサンダーも亦少年時代から日本語を勉強し、他日の大成が期せられたが、世界戦役に出陣し、一九一八年四月二十三歳で討死してしまつた。シーボルトの嫡統はこれで絶えてしまつた。後に残る三人姉妹の中、長姉が前にいつたエリカで、家に傳へた祖父の肖像・デプロマ・草稿・研究材料等、一切を擧げてベルリンの民俗博物館に委託した。館長のドクトル・エフ・ベー・ヤー・ミューラー氏は東洋語學者として又佛教の研究家として名高い學者である。シーボルトの遺物の保存と利用とを熟慮した上、一九二七年門人トラウツ氏に勧め、日本學會をして之を買取らしめた。同氏は「日本」の複製及び補遺新刊については大賛成で、始終トラウツ氏を奨励誘導し、一九三〇年四月ベルリン發行の「研究と進歩」第六卷第十號誌上に、「日





川原賀の状にトルボシの加へた鉛筆書  
 りな印字マールは印の用所・工畫たけ助を究研のトルボシは賀慶

本研究とベルリンに於ける日本學會」といふ短文を載せて、學會の事業を推賞して居られますが、その雑誌の發行になつた四月といふ月の十八日に、ミュラー氏は死んだのですから、最期の日まで學會の事業を後援されたといつて宜い。トラウツ氏が補遺の巻頭に本書を恩師ミュラー氏に捧げる旨を記されたは、實に道理な次第と感じます。

日本學會がシーボルト嫡孫女から譲請けたシーボルトの遺物は永久に同會の誇です。自分が一昨年九月ハーグからベルリンへ出掛け、二週間毎日學會へ通つたのは、全くこの遺物を一覽するためでした。補遺の主要部分一五五三一―一六三四

頁を成してゐるシーボルト自筆の「一八二六年江戸參府旅行中の日誌」は、實にこの遺物の一つです。

一八二六年シーボルトが長崎から江戸に往復した記事は、初版第二部海陸旅行編に「一八二六年江戸參府旅行」三一―四六頁と題し、第一章參府旅行略記、第二章一八二六年江戸參府の序説、第三章長崎から小倉までの旅行、第四章小倉から下ノ關渡海、同地滞在、第五章下ノ關から室に至る海路、同地滞在まで載つてゐるが、それから先が無い。「明日我等はこの地方の名高い見物場所を一覽し、それから陸路大阪まで旅行を続けよう」といふのが最後の文章で、以下が闕けてゐます。然るに一八九七年ウニルツブルグで出版せられた「日本」の第二版には、室出發後江戸參府を濟ませて長崎へ歸着するまでの記事がチャンと出て居る。

「日本」の第二版オクターボ版二冊はシーボルトの二子アレキサンダー及びハインリヒが、父の第百回の誕辰を紀念するために出版したもので、その節日本の貴顯大官から少からぬ賛助のあつたことは、巻頭にある兩名連名の序文で解りますが、之は純粹な意味の再版とはいはれぬものです。挿畫を縮少して本文と一緒に印刷したため、初版にある挿畫の色差は本書にも一枚も見られません。本文の順序が變更してゐるのみならず、文章も色々加除があり、又固有名詞の綴方も大分變つてゐますから、再版といふよりは寧ろ改訂版といふべきです。編者は序文に於て極めて



簡単に、初版に缺けた所を後に残された材料によつて補つた。それが殆ど完全に出来てゐたので、編者はただ最後の一筆を加ふれば足りた。同時に初版を通覽してドクトル・ホフマン氏の編修した部分の外に、日本の領海に於ける歐羅巴人發見の概説、參府旅行略記、註解、その他若干の小篇を削除し、又日本語の書き方は必要と認められた場合、若干の變更を試みた。例へばDをHに、LをRにかへたやうなものだと斷つてゐます。

初版で第二部にある「一八二六年江戸參府旅行」は、再版では第一部に移され、初版の第一章參府旅行略記は再版では全部削除せられ、初版の第二章以下が再版の第一章以下になつてゐます。但し再版の第五章室から大阪への陸路以下、第十二章大阪から長崎への歸路までは、再版に限り見出され得る文章で、或る意味からいへばこれは編者の大手柄です。異國叢書に收めた吳秀三博士のシーボルト江戸參府紀行は、全くこの再版本から翻譯されたものです。

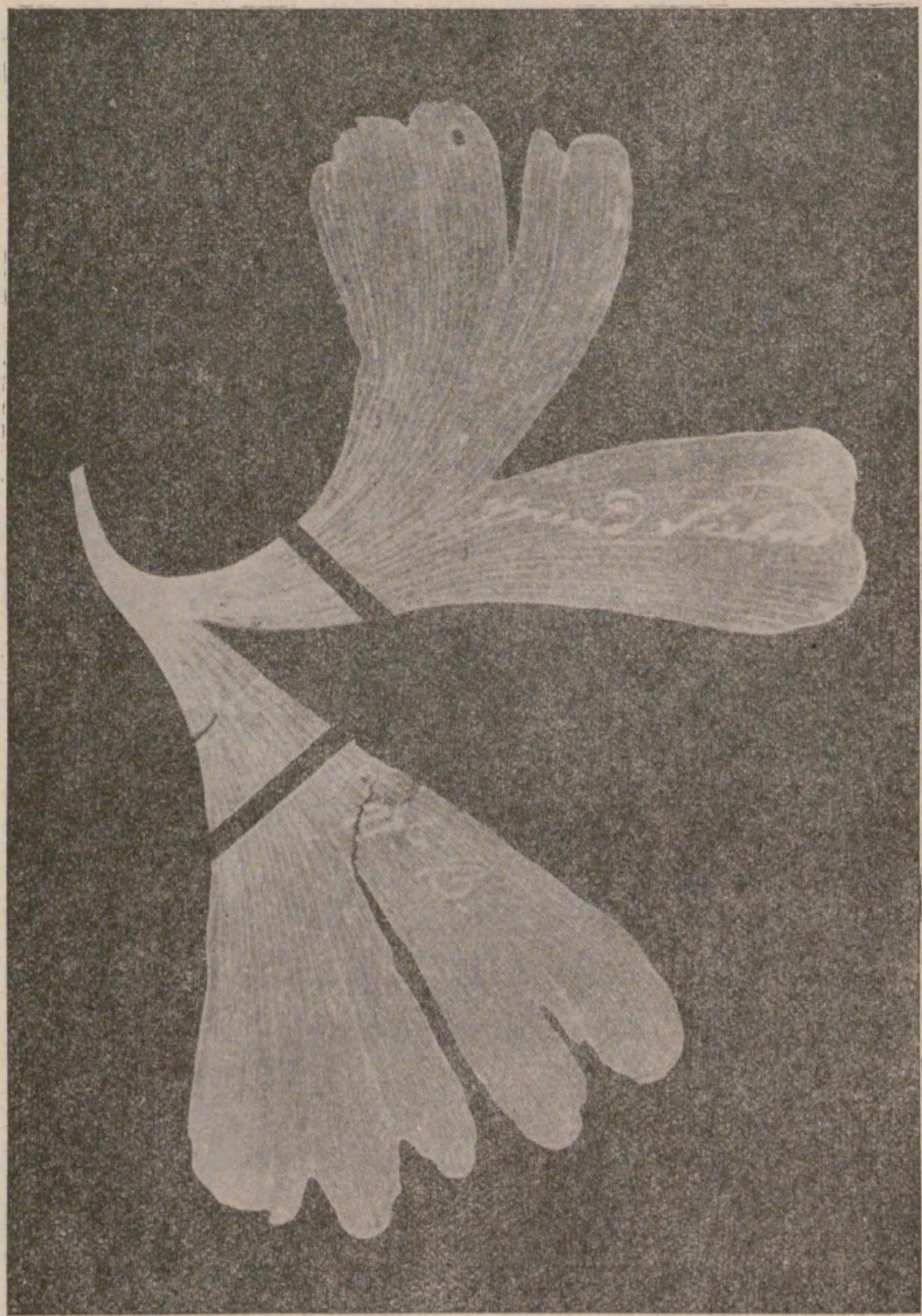
再版本は何によつて第五章以下を補つたか。日本學會所藏の第二版の原稿により、それが「一八二六年江戸參府旅行中の日誌」の寫本によつたことが明らかになつた。而もその寫本は決して原本の忠實な寫でなく、剩へアレキサンダーの筆蹟で往々改竄が加へてある。

「日誌」の原本はフォリオ版紙數百五十九丁、豚の皮の製本で、最初の五十九丁が日誌、その以下は白紙・天候その他の觀測表・雜記の類です。シーボルトの同行者で地質や鑛物の實驗に従

事したドクトル・ビュルゲルの筆になるもの若干を除き、殘餘はシーボルトの一筆よりなる。タイトルページに「一八二六年江戸參府旅行中の日誌、醫學博士フォン・シーボルト」と題し、目次は左の如くです。

- 第一章 長崎から下ノ關までの旅行
- 第二章 下ノ關から室までの旅行
- 第三章 室から大阪までの旅行
- 第四章 大阪から京都までの旅行
- 第五章 京都から江戸までの旅行
- 第六章 江戸滞在
- 第七章 江戸から京都までの歸路
- 第八章 京都滞在
- 第九章 大阪へ向け出發
- 第十章 大阪滞在
- 第十一章 下ノ關への歸路
- 第十二章 下ノ關から長崎への歸路





W. B. は Willem Botanicus 即ち甫賢の葉名の頭字なり

この日誌と「日本」の初版に見える旅行記とは全く別物です。シーボルトが旅行記を書く時、日誌を土臺としたに相違はありますが、一つは旅中匆忙の際心覺までに記したものですから、文章も整はず、略字も多く、項目を列擧したやうな記事のある場合も多くありますが、旅行記は流石後日に執筆したものだけに決してそんなことはありません。旅行記の第一章第二章の如きはその面影をも日記中に認むることは出来ない。かく性質の違つた兩者を第二版の編修者は無遠慮に一緒にしてしまつた。旅行記初版の第二・三・四・五章のあとへ、日誌の第三章以下を繼足し、全篇を勝手に分けて十二章としてしまつた。所謂木に接ぐに竹を以てすで、無法な仕方といはねばなりません。我等はシーボルトの旅行記が半にも到らずして斷れてしまつたことを惜しむと共に、日誌が始から終まで完全に出現したことを悦びます。

シーボルトの遺物は、長男アレキサンダーの家の外、次女マチルデ・アポロニヤの家にも多數傳はつた。マチルデとその夫グスタフ・フォン・ブランデンスタインとの間に生れたアレキサンダー・フォン・ブランデンスタインは、飛行船で有名な伯爵ツェツペリンの獨娘ヘラを娶り、伯爵アレキサンダー・フォン・ブランデンスタイン・ツェツペリンとなつた。同伯爵の所有にかゝるウエルトンベルヒ州ミッテルビーベラッハ城に、シーボルトの草稿・材料・往復文書等數十包あることが、最近に發見せられ、その中から左の三編が補遺に採録せられた。



一、人民文化の發展及び現在の政治組織並びに起原の歴史　これは初版第二部制度政治及び法律篇に掲載せられた同題の論文三―二四頁の續きで、原本三十六丁、全部シーボルトの自筆、表紙に右題目を記し、「一八六一年江戸にて認む、フォン・シーボルト」とあります。初版本の最終の行と本稿の初行との間に闕けてゐる十五行は、再版本の原稿からそれを補つたとトラウツ氏の説明にあります。本篇は再版本に既に全部掲載されてゐますが、著者の自筆原稿から直ちに出版したといふ所に價値があるのです。

二、武器・武器の使用・及び戰術につきて　この項は初版第二部人民及び國家篇にある同題の論文三―五二頁の續きで、原本十一丁。初版には本論文は五二頁の最終行まで掲載せられ、そこで文句がふつり切れてゐますが、再版本には第一卷三六〇頁に、この原本の第一丁の表の文章だけを足して結末をつけてゐます。本篇は第一丁の表即ち再版本に掲載せられた所だけがシーボルトの自筆で、他は別人の筆蹟です。

三、日本の商業につきて　初版第六部日本の商業につきて三―七二頁の續きで原本九丁。最初の十一行がシーボルトの自筆で、他は別人の筆蹟です。この九丁を加へても本論文はやはり完結しません。然るに再版本第一卷二〇六頁には初版本の本文の終に僅々數行を加へて結末をつけてゐます。

以上四篇が補遺に採録せられたシーボルトの遺篇です。而し補遺には以上四篇の外刮目して見るべきものが三つある。第一は「日本」の本文及び挿畫の精細且秩序立つた目錄で、初版及び複製兩方の頁付丁付があります。我等は之によつて始めて大著「日本」の面影を知ることを得るので、クォーリッチの内容對照に優ること數倍といはねばなりません。第二は、初版本・再版本・及び補遺に收めた前記四論文を含む總索引で、二段組二三五頁件數約一萬五千、これによつて我等は必要に應じて大著「日本」の内容を容易に檢出することが出来るやうになつた。それから第三は新に補遺に入れた挿畫二十八丁です。無遠慮にいへばその中一二は無くもがなと思ひますが、大部分は稀有有益なもので、一八三〇年シーボルトが日本に残した愛人そのぎいね母子に與へた片假名の手紙の草稿は、見るたび毎に惻々の情に堪へません。民俗博物館所藏川原登代助の畫帖から採つたといふ二枚の彩色畫「日本人の頭部」「日本の小兒」は特に目を惹きます。

シーボルトの「日本」の初版本は善本を得難きのみか、現在は非常に高價である。再版本は得安いが、それでは大著の眞面目を窺知ることを得ぬ憾がある。今度トラウツ氏及びワッスムート會社の協力によつて成就した完全な初版本の複製と補遺の新刊とにより、「日本」を了解し、また日本を了解してくれる人が殖えるだらう。我等が感謝慶賀措かざる所以は實に此に存する。



## 和蘭王キルレム二世の書翰

—

一八四四年八月十五日（弘化元年七月二日）和蘭の軍艦パレンバンは、國王キルレム二世から大日本皇帝陛下に宛てた親書を齎らして長崎へ入つた。この書翰の原文はフ・ハン・デル・ハイスの「日本を世界貿易に開いた和蘭の盡力」四七頁以下に、また譯文は天文方澁川六藏の手に成つたものが種々の書物に載つてゐるが、この外天文方山路彌左衛門の翻譯及び長崎通詞森山源左衛門同榮之助連名の翻譯が向山誠齋の丁未雜記卷十九にあります。澁川及び山路の翻譯は何時出來たか不明ですが、森川の分には巳四月即ち弘化二年四月とありますから、澁川や山路の翻譯より後で出來たものと考へられます。

書翰の大意は冒頭に日蘭多年の親交を説き、それから歐洲の産業革命から生ずる外國貿易の進出、英吉利と支那とが鴉片問題で衝突したことを述べ、日本の近海に外國船が多く來るのは必然



和蘭王キルレム二世肖像

東京九段遊就館蔵



## 和蘭王キルレム二世の書翰

一八四四年八月十五日（弘化元年七月二日）和蘭の軍艦パレンバンは、國王キルレム二世から大日本皇帝陛下に宛てた親書を齎らして長崎へ入った。この書翰の原文はフ・ハン・デル・ハイスの「日本を世界貿易に開いた和蘭の盡力」四七頁以下に、また譯文は天文方澁川六藏の手に成つたものが種々の書物に載つてゐるが、この外天文方山路彌左衛門の翻譯及び長崎通詞森山源左衛門同榮之助連名の翻譯が向山誠齋の丁未雜記卷十九にあります。澁川及び山路の翻譯は何時出來たか不明ですが、森川の分には巳四月即ち弘化二年四月とありますから、澁川や山路の翻譯より後で出來たものと考へられます。

書翰の大意は冒頭に日蘭多年の親交を説き、それから歐洲の産業革命から生ずる外國貿易の進出、英吉利と支那とが鴉片問題で衝突したことを述べ、日本の近海に外國船が多く來るのは必然

和蘭王キルレム二世肖像

東京九段遊就館藏



和蘭王キルレム二世の書翰

一

一八四四年八月十五日（弘化元年七月二日）和蘭の軍艦バレンバンは、國王キルレム二世から大  
日本皇帝陛下に宛てた親書を齎して長崎へ入つた。この書翰の原文は、東京は、羽釜、藤前、ル・ハイスの  
「日本を世界貿易に開いた和蘭の盡力」四七頁以下に、また譯文は天文方澁川六藏の手に成つた  
ものが種々の書物に載つてゐるが、この外天文方山路彌左衛門の翻譯及び長崎通詞森山源左衛門  
同榮之助連名の翻譯が向山誠齋の「未雜記」卷十九にあります。澁川及び山路の翻譯は何時出來た  
か不明ですが、森川の分には巳四月即ち弘化二年四月とありますから、澁川や山路の翻譯より後  
で出來たものと考へられます。

書翰の大意は冒頭に日蘭多年の親交を説き、それから歐洲の産業革命から生ずる外國貿易の進  
出、英吉利と支那とが鴉片問題で衝突したことを述べ、日本の近海に外國船が多く來るのは必然





の勢で、それらと衝突の結果戦争を生じたら、災害測るべからざるものがあらう。これを未然に避けるは賢者の處置である。日本は早く外人嚴禁の法を弛めたまへといふ意味です。「是素より誠意に出る所にして我國の利を謀るにはあらず」といふ文句から見ても、和蘭の好意は充分推察せられます。

パレンバンは軍艦である。從來往來した商船とは相違するから、その待遇をどうするかといふ交渉が、同艦入港に先ち、時の和蘭商館長ピーター・アルベルト・ビックと長崎奉行伊澤美作守との間に始まつた。館長からは、(一)乗組員の身體検査廢止、(二)士官の帶劍、(三)各人身分調査の廢止、武器彈藥引渡の廢止、(四)軍艦と出島との往來の自由、(五)祝砲の交換を中立てたが、武器彈藥の引渡廢止と祝砲の交換とは奉行所側でどうしても承知せぬので、これは江戸伺となつた。今から見れば何んでもないことを、當時は事難かしく取扱つたものと苦笑に堪へぬが、それから十數年、日英通商條約を調印した一八五八年八月廿六日の午後、英國女王ビクトリヤから將軍に贈られたヨットの引渡が濟み、英國旗が下りて日の丸の旗がする／＼と上ると、それを合圖に、日本の砲手が完全な正確さを以て、十秒毎に祝砲二十一發を放つたといふ英人の手記を見て、吾人は日本の進歩の迅速なのに微笑を禁じ得ぬ。

外國船は長崎港出入に際し、一旦高鉾島に假泊する例である。パレンバンは高鉾島から出島屋



敷の前面に移らうと願つたが、武器彈藥引渡の問題が片附かぬので奉行所で承知せぬ。然し高鉾島が安全な錨地でないことは明白なので、西泊御番所の前面へ移ることを許した(八月十九日)。和蘭軍艦は長崎入港といふ第一難關を通過した。それでこの勢に乗じて國王の書翰及び贈物を出島に陸揚すべしといふ考で、その趣を和蘭側から申出でた所、右は江戸表へ伺中であるから御沙汰のあるまで待てといふ挨拶で、漸く九月十二日に江戸表の御指圖として書翰贈物陸揚許可の旨が通達せられ、同時に祝砲發射は絶對禁止、武器彈藥引渡の儀は追つて沙汰すべしとあつた。よつて十五日に鄭重な儀式の下に陸揚を行つた。その次第書は、館長ビツクから奉行所に差出した書面に委しく見えてゐます。

一かひたん・へとる・并筆者阿蘭陀人てをるふ一同、本國船を爲迎差越候端船にて前廣乗船仕度奉存候。

一本船えかひたん罷越候上、主役に對し及挨拶候趣意は、御大切の書翰是迄御持越、無恙出嶋前御着相成候との祝詞可申述積候。

一國王を差越候書翰は銀器に納メ、緋天鷲絨拵の物を覆着、又其上をマホーニーホウ製小箱に入、亦是を箱に入、密封シ、主役をかひたんに、船上にて諸士官其外に至る迄威儀を正し拜見仕せ候積に候。

一右日本ケイヅルえ和蘭國王を奉捧候書翰、本船を卸候節、祝砲貳拾壹發仕度奉希候。

一右儀式相濟候上、主役・かひたん・へとる・筆者阿蘭陀人其外本國船士官の者共一同附添、貳三艘の端船にて出嶋え上陸仕候節、當出嶋商館役掛り阿蘭陀人共通詞衆一同、水門迄罷出候様仕度奉希候。

一右惣人數一同かひたん部屋に罷越可申候。

一右書翰箱の儀は出嶋え持越候上、阿蘭陀人兩人にてかひたん部屋奥の間え持越、江戸表を御下知御座候迄、其儘差置候積に御座候。

一献貢の品々箱入の儘何卒右書翰一同端船を以船卸シ仕度、其節は右掛り海方兵士ユレンベ一キ差越候積に候。是又かひたん部屋奥の間え備置申度奉存候。(以下二項は略す)

一別段謹て奉願候。若相叶候儀に御座候は、御當國御身柄の御役人様御立合にも相成候得は、面目にも相成候儀に付、可然様偏奉願候。

文中かびたんは商館長の通稱、へとるはピーター某の略でせうが、當時の商館員名簿を手にしぬ限り、判然とは申しかねます。一八四二年の役員名簿に助手ペー・エー・ランゲといふものがゐます。或はこの人でせう。てをるふはド・オルフ同人です。今日の和蘭語と當時の和蘭語と發音が相違したか、假令發音に相違はなくとも、これを日本の假字で表現する方法は確に違つてゐ



るといへます。主役は今の艦長に當る、パレンパンの艦長は名前をハー・ハー・エフ・コーブスといひました。マホーニーハウはマホニー・ハウト即ちマホガニー木で、この項で親書の外部の裝飾が多少なりと知られます。ケイズルはカイゼルで皇帝の意ですが、將軍を指して皇帝といふのは古くからの外國人の間違です。但し本項にある祝砲の件は實施せられませなんだ。海方兵士ユレンベークは、正しくいへばオー・アー・ウーレンベックで、身分は海軍二等尉官、艦長コープスが親書の送付を擔任してゐるやうに、この人は贈物の送付を擔任してゐます。それから末項の日本官吏臨席の件は聽届けられたが、ハイスの著書に生憎人名を載せず、單に幕府の下目付兩名・同下番衆一名・町年寄兩名・大小通詞若干名・及び出島の第一の乙名とあるだけです。

書翰と贈物との陸揚は濟んだ。残る所はこれを無事に長崎奉行に引渡せば宜いのである。幕府では書翰は商館長差添の上、使節をして奉行所に持參せしめ、奉行において御目付平賀三五郎立會の上請取り、同人歸府の節持參すること。書翰の趣意明白ならざる限り、贈物の納否は決定し難きを以て、差當りその儘とし、他日の差圖を待つべき旨、商館長へ申諭すべしと決し、その命令が九月十二日に長崎へ到着した。

日本側では書翰請取の準備を進め、大體文化度露西亞使節應接の例に法り、然も幾分簡略にする方針を採つた。先づ書翰の請取場所を立山の役所と定め、出島から同所に至るまでの警固を松

平肥前守（佐賀藩主）松平美濃守（福岡藩主）に、立山役所の警固を大村丹後守（大村藩主）に命じ、又年番町年寄・掛り町年寄・與力等へそれ／＼取締上の注意を命じた。それから和蘭側に對して行列等の手續を問合はせた所、館長艦長協議の上左の如く申出でた。

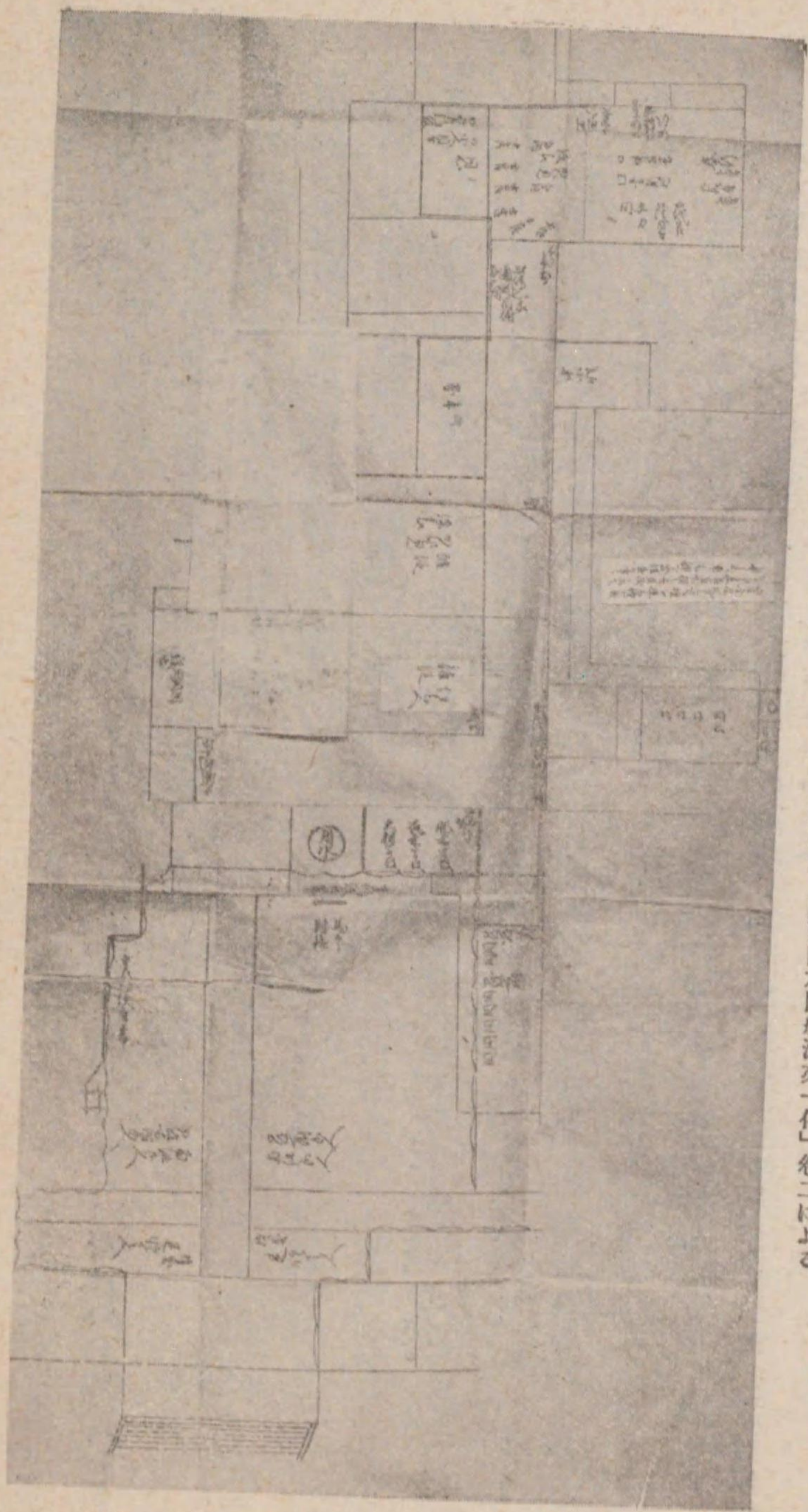
- 第一 音樂方先立と相成申候。
- 第二 和蘭國王旗を爲持申候。
- 第三 書翰箱并右鑑箱持せ候事。
- 第四 軍令司將官・かひたん・士官・并商賣方役掛り阿蘭陀人列を正し罷越申候。  
附 將官并かひたんの駕籠脇え部屋働のもの附添申候。
- 第五 出嶋御門御開門相成候を罷通候。
- 第六 御役所御開門に相成候を罷通候。
- 第七 音樂方并旗持は御役所御門外に罷在候敷、又は御立關脇に罷在申候。
- 第八 書翰箱は御立關前におゐて士分のもの請取、御開内え御設相成居候三寶に乗置可申候。
- 第九 御奉行様御目付様え御辭儀の儀は歐羅巴流に仕申候。
- 第十 軍令司將官并かひたん御開内書翰三寶前に罷出、其後方に士官役掛りの向罷出申候。
- 第十一 軍令司將官御奉行様御目付様御機嫌伺口上申述、右御答御口上相濟候上、書翰の鑑



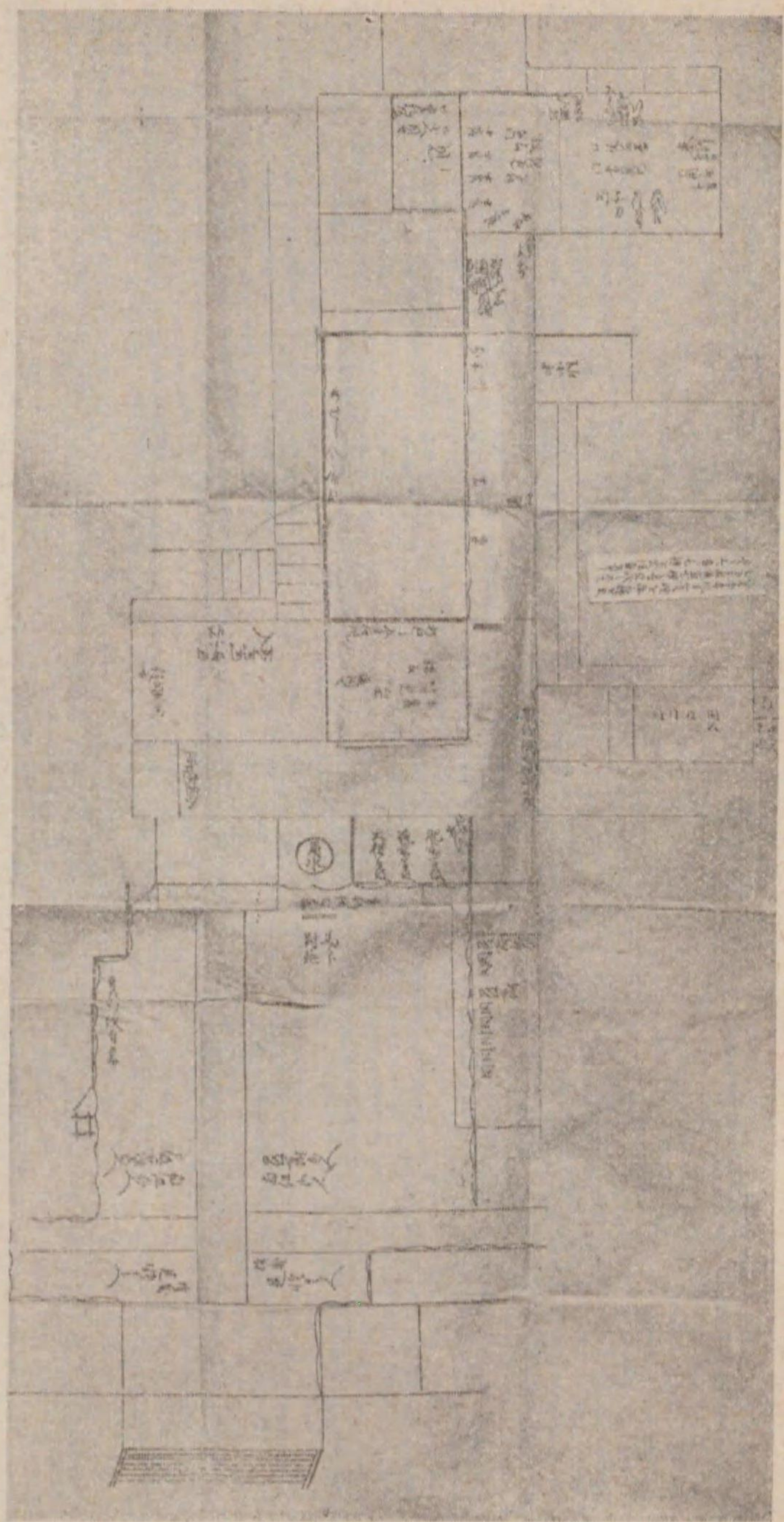
箱を差出、書翰箱を指し、口上可申述候。

第十二 萬端相濟候上、歸路の儀も往路同様の振合にて出嶋に歸館可致候。  
立山役所和蘭使節應接開取之圖 (其二)

東京商科大学蔵本「阿蘭陀本國船渡來一件」卷二による



同上 (其二)



然しこの次第書はそのまゝ通らない。音楽は出島内で一二曲を奏し、門外から立山役所までは奏樂を差控へよ。随従の士官を十六人とし、その中二人は使節に従つて書院へ入り、その他は最







右は使節の口上として日本側に傳へる所ですが、和蘭側の記録と少し相違してゐます。それには「從來既に館長より上申いたしたことはあるが、自分はこの際明白に繰返す必要を感じる。この親書は和蘭の貿易について毫も關係を持つてゐない。たゞ和蘭王が日本皇帝陛下に對する友情、及び支那に最近起つた戦争につき、和蘭王が日本國の安全に對する憂慮の眞の結果である」とあります。口上は彼我の間に豫め打合はせてあつた筈ですから、相違する理由は無いのですが、多分通詞が原文の意味を多少變更して前掲の日本語としてしまつたのでせう。

美作守の返答は極めて簡單です。「國王の書翰慥に請取、江府え差上可申間、追ての御沙汰相待べし」。そこで今度は館長から館長使節兩名の名で謝意を表し、「猶乍此上萬端宜相整候様謹て奉願候」といひ、奉行は「口上之趣入念の事に候」と答へ、これで式はお仕舞です。至極簡單ではあつたが、和蘭側では通詞を介して奉行と直接に談話したことを悦び、奉行が親書請取方に禮儀を示したは、親書を重大と認めたからである。すべてが歐羅巴風に行はれたといつて、大いに悦んだ。

これから親書がどんな風に江戸に持參されたか、親書と別々になつた贈物は何時幕府の受納する所となつたか、親書に對する幕府の回答はどうなつたか。お話しすべきことは澤山ありますが、またの機會に譲りませう。(昭和八年二月)

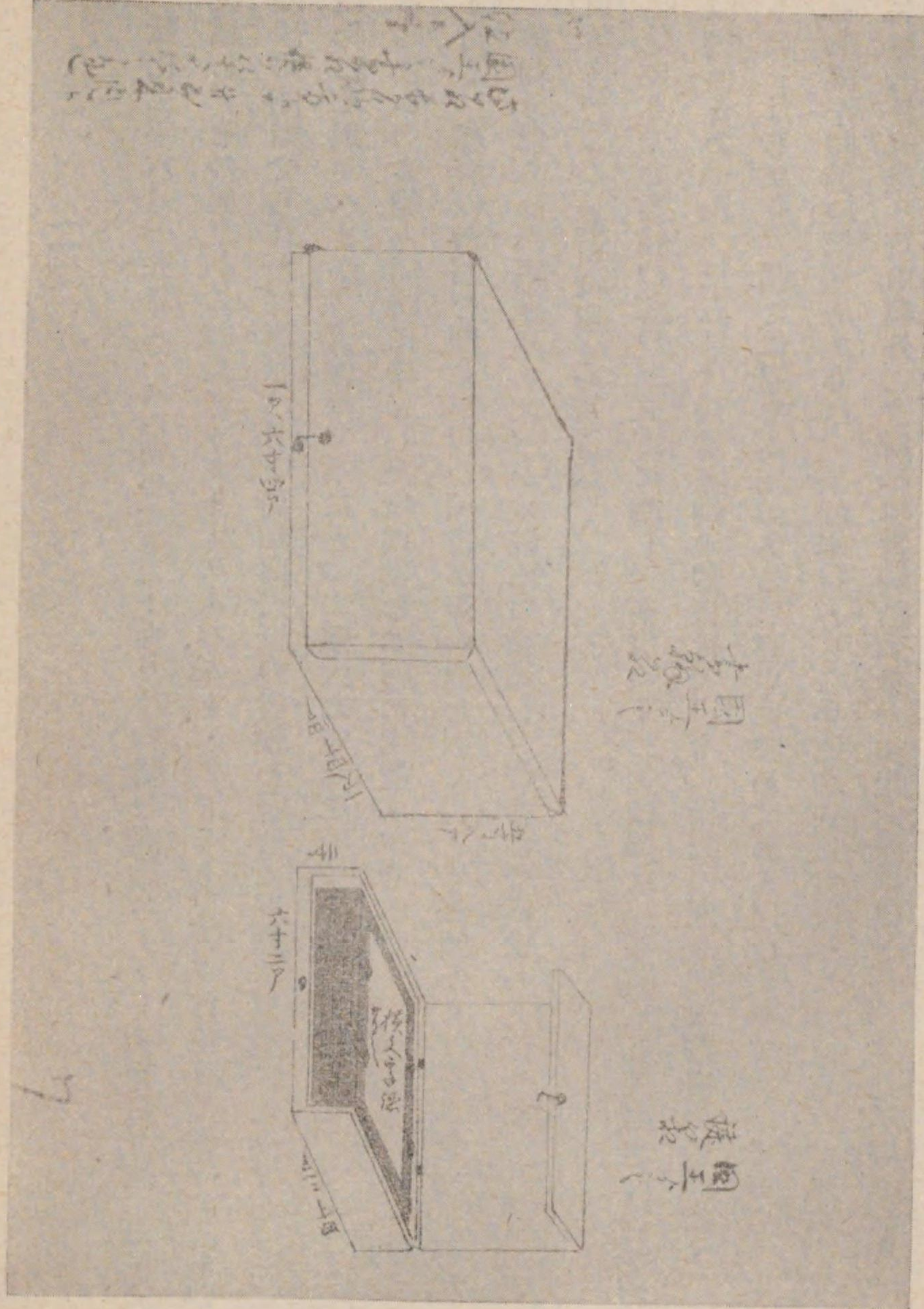
## 二

弘化元年六月十五日(一八四四年七月二十九日) 和蘭の商船スタット・チェル號が出島の前面に投錨し、その翌日から館長ピーター・アルベルト・ビックと長崎奉行伊澤美作守との間に頻繁な交渉が開始せられた。西曆八月上旬和蘭國王の書翰を載せた軍艦が長崎に入港する、その軍艦を如何に取扱ふべきか。書翰は日本にとつて重大な意味を有するものと稱する、これを如何に請取るべきか。書翰と同時に持參した獻貢物を如何に處置すべきか等々、問題は次から次へと發展して行く。幕府の指圖を仰ぐ奉行の伺書が櫛の齒を引くごとく長崎から江戸へ急送された。

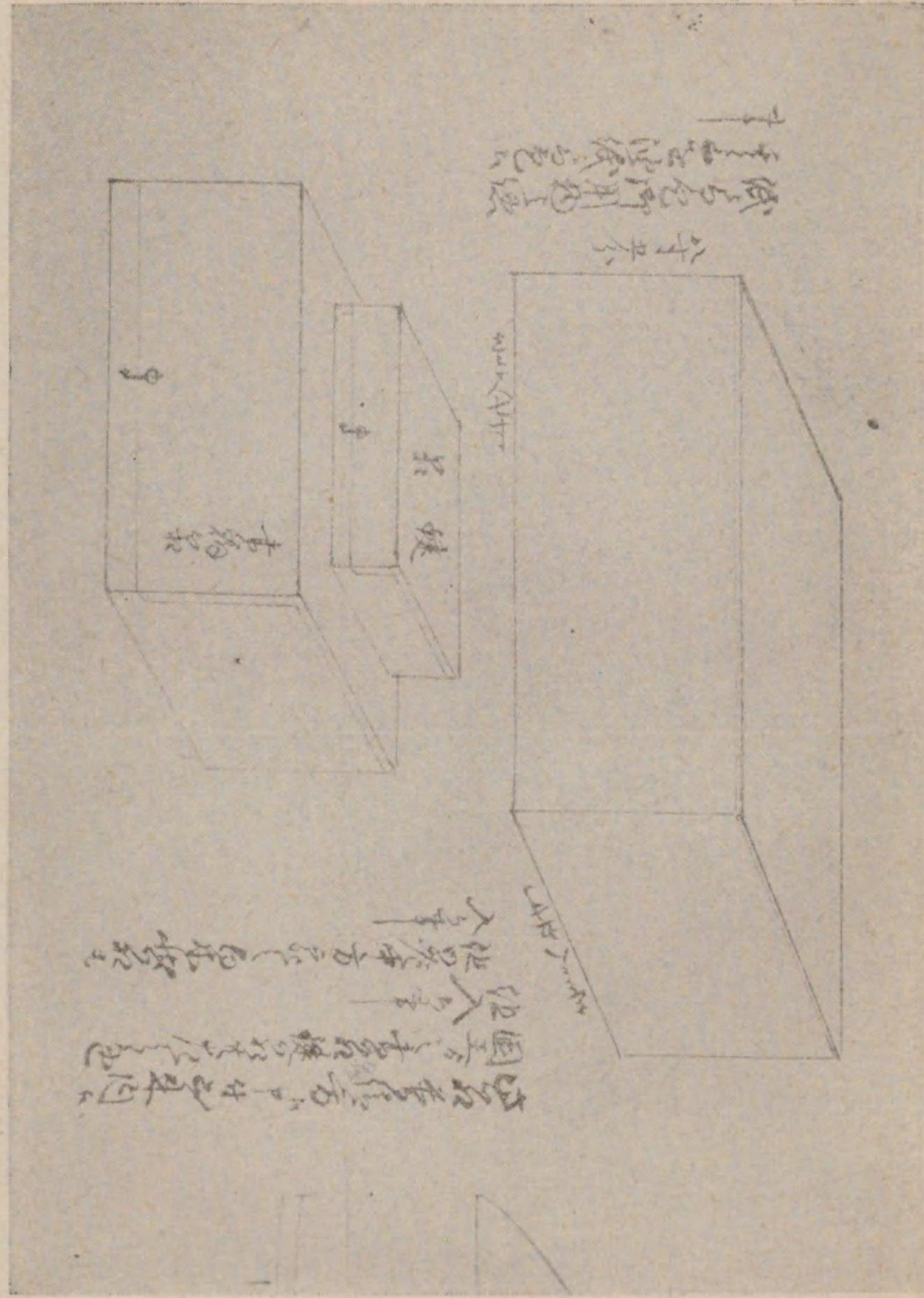
書翰を齎らした軍艦パレンバンは港内に投錨し、親書の受渡は八月二十日(十月一日、以下一々西曆を註せず)立山役所で無事に濟んだ。

是より先き書翰の江戸差立方に關し、幕府の下した指圖は「平賀三五郎歸府の節持參候様可被致候」とあつた。三五郎は長崎在勤の御目付で、もし指圖の通り同人歸府の節持參するとせば本年十一月となり、遲きに過ぐる虞がある。書中に認めてある所は定めて多端であらうが、萬一外國船渡來防備の簡條もあらば、長崎奉行として早速承知して置かねばならぬ。殊に去年十月及び本年三月琉球八重山嶋外二ヶ所へ英吉利船到着、和親通商を強請し、甚だ不穩の有様であつた。



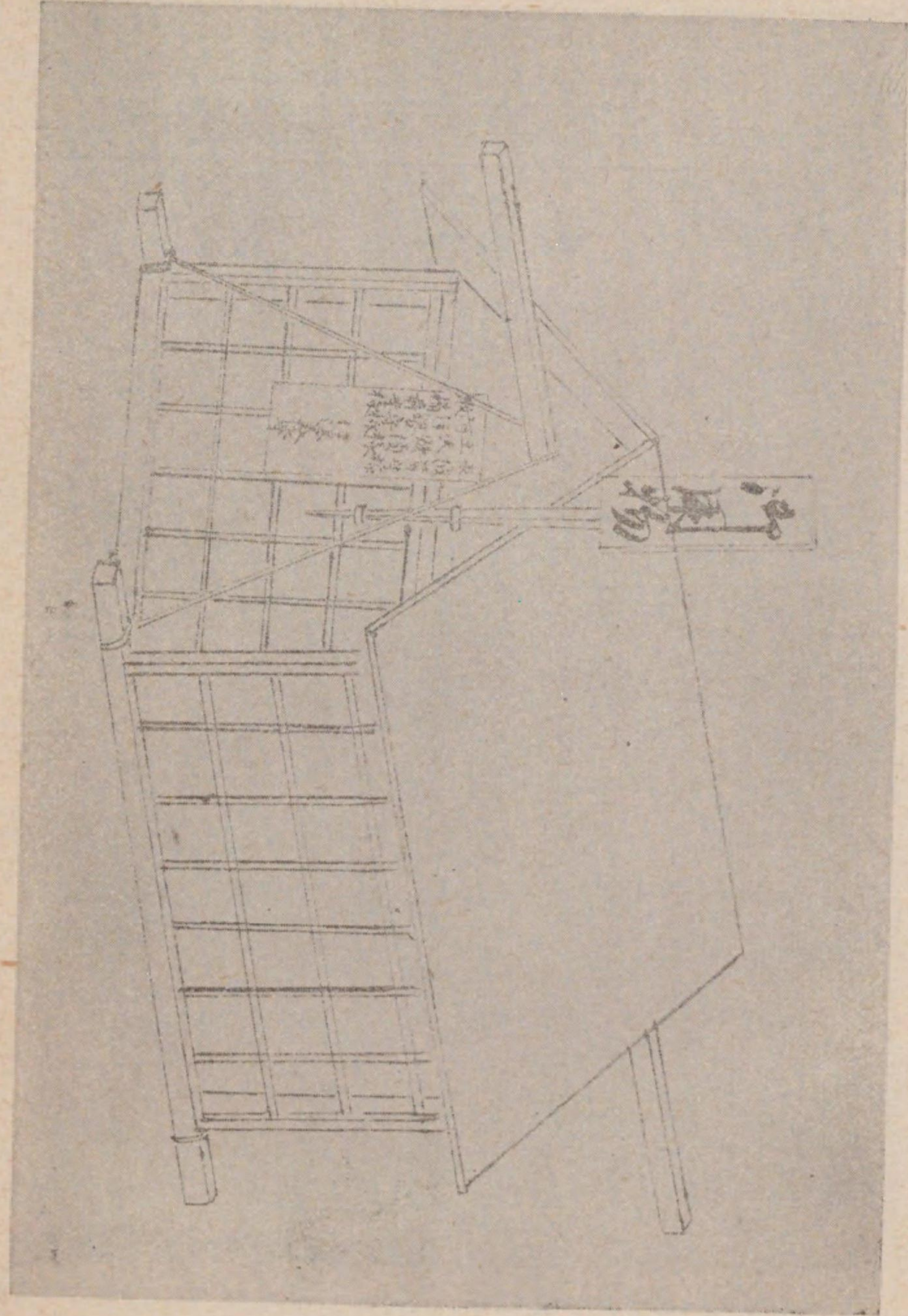


和蘭國王よりの書翰箱及び鍵箱  
 東京商科大学藏本「阿蘭陀本國船渡來一件」卷二による 以下二圖とも同圖



但御老中方宛の白木狀箱も入候事  
 候事  
 此箱普請方え申付出来、内に國王よりの鍵箱書翰箱共左之通組入





そこで奉行美作守は、蘭王の書翰は奉行所にて開封し、通詞共に誓詞をなさしめた上和解せしめ、急便を以てその寫を差上げ、本書は三五郎歸府の節持参するやうにと考へ、その旨を江戸へ申立てた所、右書面がまだ江戸へ届かぬ中に、江戸から改めて命令が来た。三五郎歸府の節持参云々といふのは國王の書翰を重んじた次第であるが、それでは時期遅延の恐がある。よつて地役人を附添とし道中異變なきやう警固の上早々差越すべしとあつた。

八月十六日(九月二十七日)奉行所では與力平田音三郎・同心馬場五郎左衛門・御役所附小川熊右衛門・同助溝江群之進・阿蘭陀小通詞西記志十を呼出して書翰附添方を命じ、音三郎を一行の主任とし、また記志十には江戸において外御用も仰せ付けられるであらうから、豫めその意を帶し、入念勤務せよと命じた。

急速な御用であり、また大切な御用である。音三郎等は(一)書翰附添えもの御暇、(二)國王よりの書翰差添心得方、(三)道中宿割、(四)國王よりの書翰道中心得方、(五)道中先觸案等を差出し、或は指令を仰ぎ、或は許可を求めた。

(三)によると行列は

御役所附壹人 馬場五郎左衛門

書翰 平田音三郎

紅毛 通詞 御役所附一人  
但跡役心得



の順序で一行僅に五人であるが、銘々従者を伴ひ、且つ御用物は勿論各自の荷物のために、若干の人夫を要するから、それらを加へると數十名に上る。ここに音三郎の道中先觸案(五)を用して當時を偲ぼう。

覺

平田音三郎

一具足櫃

壹荷 但人足壹人

一引戸駕籠

壹挺 但人足三人

一兩掛

壹荷 但人足壹人

一合羽籠

壹荷 但人足壹人

都合人足六人

一木馬

壹疋

長崎御役所附

小川熊右衛門

溝江群之進

一垂駕籠

貳挺 但人足四人

一兩掛

壹荷 但人足壹人

都合五人

覺

長崎奉行證文

一御用物

壹荷 此人足貳人

右は我等儀此度御用物差添、就御用江府表え御差立に付附添、明廿一日長崎表出立、其筋通行いたし候條、長崎奉行證文御用物人足の外、書面の人馬御定の賃錢請取之、無遲滞繼立之、渡海川越等の場所は前後の宿々申合、差支無之様可取斗候。尤休泊の儀は別紙の通に付其旨相心得、木錢米代相拂候間、賄の儀は一什一菜の外、馳走々間敷儀無之様、所有合の品を以可取賄候。此先觸早々順達、大阪銅座役人爲川住之助方え可相届候。以上。

長崎奉行組與力

平田音三郎

從長崎九州路宿々  
中國筋大阪迄

問屋中



休泊〇略す

追而平田音三郎上下五人（後に六人となる）、馬場五郎左衛門上下貳人、小川熊右衛門溝江群之進は上下四人之積候條、旅宿壹軒用意可申候。休泊とも一同合宿いたし候様可取斗候。尤差支時宜に寄候ては別宿等取斗可置候。以上。

道中宿割（三）によると、一行は八月廿一日長崎を發し、矢上に休んで大村に泊り、それから順路日數を重ね、九月廿二日江戸着の豫定であるが、着後御用物に附添ひ、老中阿部伊勢守の許に至り、音三郎より取次へ申込んだ上、御用物を其の筋の者に渡し、請取書を取り、當日右の趣を勘定奉行戸川播磨守に届出づること、勿論右の手續は小田原邊で播磨守の用人宛に通告すること、但し伊勢守方へ參向の節は麻上下服紗小袖たるべきこと（二）にある。道中は音三郎以下御役所附に至るまで羽織袴ですから、伊勢守方へ往く時禮服に改めよといふ意味です。

さて肝要の御用物はどうかといふに、書翰箱と別々に外箱を作り、別に大きな箱を作つて、右の二箱と奉行から老中宛の書面二通を入れた白木の狀箱とを納め、これを圖の如き輿に載せて人足に擔がせたのである。フ・ハン・デル・ハイスの「日本を世界に開いた和蘭の盡力」によると、國王の親書は羊皮紙ペルカメントに書かれ、封印として一方に國王の半身像、一方に和蘭の紋章を表はしたメダルが附いてゐる。それを銀の箱に收め、緋天鷲絨の袋に入れ、マホガニーの箱に入れ、錠前付

の木箱に收められたとあります。今度その上に更に二重の外箱を作つた譯ですから、彼我共に鄭重を盡くしたと言はなければなりません。

奉行伊澤美作守から老中連名へあてて差出した二通の手紙の中、一通は形式的のもので、要件は他の一通に認めてある。その文面は親書の江戸差立方に關する從來の顛末を略叙し、愈々昨二十日請取方を濟ませた故、早速與力同心等を附添として差立てる。書翰箱並びに鍵箱の上にある横文字の和解も同封で差上げるといふに過ぎませんが、最後に西記志十を送つた理由が説明してある。即ち國王の書翰和解の御用、または幕府より答書または書取を交附せられたる場合、和文を蘭文に翻譯する御用等に備へんためだとあります。

音三郎の一行は廿一日御用物に附添つて長崎を出發、九月七日豫定の如く大阪へ到着した。「毎日七ツ時前後出立、夜に入り宿々に着仕候」とあれば、中々の勉強であつた。大阪までは長崎奉行の宿次次船證文で宿々から御用物の人足を差出さしめたが、大阪から江戸までの所は類例が無いので、豫め長崎奉行から大阪町奉行に向ひ、城代青山下野守の證文を得て音三郎に渡すやうにと掛合つてあつたので、大阪に入るや音三郎は早速月番町奉行所久須美佐渡守の役宅に向き、到着を届出で、翌朝佐渡守に面會して城代の證文を請取り、順路東海道を下つた。御用物引渡の手續は小田原邊から播磨守に掛合ふ筈であつたが、播磨守が轉任して石河土佐守



が任命せられたと聞き、音三郎は土佐守の用人宛に書面を差出し、尙返答請取方の便宜を考へ、川崎泊の豫定を廢して、品川泊とした。廿一日川崎まで来てその返書を請取り、それによつて品川泊をも廢めて直ちに江戸へ乗込み、旅宿長崎屋源右衛門方に着、音三郎は早速土佐守役宅に伺候した所、御用物請取方は明日土佐守登城の上決定するを以て、旅宿に引下つてその沙汰を待つべしと面命せられた。

土佐守よりの沙汰に、御用物は明廿三日五ツ時堀大和守殿御宅へ差出すべし、附添のもの一同麻上下服紗小袖着用罷出づべしとあつた。當日馬場五郎左衛門は病氣不參、その餘平田音三郎・小川熊右衛門・溝江群之進・西記志十一同打揃ひ大和守宅へ出張、使者の間に控へてゐると、そこへ御勘定組頭塚越藤助・御勘定龍崎大助・黒川誠三郎兩名出席し、やや遅れて勘定奉行石河土佐守出仕、土佐守は藤助立會の上御用物を直に請取られた。右畢つてから音三郎は大和守の用人に面會し、大阪城代並びに長崎奉行の宿次證文二通を渡して退散、それから一同土佐守宅に廻つて御用物滞りなく納付の禮を述べた。

これで彼等の重大使命は濟んだのである。月餘の斷えざる配慮から解放せられべきであるが、氣の毒にも彼等は談話外出の自由を奪はれた。親類知己たりとも面談すべからず、また他行すべからずと申渡され、銘々請書を差出し、長崎屋の入口に番人を置いて出入を糺すことになつた。

長崎表の風聞が人心を騒がすことを恐れた幕府の遠慮によるものに違ひない。

同夜塚越藤助から音三郎に宛て、明廿四日西記志十登城の上誓詞仰付けられるを以て、同人に差添ひ出頭すべしといふ書面が來た。よつて兩名は廿四日西丸御勘定所に赴き、記志十は燒火の間入側で大目付渡邊能登守・目付阪井右近・御勘定組頭塚越藤助立會の上誓詞をした。これは同人に國書和解の大任を命じようとする前觸で、音三郎も誓詞立會見届を命ぜられた。

誓詞が濟んでから、記志十は林大學頭の許へ行けと言はれ、單獨で出掛けた。然るに歸宿後同人の様子が尋常でなく、過言廣言全く亂心の體である。一同大いに心痛し、病中の五郎左衛門をも呼寄せ、評議の上、廿六日になつて音三郎自身塚越藤助宅へ赴き、記志十一件を具に申立てた所、委細は拙者から土佐守殿へ申上げる、貴殿は御城へ行つて後刻の御沙汰を待たれよと言はれた。音三郎は早速その命に従つて控へてゐると、夕七ツ時になつて前記藤助並びに黒川誠三郎兩名から、土佐守殿の御内意として、記志十病氣につき和解御免の願を出すやうにと傳へられた。

音三郎は旅宿へ引取り、御役所附の小川溝江兩人をして先づその旨を記志十に告げしめたが當人一向承知せぬ。音三郎の口から論じて見たが矢張承知せぬ。止むことを得ず音三郎から右の次第を土佐守に直々言上した所、大切の儀、再應説諭するやうにと沙汰せられたので、一同思案を凝らし、記志十隨從の筆者(書記の義)へも申含め、表裏から種々理解を加へ、やうやう廿七日朝



になつて承知したので早速病氣につき和解御免の書面を差出させ、それを音三郎が御勘定所へ持参した。

蘭文和譯また和文蘭譯が充分出来、天晴れ御用に立つ者として長崎奉行から推薦された西記志十が、どうして急に「過言」に及び、「廣言」を吐き、「前後不揃の氣合」となつたか。彼は林大學頭の面前で「容易ならざる儀」を言つたと、土佐守が塚越藤助へ物語つたのを、藤助から又聞きしたと、音三郎が長崎へ歸つてから差出した手續書にある。さうしてこの書類の外に記志十の容體を記したものが無い故、同人の狂人染みた言行は、何か深い原因があつてのことか、或は突發のことか、判断を下す譯に行かぬ。但し記志十が和解御免を願出でたため、蘭王の親書の翻譯は天文方澁川六藏の手に移つたに相違ないと思ふ。

記志十は戸塚静海の治療を受け、又江戸着以來養生所醫師昆泰仲の療養を受けた馬場五郎左衛門は十月末全快に及んだ。一行は度々懸御勘定組頭及び御勘定方へ御暇の儀を伺出たが、やうやく十一月二十日に至り、音三郎・五郎左衛門兩名焼火の間御入側に召出され、御用物附添道中骨折りたるにつき褒美として、前者に銀五枚、後者に銀貳枚、御役所附及び通詞に右同斷銀二枚づつを賜ふ旨の沙汰があつた。それから廿九日一同土佐守宅に赴き、面會の上暇乞をした。この日五郎左衛門は不快にて不参した。

一行は十二月朔日江戸を發し、十八日大阪着、弘化二年正月十四日無事長崎に歸り、町奉行所に出頭し、音三郎から「道中共外勤筋手續書」と題した報告書を提出した。奉行美作守は音三郎五郎左衛門を居間に召し、道中共外太儀の旨を申渡し、御役所附小川熊右衛門溝江群之進は翌日目通の上同様の賞詞を蒙つた。尤も小通詞西記志十は病中につき直ちに同人宅へ引取らしめ、目通のことは無かつた。

以上の記事は伊澤美作守勤役中の手控「阿蘭陀本國船渡來一件」四冊によつたもので、就中同書第四冊に採録されてゐる前記の「手續書」によつた所が甚だ多い。(昭和八年七月)



赤松大三郎

自分は嘗て「和蘭に於ける日本最初の留學生」と題して、西周助（後、周、男爵）津田眞一郎（後、眞道、男爵）兩名がライデン大學教授フィッセルングについて刻苦勉強したことを書いたが、近頃西や津田と同時に和蘭に留學した赤松大三郎（後、則良、男爵）の「半生談」中、和蘭留學時代の一篇を令嗣範一氏の厚意によつて借覽し、綿々として感興の盡きざるを覺えた。よつてこの一文を作る。本文中半生談の文章をそのまま引用した場合には上下に「」を附けた。

文久二年三月幕府から和蘭留學を命ぜられたは、士分のもの九名、水夫職工六名、合計十五名であつた。彼等は長崎から和蘭船に乗じてバタビヤへ向つたが、ジャバ海で難船して無人島に上陸する等、散々辛苦の後、やつとバタビヤに安着、そこでテルナーテ號に乗換へた。この船は喜望岬を廻つて歐洲へ向ふ航路を取つたので、一行はマダガスカル島附近で文久三年の元旦を迎へ、大西洋に入つてセント・ヘレナ島に立寄り、四月十六日始めて和蘭のブラウワースハーフェンに



赤松大三郎と榎本釜次郎



赤松大三郎

男爵赤松範一氏藏



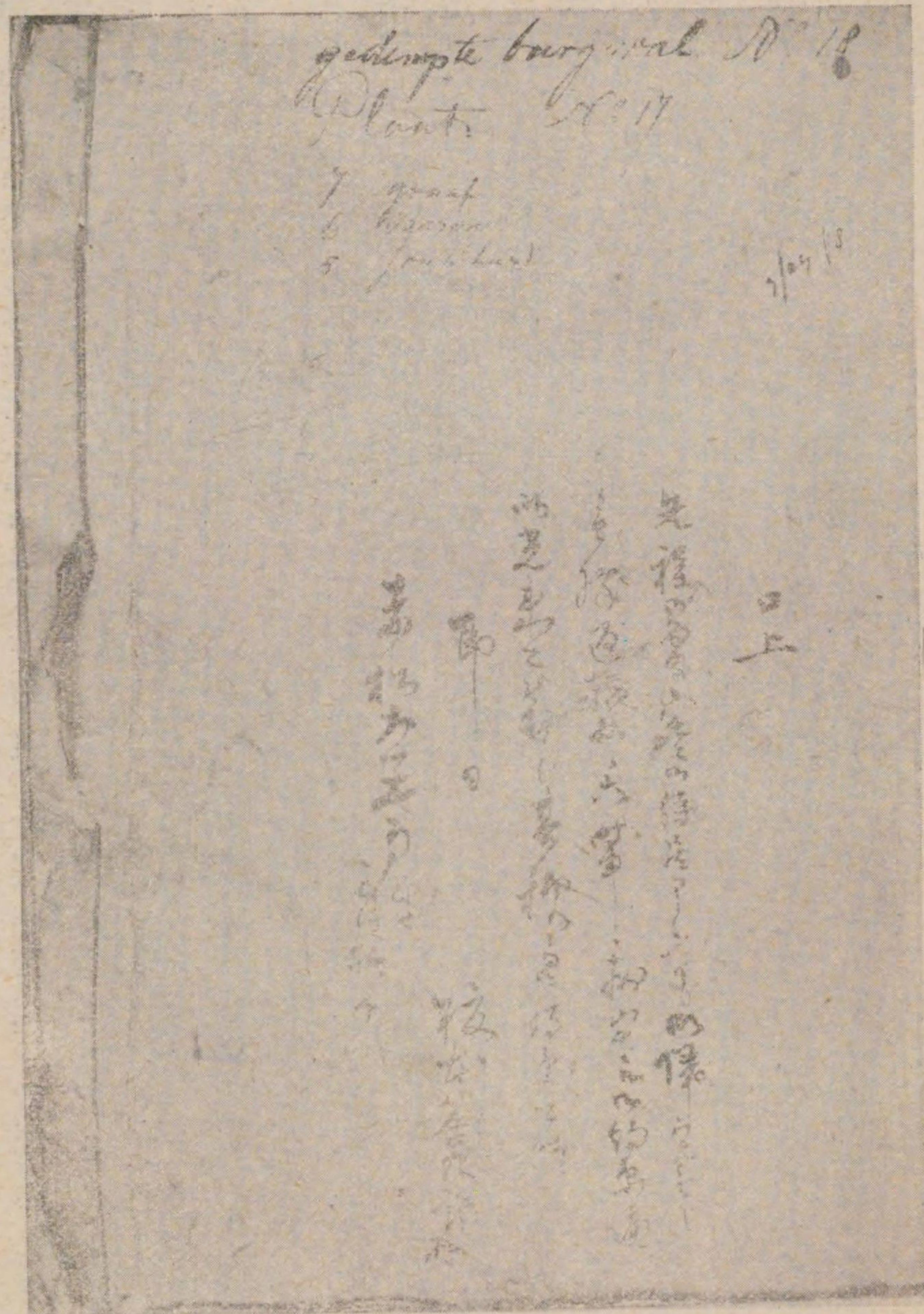
入港したのである。翌十七日は曳船でヘレフトスロイスに進み、同所假泊、十八日は馬二十頭を用ひ、岸に沿うて本船を曳かせ、河を遡つて夕刻ロッテルダムの河岸に横付となつた。

和蘭政府から日本留學生の世話掛を命ぜられたエー・エー・ホフマンの案内で、一行は二頭曳の馬車五輛に分乗して停車場に到り、ライデン行の汽車に乗込んだ。沿道の重なる家々では日蘭の國旗を掲げ、群集は雲霞の如く押寄せ、警官の制止で辛うじて馬車を進め得る始末で、二階三階の窓から首を出してゐるものも多かつた。

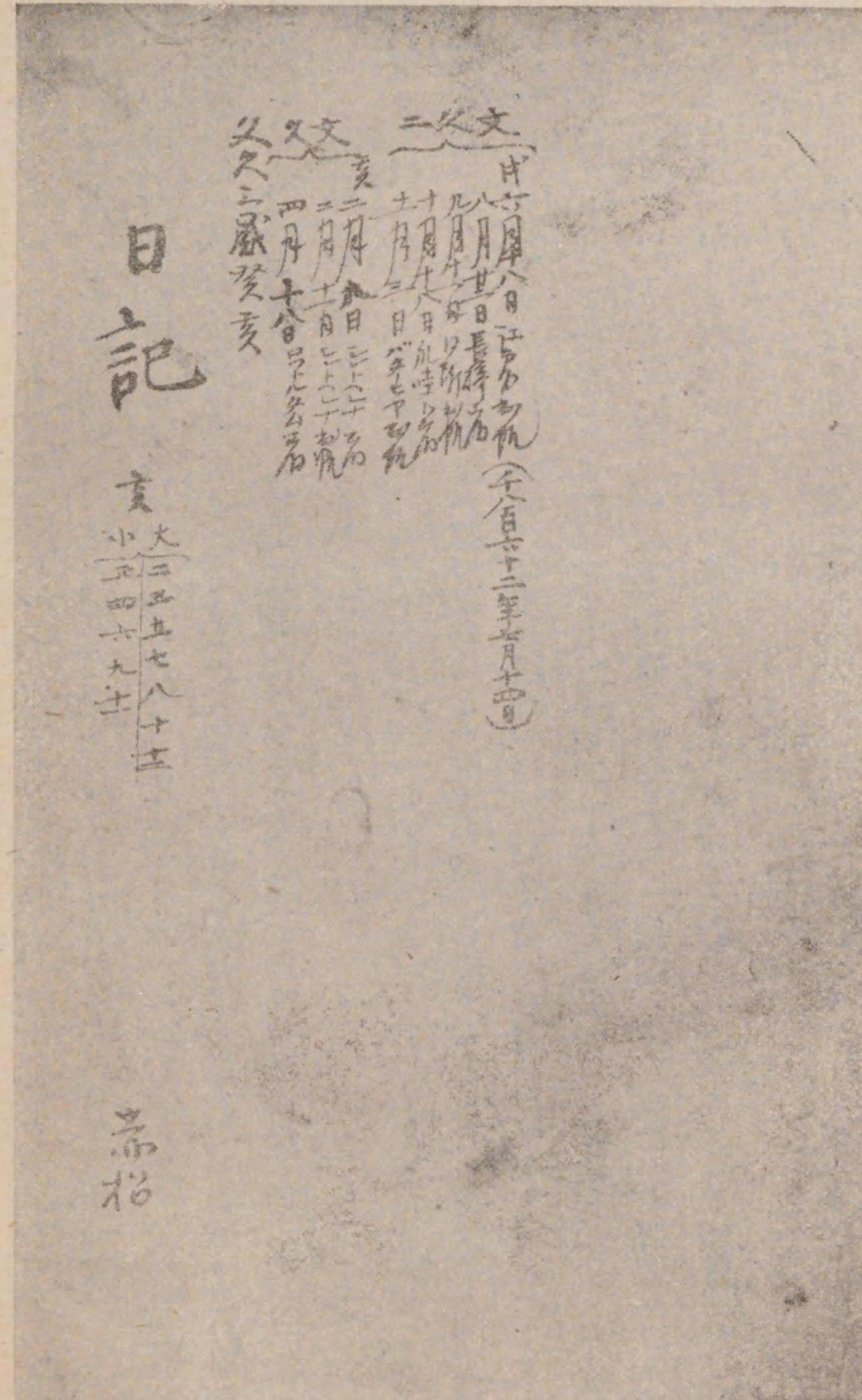
汽車は午後七時四十五分發車、八時三十分ライデンに到着した。一行は初めて汽車に乗つたものばかりである。大三郎はペリーが幕府に持参した汽車の模型の動くのを見たこともあり、又咸臨丸でサンフランシスコへ行つた時、知事の演説中に近々北米横斷鐵道が出来上り、ニューヨーク・サンフランシスコ間を八九日で駛走すると聞いたことがあるといへば、鐵道について多少豫備知識があるといつても宜いが、それすら設備の完全と速力の迅速なるにただただ驚くのみであつた。停車場から馬車でプレー街の旅館ド・ゾーンに着くに當りロッテルダム同様警官の保護を要した。

日本人世話掛としてはホフマンの外に海軍大軍醫ボンペ・ファン・メーデルフォールトがゐる。ホフマンは日本に來たことは無いが、充分日本語に通曉してゐる。またボンペは日本に五年





書上口の筆自郎次釜本榎 (紙表裏) 同



赤松大三元留學當時の日記(表紙)

男爵赤松範一氏藏



間も滞在し、長崎の養生所で一行中の伊東玄伯（後、方成、侍醫男爵）や林研海（後、紀、陸軍軍醫總監）に醫學を教授したことがある。一行より少し早く歸國し、現在ハーグに住んでゐる。そこで兩世話掛の間に修業地についての相談があつて、西・津田兩名と職方一同とは依然ライデンに止まり、その外七人は同月廿八日を以てハーグに引移るに至つた。

一行にとつて第一の必要は和蘭語の修業で、ライデン着後、共同で教師を雇入れ、稽古を始めることにした位である。それ故ハーグに引越した連中は最初合宿してゐたが、一所にゐては知らず識らず日本語を使い、蘭語修業のために面白からずとあつて、銘々分宿するに決した。留學生連中の當時の語學の知識につき、半生談に「私達の蘭語の力は程度において大分の差があつた。私は坪井塾以來書籍の上では蘭語の修業も相應に積んで居て、大抵の用には差支ないけれど、發音が正しくないから、これを匡正練習することが必要であると、ホフマンやボンベにも言はれてゐた。内田・伊東も書物は讀めるやうになつてゐたが、會話は下手であつた。その次は榎本・澤林で多少の素養はあつたが、田口は船中で少し學んだだけで而も年齢が長けてゐたから、青年のやうに外國語の進歩を見ることの出来なかつたも無理のないことで、甚だ怪しかつたと覺える」とあります。内田は名を恒次郎（後、正雄、海軍出仕）といひ、一行取締の位置にある。榎本は釜次郎（後、武揚、子爵）、澤は太郎左衛門（海軍一等教官）、また田口は俊平といふ。この人は

慶應三年五十歳で死んでゐるから、文久三年には四十六歳、これが一番年長で、それと反對に一番若いのが林で二十歳、赤松が二十三歳、榎本が二十八歳、澤が三十歳、伊東が三十二歳、津田が三十五歳、西が三十七歳、内田は赤松よりは四五歳上とのことですが、判然した年齢を知りません。

同じやうに留學生ではあるけれど、海軍の方面から派遣せられたものと、洋書調所から派遣せられたものと、自から二つに分れて居る。前者は内田・榎本・赤松・澤・田口の面々で、伊東と林とがこれに附隨し、後者は西・津田の兩人である。そこで西・津田はライデンに止まり、同地の大學で令名の高いフィッセルングについて國際法・財政學・統計學を修め、伊東・林はボンベについて理科學や生理學の講義を聞いた後、ハーグの近郊ニューエーデープの海軍病院へ入つて醫術を修業し、内田・榎本・澤・田口は海軍大尉デノーについて船具・砲術・運用の諸科を學び、榎本は別に機關大監ホイゲンスについて蒸氣學を、澤は海軍省の軍務局長大佐フリーメリーに依頼して銃砲や火藥の製造法を研究するといふ風に、銘々必死となつてその目的に精進した。時の海軍大臣ハイセン・ファン・カッテンダイケは安政四年軍艦ヤッパン號（後、咸臨丸）の廻航指揮官として日本に來朝し、海軍傳習所教授ベルス・ライケンと交代して三年間長崎に滞在したところのある人として、一行に對し直接間接に大きな便宜を與へた。



涙ぐましい努力の一面にはまた破顔一笑せざるを得ない滑稽がある。抑も一行は日本を去るに當り、幕府に差出した誓詞中に、御國風を守るといふ一項があつた。従つて一行の服装はいつも紋付・打裂羽織・裁付袴で大小を帶し、鬚を結つた頭をムキ出しにし、紺足袋草履穿であつた。この奇異なる服装は和蘭人の好奇心を煽つたと見え、上陸以來一行は群衆に圍繞され、旅館に居を定めた後も、市街へ出れば見物人に惱まされ、警察官の保護を受けなければ容易に買物も出來ず、當分は市民の目標となり、たうとう流行唄まで出來て無邪氣な小兒に歌はれ、これには一行殆ど當惑したといふことです。

この流行唄はなんであつたか、自分がハーグ留學中に聞いた所では、

*Twee violen en een bas bas bas*

*En een strijkstok erbij, waar geen snaar op was.*

といふので、意譯すると、二挺のバイオリンに一挺のセロ、それに一本の弓ではどうしても弾けぬといふだけで、別段日本人をからかつた意味はありません。子供が多勢で流行唄を歌ひながら日本人の後に附いて來る。聞く日本人の方では自分等をからかふものと聞いたのではないでせうか。

兎に角あまり眼に立つので、カッテンダイケから忠告があり、一同兎を脱いで洋服に着更へた

が、何時日本へ呼戻されるか判らないので、頭髮だけは刈る譯に行かず、大三郎は月代を延ばして、前の方から見ると西洋風の斬髪のやうにし、後の方には鬚を付けて、帽子でこれを隠してゐた。この點では元來坊主頭であつた醫師の伊東・林の兩人は忽ち頭の頂上から足の爪先まで歐羅巴風に改まつたので、皆から羨まれた。

幕府から和蘭政府へ依頼した軍艦開陽丸建造の件は、和蘭貿易商會の手で引請け、商會が競争入札に附した結果、ドルトレヒトのギップス造船所に落ちたので、大三郎は造船術研究のためハーグから同所に赴くこととなり、ライデンに残つてゐた船大工上田寅吉・水夫頭古川庄八・水夫山下岩吉と共に、十月下旬ドルト（ドルトレヒトの略）へ移つた。第一回到和蘭へ留學した人々中、士分九名の氏名は明白であるが、水夫職工六名の氏名は今まで見た史料では不明であつた。半生談によつて以上三人の外、時計師大野彌三郎・鑄物師中島兼吉・及び鍛冶師大川喜太郎あることを知つたは自分の大きな悦である。

開陽丸建造の技師長は和蘭海軍の主席技師トロクといふ六十歳ばかりの立派な紳士、次席のチーデマンは有數な造船學の大家で、著述も少からずあり、年齢は四十歳前後、毎日一度は必ずハーグから遣つて來る。その下に更に年の若い二人の技師がゐて、これはドルト在住であつた。大三郎は此所で造船術を修業したといふが、講義を聞いたのでは無い。チーデマンの著述を読み、



不明な點を工事の實際に對照して自得したり、或は技師について教を請うたので、就中チーデマンは丁寧親切に質問に答へ製圖なども綿密に調査の上訂正してくれた。大三是郎はドルトで始めて烏口の用法を知つたのであるが、その手傳をした上田寅吉は元來手先の器用な男であり、その上歐式造船の實驗もあるので、製圖の技倆はめきめき上達し、蘭語の知識も、會話こそ不十分であつたが、どうやら専門書の拾ひ讀もできる程に進んだ。明治になつて外國人の手を借らずに建造した清輝・天城・海門・天龍四艦の設計圖は、實に當時の大工、後の海軍技師上田寅吉の手に成つたものである。それから古川と山下とは専ら綱・ヤード・錨等について研究した。

文久三年は無事に暮れて元治元年となつた。正月十八日榎本釜次郎が和蘭の青年士官二名を伴ひ、突然ハーグから大三是郎の下宿へやつて来て、丁抹の戦争見物に出掛けないかと誘つた。シュレスキック・ホルシュタイン問題に關し、普魯西・墺地利と丁抹との間に蟠つてゐた戦雲がだんだん濃くなり、たうとう去年押詰つて砲火を交ふるに至つたことは、毎日の新聞紙欄を賑はしてゐる。大三是郎は願つてもない好機會と、早速榎本の申出に賛成し、その夜の中に支度萬端を整へ、翌朝まづ白耳義のブラッセルに向つた。これは普魯西・丁抹兩國公使の紹介狀は榎本の手でハーグで既に受取つてゐたが、墺地利公使は和蘭白耳義兩國兼任で、ブラッセルに駐在してゐるため、ハーグでその紹介狀を得られなかつたからである。一行はブラッセルで所定の用向を果してから、

ベルリンを経てハムブルヒに至り、同地滞在の和蘭領事の懇切な待遇を受け、氷で張詰めたエルベ河を馬車で渡つて、愈々ホルシュタインの首府アルトナに入つた。榎本・赤松兩人の行装は羅紗の筒袖の打裂羽織に裁付袴、大小を帶して靴を穿き、頭には羅紗の帽子——威臨丸が米國行の時に工夫して軍艦方一同が用ひた——を被つた。日本服なら何人にも間違へられる恐がないと、同行の和蘭士官が忠告したためこんな服装をしたので、當時大三是郎が佩いた銀装太刀造の大刀が、今赤松家に保存せられてゐる。

丁抹軍はアルトナを退却して一旦シュレスキックの國境ダネキルクに據つたが、普墺聯合軍に押されてアルゼン島のゾンデルブルヒ要塞に退き、對岸のデュッペルの支塞さへ多少の死傷者があつた後、聯合軍の手に渡してしまひ、爾來敵味方水を隔てて相對峙すといふ形勢で、さうして一方には英吉利の居中調停が始まつた。

一行がアルトナに着いてからデュッペル陥落まで僅に三四日で、見物する身にとつては眞に呆氣ない戦争だといはねばならなかつた。一行はアルトナを出發してデュッペルへ向つたが、沿道の村落は兵士で充満し、到底宿舎を得る見込がないので、百姓家の厩の秣の中に潜り込んで一夜を明かしたこともあつた。デュッペル到着後は普國のカール親王の幕僚の天幕内に起臥し、食事に罐詰の肉類を供給され、甚だ贅澤なものだと記してゐる。握飯に梅干を兵糧と心得た日本武士





WILZE: Wien Naerlandsch bloed enz.

Komt, Vrienden! met een ruime borst  
Nu eens een feest gevierd,  
Wij zijn nu hier bij VAN DER HORST,  
De Zaal is opgesierd;  
Want wij Scheepmakers, eensgezind,  
Der Heeren GIPS, beroemd,  
Wij bouwen voor Japan het Schip  
De VOORLICHTER genoemd. (bis.)

Komt, wijden wij dan onze zang  
Aan het Japans Bestuur!  
En wij herdenken dan nog lang  
Aan dit zoo vrolijk uur.  
Komt stellen wij, verzoend van zin,  
Zoo helder als men kan,  
Een Toast op deze Heeren in,  
Die Heeren uit Japan! (bis.)

De Scheepbouw bloeije meer en meer,  
Op Dordrechts schoone grond,  
En onze Heeren vesten weer  
Hun roem heel ver in 't rond.  
Want beter Schepen bouwt men niet,  
Zoo hecht, zoo sterk, zoo schoon,  
Als die men hier van Stapel liet,  
Bij de Heeren GIPS EN ZOON. (bis.)

De Scheepbouw zij dit lied gewijd,  
Door heel de Vriendenschaar,  
Dat zij, dit wenschen wij om strijd,  
Vermeerd're jaar op jaar;  
Zingt Schepenmakers, luid en blij  
En op een heldren toon,  
De welvaart der Scheepmakerij  
Der Heeren GIPS EN ZOON. (bis.)

新編 (和蘭國歌) 開陽丸  
元治元年十月廿九日

開陽丸命名式の祝歌 男爵赤松範一氏藏

にとつては、罐詰の肉類は如何にも贅澤と思はれたらう。

英吉利が調停に立つた上は、當分目覺しい戦争はあるまいと、一行は一旦アルトナに歸つたが、今度は丁抹側を觀ようと、リュベックから汽船でコペンハーゲンに渡つた。丁抹では參謀本部附の一大佐が接待役となり、一行を丁抹軍の本營所在地ゾンデルブルヒ要塞に伴ひ、翌朝は騎馬で戦線を巡視することとなつた。何でも器用で、馬術も一通りは心得てゐた榎本は、大三郎に向ひ、貴様大丈夫かと幾度も念を押した。海軍士官の乗馬は勝手違ひ故、榎本の懸念したも無理は無い。大三郎はドルトの市民倶楽部の連中に誘はれて、乗馬の稽古をしたといふものの、始めてからやつと一ヶ月ばかり故、内心甚だ不安であつたが、どうやら人の後に附いて落馬もせず済んだので、後で榎本から大いに褒められた。

戦線近くまで騎馬で進み、それから馬を下りて塹壕へ入つた。塹壕から顔を出せば直ぐ狙撃せられるから、充分注意して戦線を巡視し、參謀大佐から軍の配置や地形の説明を聞いた。

戦線巡視は一日で済んだ。翌日はコペンハーゲンに戻り、もと來た路を逆にハムブルヒに歸り、それからエッセンのクルップ會社工場を訪問した。一行は今度の戦争で普軍の武器が最も進歩してゐるのを知つた。普國の兵士は元込のスナイドル銃を持つてゐるに反し、丁抹ではイザ開戦といふ場合になつて、遽に先込銃を元込に改造した位である。大砲もその通りで、丁抹の大砲と普



軍のクラブ製のスチール元込砲とを比べれば、優劣言はずして明らかである。一行がクラブ工場を訪問した意味はこれで了解されよう。彼等は會社構内の迎賓館に宿泊し、榎本・赤松兩名は特に白髪の老主人クラブと晚餐を共にし談話を交換した。

大三郎は留學中もう一度觀戦に出掛けた。それは一八六六年六七月（慶應二年五六月）に於ける普魯西と奧地利との戰爭で、懇意な普國軍人の援助で觀戦の許可を得たが、折角單身ライプチヒに着いた時は、丁度サドヴァの戰爭が終はつた時であつた。この戰爭は一に七週間戰爭といはれ、モルトケ將軍の作戰とビスマルクの決斷によつて、迅速に終局したため、大三郎は砲煙彈雨の中を馳驅することは出来なかつたが、まだ血痕の乾かない戰場を充分に視察したといふことである。

榎本・赤松等が戰爭見物から和蘭へ歸つた翌月（三月）、外國奉行池田筑後守の一行がパリに到着したといふ通知があつた。筑後守は横濱鎖港の談判の使命を帯びて幕府から派遣せられたものであるが、マルセーユ上陸後不幸にも病歿した一行中の横山敬は林研海の親類であるといふので同人と内田恒次郎とが取敢へずパリに向ふこととなつた。兩人がハーグに歸つてからの話に、筑後守は佛帝ナポレオン三世の歡迎を受け、名所見物に引廻されてゐるが、肝要の談判は一向果取らぬ模様である。また一行の服装が純然たる日本風であるため、外出する毎に山のやうな

見物人である。これは自分共にも覺があるが、草履取の輩が臂まで露出して街路を練歩くのを見ては、自分共は穴へも入りたい心持がしたとあつた。五月になつて内田と榎本とが電報で呼ばれてまたパリへ往つた。佛帝からツーロンで最近に進水した優勢な装甲艦を日本へ譲つても宜いといふやうな話があつたので、その檢分のためであつたさうだ。

それから間もなく筑後守は空しく歸朝したが、隨行者の一人原田吾一（後、一道、陸軍少將）はパリからハーグへ來た。彼は各國陸軍の軍服を參酌して一種の軍服を作り、それを自身一着して得意で居つた。引續いて軍艦組頭肥田濱五郎（後、海軍機關總監、宮内省御料局長）が隨員二名と共に遣つて來た。肥田は石川島に造船所を建てることを主張し、同所で建造中の軍艦千代田型へ据付の器具機械類註文の用向で和蘭へ來たのであつた。

ドルト滞在中、大三郎は榎本と一緒に一ヶ月許英國漫遊に出かけた。ロンドン駐劄の和蘭總領事ニコルソンの世話で領事館内に起臥し、またその紹介でシェッフィールド、リバプール等を見學した。

開陽丸の工程は追々進行し、慶應元年九月には進水式を行ふ手筈になつた。大三郎は自分の仕事が大體完了し、必ずしもドルトに滞在する必要を見ないので、進水式に先だち五月に上田寅吉を伴つてアムステルダムに移り、同地の海軍造船所に通ふこととなつた。同所は創立も古く、規



積も大きく、職工は造船部に六七百人、機關部に二三百人、倉庫その他の者まで加へると、總員千二百人に上る大工場であつた。それに前から馴染であつたチーデマンが當時造船所長兼技師長を勤めてゐたので、萬事に便宜よく、大三郎はその紹介で技師連中と交際したり、工場を見學したり、製圖を勉強したり、工場の管理法や職工の使用振を研究したり、特許を得て造船所内にあつた模型室に自由に出入したり、工學博士フ・ハン・デル・マーテに就いて土木・水利・建築の諸學科を修めたり、愉快に且つ多忙に日を暮らした。

場所もよく、人もよい上に、更に好都合だつたは時である。即ち大三郎がアムステルダムへ來てから一年ばかりして鐵船の建造が始まつた。いはば造船上の一大革命時期に遭遇したので、造船事業は繁忙を極め、彼にとつては無類の好機會であつた。今迄ライデンに残つてゐた職方大野・中島兩人は赤松・上田の跡を追つてアムステルダムに來り、大野は精機工場に、中島は鐵工場に入り、兩人共眞黒になつて實習に勉めた。

ドルトに残つた古川・山下は開陽丸の艤裝に従事した後、船と共にフリシゲンに移つた。フリシゲンはラインの川口の一港で、和蘭の海軍造船所がある。クルップ會社から送つて來た大砲を、この地で開陽丸に搭載した。かくて一切の艤裝が完成したのは慶應二年八月であつた。

海軍側の留學生は開陽丸建造中を留學期限とし開陽丸が竣功すれば、それに乘つて故國に歸朝

する豫定であつた。和蘭到着後、故國の政情が日に増し不穩になつて行く様子は憂慮に堪へぬが、海軍に従事するものにとつて唯一の耳寄な報知は、幕府が財政の窮乏に拘はらず、海軍擴張造船所建設の計畫を進めつつあることで、造船業擡頭の氣運は明らかに看取せられる。併しながら造船所の位置さへ、横濱か、横須賀か、はた石川島か、未定の有様であるから、その完成までには相當の年月を要し、今歸朝しても折角和蘭で學んだ造船術を實施する機會はあるまい。殊に昨今は造船術の革命時代で、新造船術の修業は是非必要である。二三年間留學を延期して、これを修業したいと考へた大三郎は、意衷を打明けて肥田・榎本に相談した所、兩名共大いに賛成してくれたので、留學延期の願書を認め、肥田・内田の手を経て表向幕府に進達を請ひ、また内輪の運動としては、肥田・榎本から時の軍艦奉行伊澤謹吾へ宛て、願意御聞届け相成るやうにと手紙を出して貰つた。

留學延期は大三郎より前に、醫者の伊東・林が出し、大三郎より後に陸軍の原田が出した。然るに原田に對しては、外國奉行から既に歸朝命令が發せられて居つたため、同人の留學願は詮議に及ばざることとなり、伊東・林・赤松三名だけが延期許可となり、その通知は開陽丸の出發前に辛うじて到着した。

開陽丸は曩に内田・榎本等に運用術その他を教授した海軍大尉デノーを指揮官とし、外に士官



二人・下士十四人・水火夫百五六十人乗込み、慶應二年十月廿五日を以てフリシンゲンを抜錨した。そもく、四年前長崎を出發して以來、苦樂を共にした十五人の中、津田と西とは去年十月業を卒へて日本に歸り、鍛冶師の大川喜太郎は不幸病氣のため半途で斃れ、内田・榎本・澤・田口・上田・古川・山下・大野・中島の九人は開陽丸に乗船して歸朝の途に就かんとし、残るは伊東・林・赤松の三人のみとなつた。旭旗を翻した開陽丸がフリシンゲンの波止場から徐々として外洋に向ふ時、送る者も送らるる者も感慨無量であつたらう。

開陽丸は排水噸數二千七百噸、長さ二百四十呎、幅三十九呎、四百馬力の補助機關付、二段張甲板、木造、螺旋、三本檣の軍艦で、第一甲板に六斤砲十二門、二十四斤砲を前後に各一門、第二甲板に加農二十斤砲十二門、合計二十六門を備へ、その中十八門は所謂「筋入り」、他の八門は「平常の鐵筒」で、乗組定員四百名、船價四十萬弗、龍骨据付から三年半を経て完成した。艦はフリシンゲンを出てから南米のリオ・デ・ジャネイロと蘭領印度のアムボynaとに寄つて炭水を補充し、慶應三年三月廿六日無事横濱着、同五月二十日織田對馬守・勝安房守・木村兵庫頭等を横濱に出張し、和蘭公使ポルス・ブルックとの間に引渡を了へ、祝砲二十一發を放つた。その後開陽丸が榎本釜次郎を艦長として攝海の警備に當り、明治元年正月薩藩の春日丸及び汽船一隻を追撃して砲火を交へたことや、前將軍慶喜以下を乗せて大阪から品川へ歸航したことや、同年十

一月江差沖で坐礁破壊したこと等は餘りに有名だから省く。大正四年ギップス會社から日本政府に寄贈した同艦の模型は、今帝室博物館に保管せられてゐるとの事だ。

大三郎は同僚九名と別れて獨りアムステルダムに踏留まつたが、同年冬佐賀藩士佐野榮壽左衛門（後、常民、伯爵）の訪問を受けた。佐野は藩主閑叟公の厚く信任せられる所である。公は蘭學の輸入及び海岸防禦の設備に深く意を致された明君で、長崎に海軍傳習所が出来た時、四十餘名の傳習生——諸藩第一の多數——を派遣せられ、佐野はその頭取であつた。今度佐賀藩で和蘭へ軍艦日進を注文することとなり、佐野から日本在留の和蘭公使に相談に及んだ所、それは留學中の赤松に萬事周旋して貰ふのが宜からうといふ忠告であつた。赤松なら傳習所以來の舊知で、便宜この上なしと佐野はパリを經て一直線にアムステルダムに來たのである。

日進は開陽丸を造つたギップス造船所に注文せられ、その仕様書の検査は専ら大三郎が相談相手となり、その開パリへも同行すれば、クルップ會社へも同道するといふ風に、約四五ヶ月の間兩名は寢食を共にした。佐野は外國語が出来なかつたから、大三郎の助力を得たことは非常の便宜であつたに相違ない。かくて佐野は滞なく使命を果し、パリーの萬國博覽會見物後佛國郵船で日本へ向つた。日進は長さ二百三呎、幅三十一呎、吃水二十呎、排水量千四百六十八噸、木造、螺旋、汽船、三檣バーク型で、機關は七百馬力であつた。明治二年四月進水、翌年三月長崎で授



受を了し、六月になつて佐賀藩から朝廷へ獻納に及んだ。

パリーの萬國博覽會はナポレオン三世の勢力を示した一つの象徴である。幕府は佛蘭西公使の勧誘に應じて参加出品を承諾したのみならず、これを機會に公使向山隼人正を佛國に派遣し、また將軍慶喜の實弟民部大輔（昭武、後、水戸藩主）を特派し、外交上の親善を増すと共に、歐洲の文物を視察せしめることとした。民部公子及び向山公使の一行は慶應三年正月横濱を出發し、三月パリーに入り、佛帝から異常な歡待を受け、従つて日本人一同肩身が廣かつた。

赤松・林・伊東の三留學生並びに後から來た松本圭太郎（松本順長男）緒方洪齋（後、維準、陸軍軍醫總監）等は一團となつて民部公子に拜謁旁々博覽會見物に出掛けた。その月日は半生談に見えぬが、澁澤篤太夫（後、榮一、子爵）杉浦靄山共著の航西日記に「五月十六日、晴、夕五時、荷蘭に留學せる本邦の人々到着せり。」「六月七日晴、荷蘭學生等歸國するにより來り見ゆ」とあるから、これに相違ない。澁澤は陸軍附調役の肩書を有し、將軍から特に選ばれて公子に隨行した一人で、その外隨行員中には山高石見守（信離、御小姓頭、後、帝室博物館長）を筆頭とし、高松凌雲（奥醫師、後、箱館戰爭に従事す）保科俊太郎（歩兵頭並、後、陸軍大佐）山内文次郎（歩兵差圖役勤方、後、外務省出仕、宮内省大膳亮）等の傑物連がゐるので、大三郎は深く彼等と交はり、或る夜の如きは談話がはずみ過ぎ、今更一寢入りする時間もあるまいと、打連立

つて散歩に出掛け、たうとう夜が明けたといふことである。

博覽會が閉會してから、民部公子は向山公使・山高石見守等を従へ、豫定の如く列國巡廻の途に上り、先づ瑞西を訪問し、次ぎに和蘭へ寄られた。和蘭留學生五人は國境のゼーベナル驛まで出張して一行を迎へ、爾來十日間（八月十八日より廿七日まで）何呉となく一行のために奔走し、白耳義へ向け出發の際は國境のエッセン驛まで見送つた。公子一行は白耳義の次ぎに伊太利、次ぎに英吉利を訪問し、それが終はつてから、即ち十一月下旬からパリーに落付かれた。

半生談に大三郎が在パリーの山高・澁澤連名の手紙を見て五萬弗の金策に奔走した事件が書いてある。手紙の意味は、一行滯歐中の費用は日本から爲替を組んで送金する手筈になつてゐるが、何ういふ理由か到着しないため、支拂に困難するから、和蘭の方で何とか一時都合は附くまいかといふので、留學中の一書生にとつては甚だ縁遠い問題ではあるが、大三郎は取敢へず和蘭貿易商會の頭取の許へ驅付けて、委細相談に及ぶと、御差支の無いやう心配いたしませうと快諾してくれた。和蘭貿易商會は東洋に縁故の深い商會で、曩に開陽丸の建造を請負ひ、その頭取は以前から大三郎と昵懇の開柄であつたため、話が都合宜く運んだのである。そこで大三郎は早速右の次第を電報でパリーに通信し、山高・澁澤兩人に來て貰ひ、五萬弗借入の約束を結んだとあります。半生談は更に後日に知り得た所によつて記事を進め、公子一行江戸出發に際し、勘定奉行小



栗上野介の内談に、マサジェリー會社々長クレイと相談の上、佛國で六百萬弗の外債を募集することになつて居るから、公子一行の経費はパリでその中から請取られよとあつた。よつてパリに來てクレイに掛合ふと、外債の件は自分は必成を期したが、俄に日本の方から約を解かれた故、如何ともし難いといふ返答で、山高や澁澤は非常に心配し、和蘭と英吉利とにゐる留學生に經費調達方を問合はせ、和蘭では大三郎の口入で、和蘭貿易商會から五萬弗、英國では留學生頭取川路太郎・中村敬輔などの奔走で、東洋銀行から五千磅を借入れることになつた。小栗の内談にある外債六百萬弗募集の目的は、幕府財政の窮乏を補充すると共に、佛國から兵器軍艦を購入して幕府の勢力を維持しようとしたのであらうと言つてゐます。

留學生が民部大輔一行のために金策に奔走したといふのは、一寸變に聞えますが、これは事實です。慶應三年七月廿七日付で向山隼人正から勘定奉行塚原但馬守等へ宛てた手紙に、「荷蘭ハンドルマートシカッペーは舊來爲替御用も相勤、英國オリイタルバンクも是迄爲替仕來候に付、兩所共傳習人を以、爲替之儀爲及掛合候處、英國オリイタルバンクは五千ポンドステルリング、荷蘭ハンドルマートシカッペーは五萬弗爲替可差出旨承允いたし候に付、右金子を以て先便申進候通り、最寄國々可成丈御省略にて御巡歴被爲遊候積に決着いたし候」とある。文中荷蘭ハンドルマートシカッペーは半生談にある和蘭貿易商會、オリイタルバンクは東洋銀行と同じで、双

方で承諾した金額も半生談掲載の金額と一致してゐますから、手紙には單に傳習人とあつて名を擧げてないが、和蘭では赤松大三郎、英國では川路太郎・中村敬輔の周旋で、金策が成就したに相違ない。ただ半生談では何時のことやら不明であつたが、前記隼人正の手紙によつて民部公子の列國巡遊以前、即ち慶應三年七月か、若しくはその以前の事件と判明した。

一體民部大輔一行の洋行費はどうして支辨したかといふと、最初出發の際持參した五萬五千弗は六七ヶ月の間に遣切つたので、佛國でフロリヘラルド并びにクレイの手から三萬弗を借入れた。然るに列國巡遊以前、隼人正から更に十萬弗借用方を申込むに及び、彼等は「六百萬弗御約定全く瓦解の姿と相成、融通必至と差支候」と稱して謝絶した。フロリヘラルドは民部大輔歐洲行についての世話方、クレイはマサジェリー會社の社長である。彼等の口にする六百萬弗の約束とは、小栗上野介が佛國で起債しようとした六百萬弗を指すので、その計畫が途中で破れたため、彼等は新規十萬弗の貸付を拒み、従つて留學生をして英蘭兩國に於いて借入金金の運動をなさしむる必要を生じたのであらう。

アムステルダムに於ける大三郎の學生々活は極めて平穩に順當に進んだが、親戚知己の手紙や來訪者の談話によつて傳へられる本國不穩の政情は、一方ならず彼を悩ました。慶應三年十月將軍慶喜大政を奉還せられたとの報知は、翌四年正月早々パリに達し、公使栗本安藝守（向山隼



人正の後任)から英蘭留學生一同に通知せられ、報を手にした者、皆青天に霹靂を聞く思をなしたとあるは無理からぬ次第である。引續いて鳥羽伏見の敗戦、前將軍の東下謹慎等、新聞紙上に見える悲惨な報道は、後から来る本國の公報によつて一々裏書せられた。栗本・山高・澁澤等重立ちたる面々は、第一に公子第二に留學生の進退について頻りに評議を凝らし、結局公子はパリに踏留まつて勉學を繼續すること、栗本及び留學生中若干名は歸朝することに決した。

大三郎は歸朝組の一人に加はつた。彼は四月五日パリに出で、民部公子に謁し、一旦アムステルダムに歸つて行李を調べ、再びパリに來り、同月廿四日栗本以下打揃つて民部公子の招待にかかる夜會に臨席し、廿六日ガー・ド・リヨンを發してマルセーユに向つた。

一行はマルセーユから佛國郵船でアレキサンドリヤ着、汽車でスエスに至り、そこから更に郵船に乗じ、五月十日を以て無事横濱に歸着した。異域に寓して具に辛酸を嘗むること前後六年、纔に業を卒へて故國に還れば、幕府既に倒れて頼る所がない。山青く水清き日本の風光に接せし刹那、大三郎の感慨は到底筆舌に盡くし能はざるものであつたらう。(昭和八年九月)

## 日蘭通交小史

今夕は閣下并びに來賓各位の前に、一場の御話を致す機會を與へられまして、甚だ光榮に存じます。

この數年來私は日本の古い外國貿易の事を取調べて居ります。昭和三年宿昔の志望が適ひまして、僅かの期限ではございましたが、和蘭のハーグに参りました。同地に國立のアルシーブがあります。これは日本で申せば、内閣の記録局に當り、政府の文書を保管する役所で、私はこのアルシーブに毎日通ひまして、日本關係の史料を讀んで居りました。言葉が不十分でございますから、思ふやうなことも出来ませんでした。折角はるばる日本から参りましたので、出来るだけの勉強は致しました。併し迎も十分ではございません。機會があつたらもう一度和蘭に留學に行きたいと考へて居る次第であります。本夕の講演は「日蘭の關係について」といふ大きな題目で、とても短い時間に纏まつた御話は出来ませぬ。ほんのその中の一節か二節、多少興味のありさう



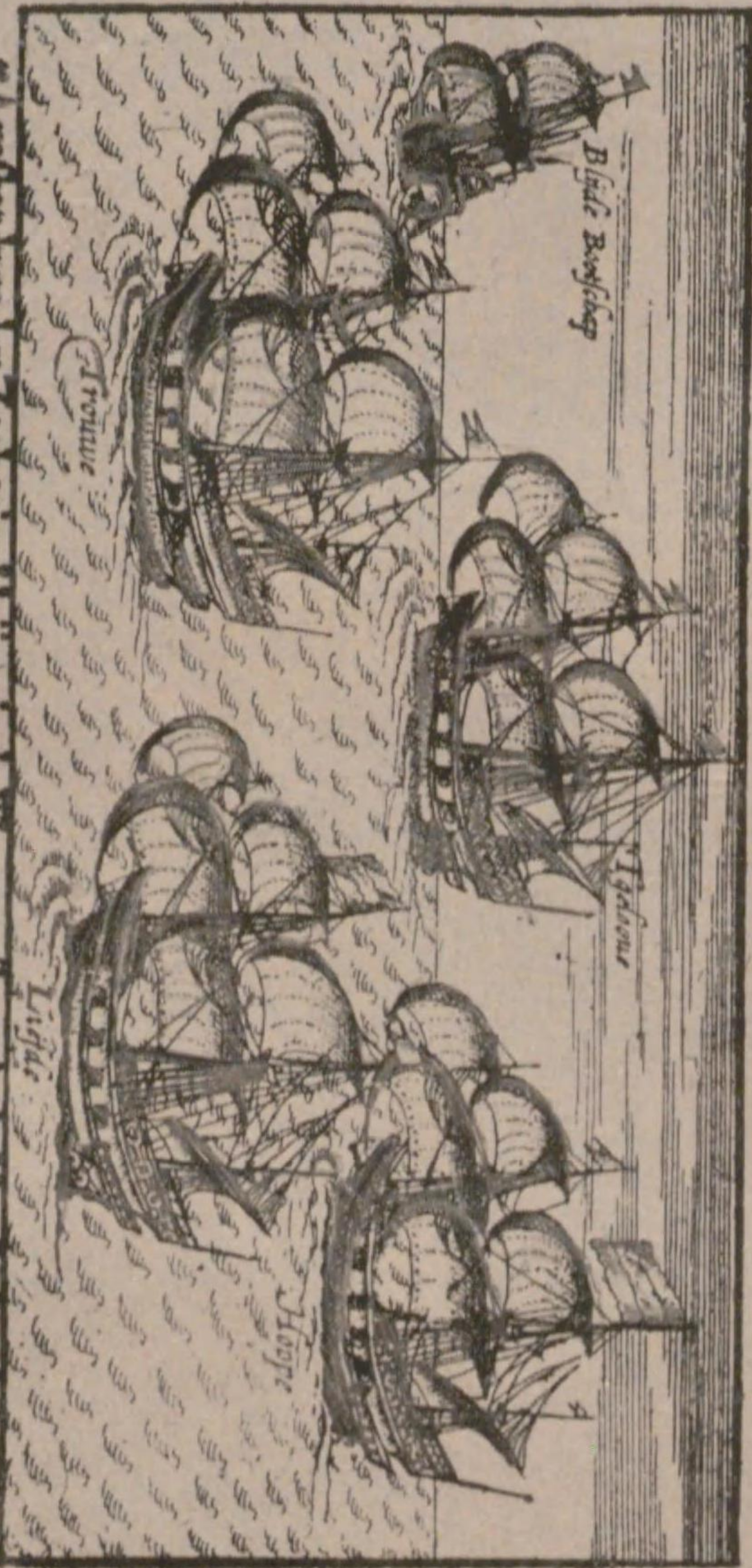
な所を、寫眞を御覽に入れながら説明を申上げて見たいと思ひます。どうぞ左様御承知を願ひます。

古く日本に参りました西洋人は、和蘭人・葡萄牙人・西班牙人・英吉利人、先づこの四ヶ國人でございます。その中で英吉利人と西班牙人とは比較的大した關係はございませぬ。葡萄牙人は可なり長く日本に居りました。彼是れ九十年ばかり日本に居りましたが、最後に貿易禁止の意味で追出されてしまつた。残つたのは和蘭人だけで、日蘭の交際はそもその發端から今日まで三百三十餘年引續いて居ります。随つて和蘭語の中に何時とはなしに若干の日本語が這入り、また日本語の中に色々和蘭語が這入り、御互にそれを使つて居るやうな親密さになつて居ります。

和蘭人の日本に参りましたのは、大變覺え易い年でして、西曆一六〇〇年、日本曆で申しますと慶長五年、丁度關ヶ原で天下分け目の合戦のあつた年で、それも葡萄牙人同様、最初から日本に來る考で來たのでなかつたのであります。本國を出た時は五艘からなる艦隊でしたが、途中でちりぢりばらばらになりました。漸く一艘だけが豊後に流れ着いた。リーフデと言ふ艦でございます。五艘の大體の姿が此所に遺つて居ります(ファン・ナウハイス氏著「リーフデ號の船尾の肖像」巻頭の挿畫を示す)。圖中右の下にあるのがリーフデ號で噸數僅に百五十噸、そんな小さな帆船で、和蘭からマジェラン海峡を通つて遙々東洋未開の地に遣つて來た。その勇氣には敬服

### De Widdelooptichy berhael van tegene de vijf

Schepen (Die int jaer 1598 tot Rotterdam toeghevaen werden / om doo; de Straet Magellana haeren handel te dyden) wederuaren us; tot den 7. September 1599. toe / op melcken daegh Capiteyn Sebaldus Weert, met twee schepen doo; ontweert vande selste verstenen wuert. ende uoogs in waer groot getael ende elende sij op de vier maanden daer naer in de Straet gheslegten heeft / tot dat sij can lesten heel rebbelees sonder schijp of hoer maer een ancker vefouden hebden; boog; hooghshinghende noot weder naer hups heeft moeten keeren. met si berchjsten boog; M. Barentlandt. Ciuergijn.



リーフデ號とその傍艦





リーフデ號の船尾の木像

東京帝室博物館所藏の寫眞による





の外ありません。このリーフデ號の艦に付けました木像が不思議にも日本に遺つて居ります。もと野州足利の傍の龍江院の所藏で、カテキ様と言はれた木像がそれです。頭巾を被つた立姿の木像で、不釣合に大きく見える右の手に持つてゐる巻物の文字から、和蘭で名高い學者エラスマスの木像と分り、次にリーフデ號の前名をエラスマスと云つたことが分り、さてはカテキ様は始めて日本に漂着した和蘭船の艦に飾つた木像に相違ない、是非和蘭で買取りたいといつて、一時は和蘭へ持つて行かれさうでしたが、やつと日本に残ることになりました。これがカテキ様の寫眞で、此方が正面から見た所、彼方が裏から見た所です。この木像がリーフデ號の艦に付いた模様はかうもあらうかと、フアン・ナウハイス氏が想像して書かれた圖がこれです。同氏はロツテルダムの海事博物館の館長で、カテキ様の肖像を研究してこの論文を書かれ、私にも一部贈つて下さいました。

フアン・ナウハイス氏からその後贈られた抜刷に「リーフデ號の海圖」と題するものがあります。上野の帝室博物館にある三枚一組の羊皮紙の海圖で、その中一枚日本のある分に製圖者の名前・住所・年號がある。年號は一五九八年二月十八日で、それから四ヶ月経過してリーフデその他四隻が出帆してゐるから、これは多分リーフデに備へつけられた海圖で、カテキ様と同様な手續で日本に遺つたものだらうといふ同氏の説です。どうしてこの海圖が博物館の手に入つたか、

その徑路を明らかにしたいものですが、兎に角カテキ様といひ、海圖といひ、珍らしい和蘭關係品が残つてゐるものです。

リーフデ號の漂着、乗組員の徳川家康謁見等が動機となりまして、和蘭人は家康から貿易許可の免狀を與へられることとなりました。免狀の日附は慶長十四年七月廿五日附で、その實物は只今ハーグのアルシーブの庫の中にちゃんと存在して居ります。日本人がアルシーブ參觀に往くと掛員が心得てゐて屹度これを見せる。日本國中何所の海岸に着いても差支ないと言ふ意味の大層自由な免狀で、さうしてこの免狀を貰ひました和蘭人は、肥前の平戸に商館を建てたのでございます。

平戸は松浦伯の舊領地でございます。今日では佐世保から海陸いづれでも容易に行かれます。もつとも陸路を行けば最後に一つ渡を渡らなければなりません。要するに平戸は一つの島で、その東北端海に突出した所に、昔時の和蘭商館の跡が認められるのであります。土地の人は和蘭塀と申して居りますが、扁平な堅い石を積重ねて、さうしてそれをセメントで繋合はせた塀や、それから四角な井戸、和蘭井戸と申すものも存して居ります。平戸といふ町は平戸灣に沿うて建てられた町で、その町端の和蘭商館は一方和蘭塀で町と境界をつけ、その他は海で圍まれてゐた（寫眞を示す）。只今は海岸に沿つて道路が開け、和蘭塀の遺跡は道路の左側（山の手側）にし



か見えませぬが、和蘭塀のつづきが道路を越して右側の民家の境界となり、海濱でつきてゐるところが、此所に持つて参りました寫眞で判明いたします。どうぞ御覽を願ひます（寫眞を示す）。それから海手の方は波浪で岸を洗はれて困るといふ所から、海岸近くへ澤山の捨石をしたといふことを土地の方から伺ひました。成程澤山石がある。いはば防波堤です。和蘭人は土木事業に特に長じてゐる國民ですから、この位のことには三百年前の昔に既にやつたでせう。先年松浦伯の撰文にかゝる日蘭親交記念碑が和蘭塀の外の山手に立ちました。結構なものと存じます。

和蘭人が参りましたから四五年経つて英吉利人が参りました、やはり平戸に商館を建てた。日蘭交通の記念碑がある以上、日英交通の記念碑も立てなければならぬといふ運動があつて、これには誰も不賛成をいふものは無かつたが、何所に建てるかといふ問題になつて大分困つたさうです。と申すのは英吉利の商館の跡は和蘭商館の跡ほど判然分つて居らぬからであります。町通りから幸橋を渡ると、直ぐ右手に町役場があつて、川岸に大きな松が十數株ある。今は枯れてしまつたさうですが、以前非常に大きな松があつて、人々がそれを英吉利松と呼んだ。英吉利の船を繋いだから英吉利松といつたのださうで、記念碑は結局この松林に建てられた。幸橋の上手にあたる築地町は、その名の示す通り新築地で、これが出来たために附近の地形が大層變はつたと申しませんが、さも有らうと存じます。

私は英吉利商館若しくは商館に屬する建物がイギリス松のあつた所から幸橋を越えて斜に右、即ち今の九十九銀行の邊にあつたらうと考へます。ハীগのアルシーブに淡彩を施した平戸の寫眞があります（寫眞を示す）。原本ではなく、十八世紀頃の複寫ですが、圖柄は三百年前の平戸を描いたもので、和蘭商館の位置はその遺趾と全然符合し、赤・白・青の國旗が翩翩とひるがへつてゐます。然るに英吉利を代表する「セント・ジョージ」の旗は海岸を相當離れた所の建物に立つてゐる。若しこれを商館とすれば、荷物の積卸に甚だ不便で、どうしても海岸に上屋やうのものがなければならぬと思ひます。この圖の和蘭商館の附近をよく見ると、海岸から往來に達する石段があつて、石段の盡きた所に門があり、門の上にラムプがある。それと同様な石段・門・ラムプが「セント・ジョージ」の旗の立つて居る所から斜に右、即ち海岸に出張つた箇所にあつて、其所には建物が澤山書いてある。英國商館の荷物積卸場、否恐らくは英國商館そのものがここにあつて、國旗の立つてゐる山の手の建物の方が商館附屬のものでしたらう。

平戸には和蘭人・英吉利人の來る前に葡萄牙人が來てゐます。どうして葡萄牙人が平戸に來たかといふと、これは支那人の手引であつたらうと思ひます。平戸には昔から支那人が可成多數居住してゐた。明末清初臺灣で勢力を振つた鄭成功（國姓爺）の父は支那人、母は日本人で、一家は平戸町の南、千里ヶ濱に沿つた河内浦に住んでゐた。お母さんが千里ヶ濱を散歩してゐた時、



急に産氣づき、岩に倚りかかつてお産をした。それでその岩を兒誕生といふとか、又國姓爺手植の竹柏樹などと、色々傳説的の遺蹟遺物が残つてゐます。兎に角平戸に可成多數の支那人がゐて、始終本國と往來する。さうしてこれ等支那人の直接または間接の嚮導によつて葡萄牙人が第一に平戸に入り、それから和蘭人や英吉利人がその跡を追つて來た。領主松浦家で外國人を善く保護したことも、彼等の入港滯留を促した大きな一つの原因と考へます。

平戸町の中央に七郎ノ宮といふ古い産土神があります。その神社の前で葡萄牙人と平戸の町人武士との間に大喧嘩があつて、双方に死人怪我人が出來た。外國船の乗組員と土着人との間の争鬭は、東洋各港でザラに行はれたことであらうが、葡萄牙政府が探檢貿易の外にカトリック教を布くことを使命としたために、争鬭は一層頻繁に起つたものでせう。松浦家と葡萄牙人との間がしつくり合はぬため、葡萄牙船はたうとう松浦家の隣の大村領に行くやうになつた。松浦家と大村家とは隣同志でありますが、一方から中せば競争相手です。松浦家が貿易の利を専らにしてゐるのを見ては、大村家は決して指を銜へて引込んで居る筈はない。葡萄牙船に向つてお出でお出でをする。そこで葡船は先づ横瀬浦に入り、それから福田・長崎と段々かはつて、終に長崎に到着くこととなつた。それが一五七〇年、日本の元龜元年に當ります。自分は先年大村の方から横瀬見學に出掛け、途中可成り疲勞を感じましたが、佐世保の方から行けば譯は無い。佐世保灣を出

てその眞南に當る小さな港で、入口に小島がある。平戸港の入口に黒子島といふ小島があるやうに、横瀬港にも入口に島があつて、様子がよく似てゐる。然し何分この邊一帶は軍事上の必要から、特別の許可なき限り寫眞を撮ることは勿論、見取圖を取ることさへ禁ぜられて居りますから、折角出掛けてまゐりながら、手を空しくして引上げました。従つて港の様子を圖でお示しするとは出来ません。プライベートに勉強するには色々な困難があるものです。

葡萄牙船は元龜元年以來引續き長崎に入港する。松浦家からいへば葡萄牙船の入港を隣國の大村家に取られた姿ですから、それを補ふ意味もあつて、和蘭人が來れば極力これを歓迎し、また英吉利人が來れば極力これを歓迎した。そこで和蘭人も英吉利人も平戸に商館を置いたが、家康から見れば、遠方の大名領に貿易港があるよりも、近所の幕府直轄領にある方が願はしい。家康は最初に日本へ來た英吉利船の船長ジョン・セーリスに對し、特に同國人ウィリアム・アダムスを通じて浦賀に商館を設けるやうにと諭されたらしい。アダムスのことは御承知で御座いませうが、蘭船リーフデに乗組んでゐた按針役の頭で、大層家康から信任せられ、相模の三浦に所領を賜はり、世に三浦按針といつた人です。アダムスの手紙が數通遺つて居りますが、その一つに、自分は家康公に幾何學の一部分と、數學の應用とをお教へしたと書いてあります。恐らく家康は二點間の最短距離は一直線であるといふやうな幾何學の定理をアダムスから聞かれたのでせう。



併し和蘭人も英吉利人も家康の勸誘を用ひず、平戸に商館を建てた。それほど松浦家で蘭英人を歓迎した物と思はれます。

和蘭人に致せ、英吉利人に致せ、何の爲めに千萬無量の苦勞を凌いで遙々東洋に遣つてくるかといへば、貿易の利を専らにしたいからであります。小さな資本で個々に従事するより、合併して大資本でやればいふまでもなく利益は多いし、無益の競争も省ける。それで和蘭にも英吉利にも東印度會社といふ特殊な大會社が出来て主として、東洋方面の貿易開拓に従ひました。和蘭の東印度會社はフェルエーニグデー・オストインデツシエー・ノムバナー・Vereenigde Oostindische Compagnie と稱し、その頭字のV・O・Cを組合せたVを徽章といたしました。一六〇二年三月の成立です。

一體和蘭といふ國は眞に小さな國で、急行列車で六時間か七時間かれば、通抜けて仕舞ふ。それ位小さな國ですが、その國民は十六世紀の末から十七世紀を通じて盛んに東洋方面に活躍し、今日の「蘭領東印度」の基を作つた。當時の蘭人の進取の氣象に富んでゐたことは驚くべきですが、これにはまた理由があります。和蘭は元來西班牙の領地でありましたが、宗教その外色々の關係で獨立の旗を揚げた。西班牙は當時歐洲第一流の強國でありましたから、和蘭にとつては難戦苦戦で中々容易に目的を達し得ない。然るに戰爭中西班牙の隣國葡萄牙の王室の血統が斷えた

ので、西班牙王が一時葡萄牙王を兼ねた。兩國が合併した譯ではありませんが、同一の王を戴いたので、その機會に乗じて和蘭を苦しめんとし、葡萄牙のリスボン港に和蘭船の出入するを禁じた。葡萄牙人が東洋に参りまして數多の物産をリスボンへ持つて歸る、それを請取つて北歐諸國へ賣渡すのが、和蘭人の職業であつた故、リスボンを鎖されては商賣は上つたりです。それなら一層仲次業を止めて和蘭人自身東洋に行かう。葡萄牙人の根據地を衝いて東洋貿易の獨占を奪つて遣れと、和蘭人が奮ひ起つたのです。本國では獨立戰爭をして居りながら、一方ドシドシ船を東洋方面に派遣いたし、西班牙や葡萄牙の船を見掛ければ直ちに砲火を交へ、機會があれば陸上の葡萄牙領を掠めるといふ次第です。一例を挙げると、香港の側にマカオ（澳門）といふ葡萄牙の根據地がある。一六二二年和蘭は英吉利と聯合艦隊を作つてこれを襲つた。この時は葡萄牙人が甘く防ぎましたので、目的を達せぬばかりか、寄手の側に多大の死傷者があつた。その中に若干の日本人がゐます。日本人が外國船に乗組んで戰爭に従事したといへば、一寸異様に聞えますが、當時の日本人は支那海から南洋諸島に掛けて勢力を張つて居りました。日本から往來する者もあれば、先方に土着してゐる者もある。名前や出身地は多くは分りません。獨立の生計を営んでゐる者もありませうが、多分は外國人に雇はれて、イザといへば、武器を手にして働く、日本人は雇兵として重寶がられたやうです。マカオ攻撃の翌年南洋のアムボイナといふ島で和蘭人と



英吉利人とが衝突しまして、九人の英吉利人・九人の日本人・一人の土人が殺されました。今から三百年前にモルッカ諸島の一つアムボイナに若干の日本人がゐたことから考へても、日本人の發展はすさまじいものであつたといへます。

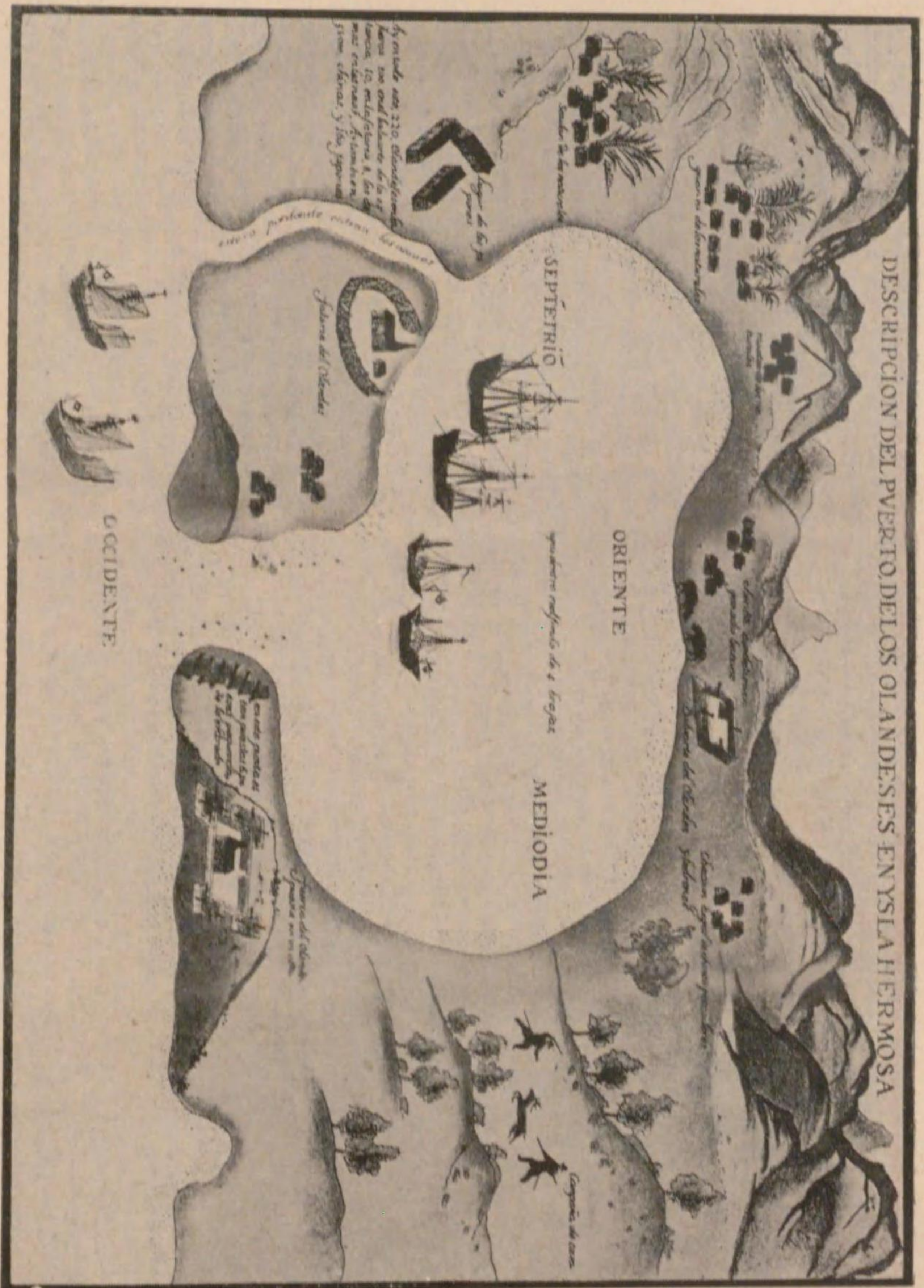
マカオが葡萄牙人の東洋に於ける根據地であつたと同様、フィリッピン島のマニラは西班牙人の根據地であり、ジャバ島のバタビヤは和蘭人の根據地でありました。和蘭人は一方日本貿易を繼續し、他方ではマカオ、マニラ間の交通を遮断するために、臺灣の占領を必要と感じた。臺灣の側に澎湖列島がある。日清戦争の時、日本軍が先づ澎湖島を占領したと同じ意味で、和蘭の艦隊はマカオ攻撃失敗後、退いて澎湖島を占領した。然るに支那側から退却を迫り、躊躇すれば兵力に訴へるといふ有様になつたので、和蘭側は澎湖島を棄て、臺灣島に城を築いてこれに據ることとなつた。これが所謂ゼーランディア城で、臺南から少し離れた安平に現在立派に城壁の一部が遺つて居ります。今我々は全島を指して臺灣といひますが、昔時はゼーランディア城のある島を臺灣島といつたのです。西班牙も負けぬ氣になりまして、島の北部の基隆と淡水とに砦を築きました。龍虎相搏つと申しませうか、銘々自國の威福を一步でも進めようと努力する有様は凄じいものです。此所にゼーランディア城の繪があります（寫眞を示す）。城が最も完備した時を描いたので、丁度金平糖のやうな形をしてゐます。これを稜堡と申します。大砲の斜角を廣くするため

で、幕末に出來た函館の五稜廓がこの式です。それから西班牙の城趾、これはサン・サルバドルと申し、基隆港外の社寮島に城趾が遺つて居ります。後に和蘭人の手に落ちた砦です。淡水の砦はサント・ドミンゴといふ。今英吉利領事館になつてゐる建物は、昔時の砦を利用したものといはれてゐます。これも基隆同様後に和蘭の手に落ちた。それから澎湖島の和蘭城趾は紅木埋にあると傳へられて居ります。自分は臺灣見學に罷越した節可成強い風波を冒して澎湖島へ渡りました。風のひどい所で、樹木は屋根より高いものはありません。紅木埋へ行つて見ましたが、どうもそれは支那の城趾で、和蘭の城趾とは思はれません。舊守備隊跡といふ所が、形状からいつて和蘭城趾らしく思はれるのですが、土地の方から承りますと、それは五十年許前に新に築造せられたものと斷言せられます。近時村上直次郎博士の研究によると馬公港の南の突端の風櫃尾角であらうといふことです。社寮島も澎湖島も要塞地帯ですから、その地圖を手に入れることは勿論寫眞も見取圖も取ることが出來ません。これに反してゼーランディア城の方は繪圖寫眞が色々御覽に入れることが出來ます。この一枚は西班牙人が書いたゼーランディア城附近の繪圖で、臺北の帝國大學に陳列されて居る寫眞を複寫したのです（寫眞を示す）。圖中の説明に、日本人の家、日本人は百六十人居ると書いてあります。日本人が安平附近へ行つて商賣をする、その商賣の便宜のために小屋を建てて住んで居つたことが分るので、また此方には和蘭人が鹿を狩りして居る



有様が書いてあります。古い時代の安平附近はこんな風でありましたらう。序に申しますが日本人はゼーランディア附近に群居してゐるばかりでなく、マニラ・安南・暹羅等において、それぞれ日本町を形成してゐたと申します。

和蘭人が臺灣に據りましたは、一六二四年で、その年からゼーランディア城の建築に着手した。立派な城であるだけに、多大の費用を要する。よつて費用の一部に充てるために、日本船に税を課したが日本人は承知しません。和蘭人よりも自分達の方が臺灣へ先に來てゐる。自分達より後れて來た和蘭人のために課税される理由はないといつて承知しません。日本人と和蘭人とは日本では平和に交際いたして居りましたが、臺灣では喧嘩です。税を拂はなければ日本船の出港を禁止する。イヤ是非出港させてくれといふ争から、たうとう船長濱田彌兵衛が、臺灣總督ビーター・ヌイツの胸元へ脇差を差付けるやうな騒となりました。餘りに有名な話で御座いますから委しくは申上げませんが、彌兵衛がヌイツと最後の談判を試みた時、ヌイツの態度が甚だ宜しくなかつた。高い椅子に腰を掛け、兩脚を脚臺の上へ投出してゐる。脚首が丁度彌兵衛の頭の邊にあつたといひますから、彌兵衛も勃然として怒を發したのでせう。この事件について幕府の態度は甚だ強硬で、平戸の商館は嚴重な警衛の下に商賣中止となり、ゼーランディア城を日本に引渡せ、然らずんば破壊せよといふ掛合です。和蘭側でも容易にこれに應ずることは出來ない。臺灣の北部に



フオルモ一サ島圖  
臺北帝國大學藏



ある西班牙の城砦をお取りになつては如何ですか、あれをお攻めになるのなら當方におきましても精々御加勢致しますと、他人の何とかで相撲を取るやうなことを申出でましたが、日本ではその手を喰はない。愈々百計盡きまして、一切の責任を時の總督マイツに歸し、同人を日本に引渡すから、商賣は今まで通り許されたいといふので、幕府もその申條を聽容れました。マイツは氣の毒にも平戸に幽囚の身となりました。和蘭の方では手を盡くして釋放を願ひましたが、容易に目的を達しませんでした。

その頃平戸商館の商人頭にフランツ・カロンといふ者がありました。白耳義人で、若い時に東印度會社に屬する船の料理番の手傳をして日本に來た。日本語が上手でありましたから、マイツの通辯を勤め、ゼーランデヤでマイツが濱田彌兵衛の手に虜はれた時、カロンも側杖を喰つて縛られて居ります。それが段々出世して平戸の商人頭となり、一六三六年には館長代理として江戸へ參府することとなつた。一體平戸の商館長は年々江戸に參府し、將軍以下へ獻上物進上物をする例でした。今度カロンが持參した種々の贈物の中に青銅製の燭臺があつた。三十本の腕、目方七百九十六ポンドを有する大燭臺で、三代將軍はこれを見て非常に氣に入り、日光の御廟に供へたら宜しからうといはれた。今日光東照宮の廟前にある燭臺の一つがそれです。將軍の御機嫌が宜いのに乗じてカロンはマイツ釋放のために極力運動をしたと思はれます。尤もどういふ運



動をしたか委細は分りませんが、本年の参府入用は例年に比べると非常に多い。贈物を金高に見積るとこれまた巨額に上ります。カロンは得意な日本語を使ひ、また金銀を惜しまずにヌイツの釋放を運動したに相違ない。さうしてその結果ヌイツは滞りなく放免となり、バタビヤに歸ることを得ました。

一六三六年は日本曆で寛永十三年に當ります。鎖國令が發布せられた年として有名ですが、その本文を能く読んでみると、鎖國令といふ名稱は決して當つてゐない。鎖國またその反對の開國といふ言葉は、外國人に對し、日本の港を鎖すとか開くとかいふ意味です。寛永十三年令は日本人の海外に往くこと及び海外に在留した日本人の歸國を禁じ、背く者は嚴科に處すと規定してゐるので、日本人海外渡航取締令といふべきです。それから本令發布の結果として、西洋人と日本婦人との間に出來た子供やその母親を海外に放逐することとなりました。残酷のやうに聞えますが、耶蘇教禁止の一つの手段として止むを得なかつたでせう。耶蘇教禁止の件については本夕の題目以外にわたりますから略しますが、耶蘇教の教師及び信者の言行に、爲政者の疑惑を招き不安を醸すやうなことが段々重なつた結果として、幕府は遂に政治上の意味から耶蘇教禁止の政策を採るに至つたものと考へます。

それから引續いて島原の亂が御座いました。叛徒が立籠つた原城の遺趾は數年前に一覽致しま

したが、島原半島の一角で、前が深田、後が海、まことに要害の地と見請けられます。幕府の催促に應じて九州諸大名の軍勢が攻寄せましたが容易に落ちない。平戸の和蘭商館に命じ、大砲を取寄せて陸上から砲撃し、つぎに船を廻して海上から砲撃せしめました。これについて城内から抗議を呈した。多寡が百姓の籠つた城を外國人に頼んで攻撃するとは何事であるかといふ抗議で、これには幕府方も一言もなかつた。兎に角原城は寛永十五年に落城した。決して宗教上の一揆では無かつたが、叛徒の殆ど全體が耶蘇教徒であつたため、耶蘇教の取締は爾來一層嚴重となつた。また今度の一揆に葡萄牙人は決して直接關係した譯はないのですが、葡萄牙人と耶蘇教とが切つても切れない關係にあることは、幕府の方でもよく知つてゐますから、たうとうその翌年即ち寛永十六年に葡萄牙貿易禁止の命が出ました。

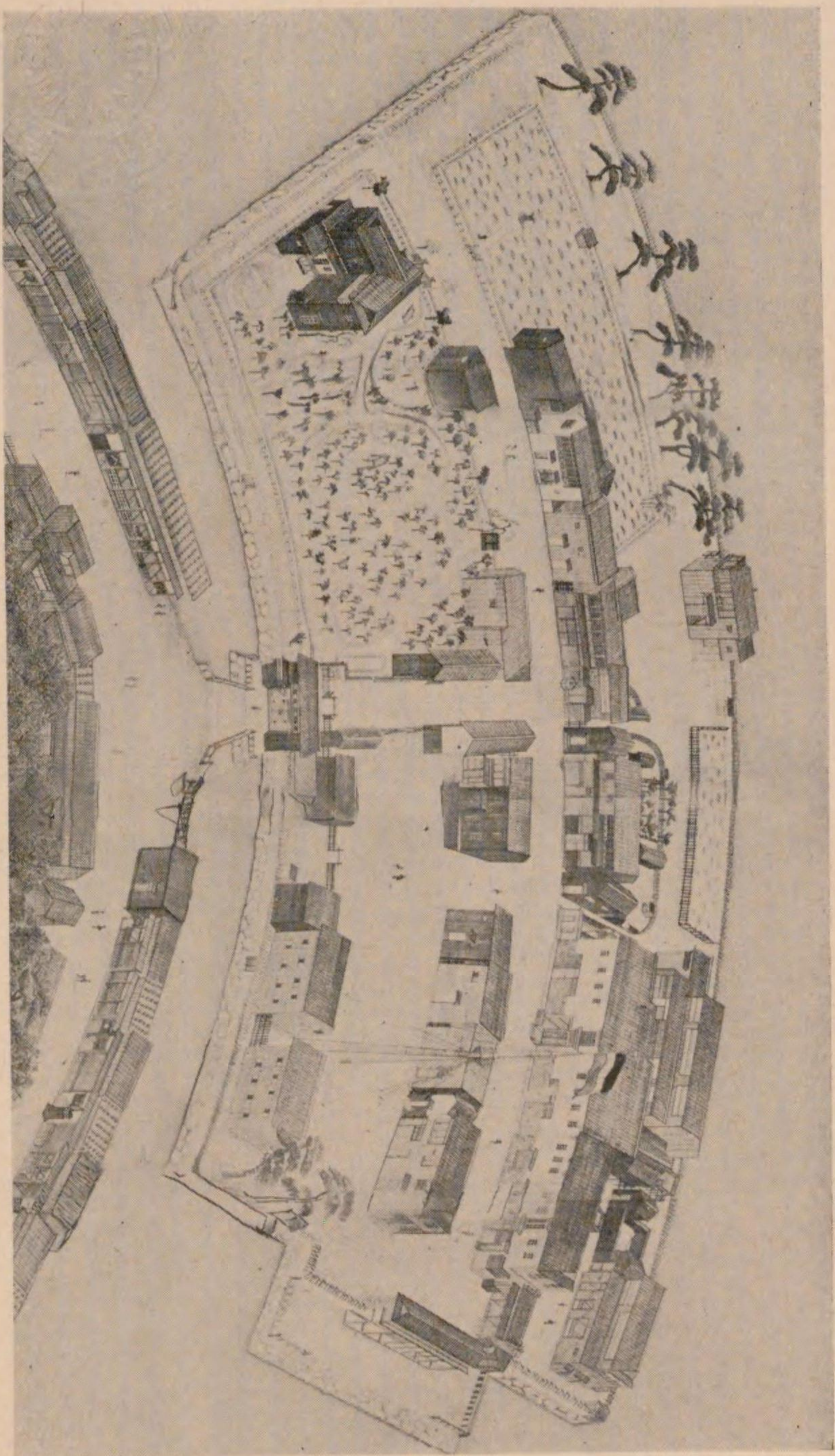
葡萄牙人は元龜元年に長崎へ始めて來た。その時から數へると彼是七十年になります。長崎は最初大村領、それから一時は耶蘇會の私有地のやうな姿になり、次いで豊臣氏に沒收せられ、また徳川氏の直轄領となつた。領主はつぎつぎに代つたが、葡萄牙船は依然長崎に入港し、また葡萄牙人は長崎市の中何所へ住居しても差支なかつたのですが、長崎の有力者二十五人が出資して出島を新築してから、葡萄牙人はこの一郭内に住居することとなつた。かやうに葡萄牙人が住居の制限を被つたのは所謂鎖國令の出た年からですが、今度はそれどころか、全く日本を引拂はねば



ならぬこととなりました。

原城攻撃に用ひられた和蘭の大砲は餘り有効でなかつた。それにも拘らず和蘭商館は幕府から白砲鑄造の注文を受け、館長フランソア・カロンは寛永十六年春白砲二門と附屬具とを完成し、これを携へて江戸に上り、郊外麻布で都合十一發の實彈射撃を行つた。二發は砲門内で爆破し、その他は的の附近または手前に落ちて泥土を跳飛ばし、最後の一發は的とした藁葺の小屋の中へ入れて置いてこれに點火した所、忽ち爆破して屋根から火焰を吹出し、見物の幕吏は拍手掲采したといふことです。カロンは上々の首尾で御暇を賜はり、平戸に歸るや、また白砲の鑄造に着手し、翌年中に七門を成就した。この年もカロンは例によつて參府しましたが、彼と同行した砲手が牧野内匠頭の邸で焼彈の取扱方を誤り、それが破裂して危く火事にならうとした。是等の事實は友人英國陸軍中尉ボックサー氏の「日本に於ける初期歐洲兵器の影響」と題する小論文に委しく出てゐます。此所に持参いたしましたから御覽を願ひます。麻布で白砲の射撃を試みた時、カロンが自ら筆を執つて書いた的の圖があります。

葡萄牙人の長崎放逐によつて、一番弱つたはマカオです。日本貿易を禁止せられては、マカオの町は立行かない。何としても貿易再開の許可を得ねばならぬと、寛永十七年特派使節四名を船に載せて長崎へ差送りました。然るに幕府では斷然これを拒絶し、使節一行及び船員合計六十一



長崎出島圖



名を斬り、僅に十三名を免してマカオに歸らしめ、船は燒棄ててしまひました。日本側からいへば、これは前年貿易禁止の命を傳へた時、若し再び渡來せば、船は沈め人は皆死刑に處すと申渡してありますから、その申渡を勵行したまでです。

葡萄牙人が困つたと反對に悦んだのは和蘭人です。葡萄牙人がゐなくなれば日本貿易は和蘭人の一手占となるといつて、バタビヤでは祝賀會を開いた位です。カロンはマカオ使節の悲惨な結果をバタビヤに報告し、「葡萄牙人の上に雨が降れば、和蘭會社の上に滴が垂れる」と結んでゐますが、眞に名言で、間もなく和蘭商館の上に滴どころか大暴風雨がやつて來ました。葡萄牙使節處分後間もなく幕府は平戸の和蘭商館に對し、(一) 耶蘇年號を記した二棟の倉庫を破壊せよ、(二) 商館長は自今年々交代すべしとの嚴命を下した。カロンは早速多數の工夫を集めて倉庫を破壊し、翌年家族を引連れてバタビヤへ向け出發いたしました。が、迫害の暴風雨はまだ吹續き、平戸の商館を長崎の出島に移轉せよとの命令は新任館長に下された。服従より外に取るべき途はない。新館長は松浦家に暇乞を告げ、町民多數の見送を受けて平戸を去り、葡萄牙人の退去以來空屋となつてゐた出島に移りました。

何故幕府は和蘭人に長崎移轉を命じたか。葡萄牙貿易の禁止は獨りマカオにとつて迷惑であつたばかりでなく、從來貿易の特權を有してゐた日本人、長崎を第一とし、江戸・京・大阪・堺五ヶ



所の商人にとつて大打撃で、従つて長崎の町はこのままでは潰れてしまふかも知れない。葡萄牙人に代る外國商人が長崎に来てくれるやうに熱望したは五ヶ所商人ばかりでなく、長崎を支配する幕府の役人も同様であつた。役人も町人も上も下も一致して和蘭商館が平戸から長崎へ引越すやうにと運動し、さうしてその運動は長崎を直轄領として所有する幕府の容るる所となつたと考へられる。

一六四一年日本曆の寛永十八年六月で平戸和蘭商館の時代は終はり、これから出島時代となります。出島は扇の地紙形の築地で、總坪数は四千坪に少し闕けます。御維新になつて海岸埋立工事を盛んにやつたため、昔時の姿は全然なくなりました。然し出島の圖は日本にも西洋にも種々あります。これは十九世紀の半頃に館長を勤めて居りましたレバイゾーンの著書の卷末にあります銅版圖(圖を示す)で可成精細な圖です。御覽の通り四方水で、町へ往くにはどうしてもこの門を出て橋を渡らなければなりません。さうして何時でも出られるかといへば決してさうでない。參府の前後と八朔とに公式に奉行を訪問すること、九月の諏訪祭に設けの棧敷で見物すること、その外年に一二回寺院見物に出掛ける位なものです。妻子があつても呼迎へて同棲することは出来ず、料理方にも日本人を使はねばならず、萬事不自山勝であつた。囚人同様だと苦情をいふ和蘭人のあつたのは決して無理とは思ひません。妻子同棲を禁ずといふ規定は調べて見ても發見し

ません。古く日本へ来るのは確に冒險の意味があつて、獨身者が多かつたと思ふ。假令妻子があつても、バタバヤに置いて單身乗込んで來た。それが妻子同棲を許さずといふ規則のやうに後世から考へられたのでは無いか。板澤教授の説によると、男女を問はず、商賣に直接關係のない者は入國を許さぬ幕府の方針であつたとあります。遙に後年のことですが、館長ブロムホッフの妻君が子供を連れて、夫の跡を追つて長崎へ來たのを、可愛想に追返してしまひました。當時餘程有名であつたと見え、ブロムホッフ夫婦に子供・乳母・下女などの姿を描いた西洋風の日本畫が數點残つてゐます。

商館が出島に移つてからは、平戸時代のやうな波瀾はありません。どちらかといへば商賣一方です。一體家康が外國貿易に對する態度は極めて寛大で、和蘭人に與へられた免狀を見ますと、何所の港へ入つても宜いとある位でしたが、二代將軍の時に平戸と長崎とに限つて入港を許され、今度は長崎だけとなつた。入津の場所が段々局限されてゐます。それから商賣そのものについて見ると、最初は如何なる品物を如何程持参しても一向差支なかつた。尤も生絲だけは葡萄牙人同様パンカドといつて五ヶ所商人の極めた價で一口に賣らねばならなかつた。それが一六七二年、即ち四代將軍の寛文十二年になつて始めて制限を加へられた。日本側で輸入品の代價を極め、その代價で買取る、不服ならば持つて歸れといふ仕方、これを日本側で市法賣買、西洋側でタク



サチーハンデルといふ。和蘭人は手を盡くして苦情を陳述し、一六八五年（貞享二年）やつとそれが廢止になると、今度は貿易高に制限を加へられ、貿易高を一年銀三千貫目に限られた。支那貿易高の二分の一です。制限高の數字はその後色々變更がありますが、要するに幕府の方針は縮少で、一七九〇年（寛政二年）松平定信公執政の時、銀七百貫目に減じてしまひました。僅々百年ばかりの間に制限令の出た最初の銀高の二割五分に當る少額となつた。従つて毎年入港の蘭船も昔時は十艘以上のこともあつたが、四五艘となり、二艘となり、定信の時にはたつた一艘となつてしまつた。

然らば制限令以前の貿易高はどの位かといふ問題になります。ハーグのアルシーブに「一六二〇年—一八〇八年日本に於ける和蘭商館貿易覺帳」といふ寫本があります。同書によると、長崎へ移つてから最初の十年（一六四一—一六四九年）は輸入額平均一ヶ年六十萬グルデン、第二の十年（一六五〇—一六五九年）は九十萬グルデン、第三の十年（一六六〇—一六六九年）は百四十萬グルデン、第四の十年（一六七〇—一六七九年）は百二十萬グルデン、第五の十年（一六八〇—一六八九年）は八十萬グルデンとあります。タクサチーハンデルの時代は丁度第四と第五の十年に跨りますが、折角自由賣買で隆盛に向つた和蘭貿易がタクサチーハンデルで先づ頓挫し、貿易高制限令で再び頓挫し、第六の十年以後は殆ど減る一方で、一七九〇年から一七九九年に至

る十年間は一ヶ年平均は十萬グルデンです。最盛時の一割にもたらぬ哀れな數字を示してゐます。グルデンは和蘭の貨幣單位で二十スタイフェルに分れ、時代によつて相場が違ひますが、一六三六年から一六六六年までは二グルデン七スタイフェル、その以後は三グルデン十スタイフェルが日本の銀一テール即ち十匁に當ります。それから利益は最初の十年が平均四割九分、第二の十年が六割八分、第三の十年が七割一分、第四の十年が七割五分、第五の十年が六割五分といふ風に大體輸入品高の増減に照應してゐますが、一七九〇—一七九九年の十年間には損勘定の年が三年まであつて、差引平均九分の利益です。

三代將軍に至るまで外國貿易に對する幕府の制限は、例へば貿易場所の局限といひ、葡萄牙貿易の禁止といひ、皆耶蘇教關係から出てゐますが、四代將軍以降の制限は純粹に經濟上の意味から出たもので、茲に前後大きな差が存する。然らば何故經濟上の意味で貿易を制限する必要があつたか、それを説明するには輸出入品を一覽する必要があります。

日本への輸入品は第一が生絲でした。葡萄牙人は支那の生絲を、また和蘭人は東京・印度・ペルシャ方面からこれを持參しました。今日は生絲は日本第一の輸出品ですが、昔時はこれが第一の輸入品だつた。それから織物類で毛織物・絹織物・木綿・リンネル、皮類で牛の皮・鯨の皮・鹿の皮、材木で白檀、鑛物で水銀・錫、香料で丁字・胡椒、その外蘇木といつて染料に用ふるも



の、砂糖、藥種等があります。さうして輸入品と雖も時世に應じて盛衰變改のあるのは勿論です。例へば生絲は日本内地で追々盛んに産出するに従つて輸入額を減じ、利益を減じ、これに反して砂糖が大いに殖え、また銃砲類は寛永前と幕末と前後二度まで大きな需要があつたやうな始末です。

和蘭語で書きました輸入品の目録を見まして、それを當時日本で何と稱へたかを知るのは一苦勞です。松平定信の手澤本に「阿蘭陀名目語」と題する寫本があります。只今御子孫たる松平子爵家に御保存です。原語と譯字と兩方出てゐますので大助かりです。Perpetuan Kofij Kleure をす・す・竹・色・へ・る・へ・と・わ・ん・と譯してありますが、原語に珈琲色とあるのをす・竹・色と譯したは、實物を見た上で通詞が思ひついたのでせうが、名譯と考へます。これを逆にすす竹色を和蘭語にどう翻譯するかと問はれた場合、珈琲色と答へる人は千人に一人もありません。それから更に難儀なことは、原語又は日本語で記された輸入品がどんなものであつたか分らないものが多い。先達てポックサー氏が一六七五年バタビヤ總督マツイカーから長崎奉行へ差出し、市法賣買廢止を愁訴した日本文の書狀を翻譯して居られる時、も・み・い・とある名詞に礮と行詰り、も・み・い・は・も・う・ひ・即ち毛皮の間違だらうといはれた。自分はそれに反對し、第一日本語で書いた手紙に毛皮をもう・ひと音讀するのは可笑しい。も・み・い・は、ミイラの和蘭語であるといつた。同氏は最初中々屈服せら

れなかつたが最後にそれを承知された。ミイラが輸入品にあるのは不思議なやうだが、藥劑として用ひられたらしい。これなどは容易い方ですが、織物類になると名稱と實物とを一致せしむることに殊に困難を感じます。古く外國から輸入された切地を貼付けて、それに説明を加へた貼込帖は無いものと、兼々心懸けて居る次第です。萬一さういふ品をお見當りになりましたら是非御報知を願ひます。

日本から主として輸出されたものは最初が銀、その次が金です。換言すれば正貨が主として輸出せられたので、輸出額の九割を銀で持つて行かれた年もあります。當時は金銀を貴ぶ時代であり、且つ東洋諸國一般に銀遣の時代ですから、銀貨を持歸るのは和蘭人にとつて大變都合がよいが、日本人にとつては反對に不都合で、一度海外へ出た銀貨は二度と歸つて來ない。そこで一六六八年(寛文八年)に銀貨輸出を禁止し、代りに小判を渡し、さうして銀を小判に換算する時に、小判一枚を銀六十八匁と建てた。小判一枚の法定相場は銀六十目、長崎の實際の相場はそれより一二匁低かつたといふのですから、小判一枚毎に日本側は八匁乃至十匁の徳をした譯です。それにも拘らず小判はどしどし流出する。そこで幕府は一方には市法賣買を行ひ、次いで貿易高制限令を發布し、他方には小判を改鑄した。これが所謂元祿金で、從來の小判即ち慶長金に比べると品位が甚だ悪い。慶長金を一とするとこれは三分の二位である。それでも矢張六十八匁に持つて



行けといふ。慶長小判一枚はバタバヤで三十グルデンの相場であつたから、六十八匁即ち二十三グルデン十六スタイフェルに引請けても、六グルデン四スタイフェルの利益があつたが、元禄小判は二十グルデンの相場であつたから、それを六十八匁で請取つては三グルデン十六スタイフェルの損になる。和蘭人は小判を請取ることを願はないで、今度は銅を願つた。これから銅の輸出額は著しく増加し、一六九七年(元禄十年)二萬五千ピコルに達し、翌年からこれを最高の輸出高としたが、何分銅が思ふやうに集まらないので、貿易高が追々減少せられると同時に、銅の輸出高も減少せられ、寛政二年には僅に六千ピコルとなつた。一ピコルは百斤即ち百カッチー Katty に當る。銅の外に樟腦がありますが、その輸出高は銅とは比較になりません。和蘭人も好んで持帰りませなんだ。

この外若干の雑貨と食糧品とがあります。長崎からバタバヤへ歸る船中で必要な食糧は勿論日本で仕入れて行くのですが、その中にサキ Saki とソイ H. Soye とがある。サキは酒、ソイエは醬油の發音を寫したものです。鹿兒島の島津家の尙古館に藍でソイヤ Noya と書いた二合入程の白い徳利がある。藩主齊彬が醬油の輸出を試みられた時の容器ださうです。今でもハーグの食糧品屋のショーキンドーの中にどうかするとソイヤと書いた瀬戸物の徳利を見ます。日本の醬油は以前餘程和蘭人に珍重されたため、その風が今に残つてゐるのでせう。

交通接觸が頻繁になれば言語が移つて行く、サキやソイヤを和蘭語の中に發見すると同時に我等はヘルヘトワン・ゴロフクレン・サルゼ・ラセイタ・サフラン・ランドセル等と和蘭の名詞を數多くそのまま日本に傳へてゐます。さりながら以上は皆品物の名ですから傳はり易いのでせうが、ここに不思議に思ふのは尺度の一聞が和蘭語の中にあることです。即ちイクエー iekie と申します。和蘭にはエル(英語のエール)といふ尺度がありながら、日本との貿易の文書には屢々イクエーが出て來ます、エーとかチェーとかいふ語尾は獨逸語の語尾のヘンやラインと同じく、和蘭人は好んでつける。キンド(子供)といはずしてキンヂェー、カット(猫)といはずしてカッチエーといふ類です。小さいまた可愛らしいの意味です。一聞をイッケンといはずしてイックといひ、これにエーを附けたものでせう。

尺度のついでにかねて私が抱いて居る一つの疑問を申します。重量の單位として日本にモンメの稱があつて、匁の字を用ひてゐる。錢の略字といひますが、錢の字をどう略すと匁となるのか、説明が與へられてゐませぬ。文の字の草體から匁の字が出たのであらうといはれる方があります。文字の議論は兎に角モンメといふのは錢一文の目方であるから、そこでモンメといふのだとなつてゐます。然るに和蘭にマース Maes といふ目方がある。日本の一匁と、全然同一で、その十倍をテール Thail、その十分の一をコンドリッ Condrijn、その百分の一をモクヘー Mokje とす



ふ。即ち一テールは日本の十匁に當り、一コンドリンは一分、一モクエーは一厘に當ります。どうしてこんなに一致するか、決して偶然とは思へぬ。甲が乙を真似たか、乙が甲を真似たか、或は甲乙とも第三者の丙を真似たか、この三つの中の一つに相違ない。一六八七年東印度會社の御用出版者、パウルス・マチスゾーンが出版した「印度各地方金銀比較表」といふ小冊子がある。私は原書を見たのではないが、その抜寫によると、テール・マス・コンドリンの十進法は日本ばかりでなく、臺灣・福州・甘蒲寨・東京・暹羅で行はれてゐる。和蘭人が以上の諸國で商賣するに當り、自國の目方を押弘めたのではなく、以上の諸國に共通な目方を和蘭人がそのまま使用したものとする。多分支那が根元で東洋諸國一體に同一の目方を用いたものでせう。

和蘭の貨幣は今日もグルデンが單位ですが、それを四分した二十五セントの銀貨があつて、俗にカルチエーといひ、それを十倍した二グルデン半の大きな銀貨ライクスダールデルもあれば、それを十分した二セント半の銅貨もあります。カルチエーとは四分の一の意味です。つまり一を四ッ割にする法で、この法がまた日本の徳川時代の貨幣の數へ方に見られる。小判一枚即ち一兩を四分したものを分といひ、一分を四分したものを朱といふ。さうしてロバン Coubang 一分 Icebon といふ言葉はそのまま和蘭の文書に見える。四ッ割の法は日本から出たか、和蘭から傳はつたか、研究に値するものと思ひます。

話が前に戻りますが、日蘭貿易は一七九〇年即ち寛政二年に至り、銀七百貫目銅六十萬斤に限られ、船は一隻となり、而もその翌年は船が來ない。バタビヤは出帆したのですが、途中で沈没したのです。一七九二年から四年間は年々一隻づつ來ましたが、一七九六年にはまた來ない。さうして一七九七年以來數年の間毎年來るのは皆亞米利加の傭船のみでした。これには次のやうな理由があつた。

十九世紀の末に佛蘭西に大革命が起り、國王ルイ十六世を斷頭機に上せたため、歐洲列國は兵を合して佛蘭西の革命運動を鎮定せんとした。然るに案外にも革命軍の方は士氣振ひ立ち、隣國の塊地利領ネザールランツを犯し、更に和蘭に攻入り、<sup>スタット・ハウダ</sup>總督を追拂つてバタビヤ共和國を設立した。總督は英吉利に逃亡し、凡そ海外にある和蘭の舊殖民地は宜しく英吉利の保護を受けよといふ命令を發布したので、英吉利では和蘭の舊殖民地に對し、その引渡を要求し、拒絶するものには兵力を以てこれに逼るに至つた。さういふ時節ですから和蘭の國旗を掲げた船が海上をまごまごしてゐれば直ぐ英吉利の軍艦に捕獲せられる。そこでバタビヤ政府は中立國である亞米利加の船舶を雇入れて日本に往來せしめた次第です。一八〇二年英佛兩國の間に條約が結ばれ、歐洲は一時平和となり、従つて和蘭船が長崎に出入するやうになりましたが、間もなく歐洲の平和は再び破れ、戦争は倍舊の勢を以て行はれました。一八〇八年（文化五年）英吉利軍艦フェートン



號が突然長崎へ入港したのは、もしや同港に碇泊してゐる蘭船があるならそれを拿捕しようとする目的であつた。幸に蘭船がゐなかつたので、英艦は長崎奉行松平圖書頭に薪水食料を強請し、それを入手した後出帆しましたが、圖書頭は英艦の強請を容れたことに深く責任を感じ、自殺して罪を謝しました。氣の毒千萬な話で、今諏訪公園の中に同人を祭つた小さな社があるのは、同人の悲運に對する後人の同情を表現するものと見られます。フェートン號の航海日誌ログブックの原物が長崎縣立圖書館にあります。私はハーグの文書館で時の和蘭商館長ヘンドリック・ゾーフの報告書中に綴込んである英艦長ペリユーの手紙や、同艦に一時捕虜となつた和蘭商館員の手紙などを見て、寫眞に採つて歸りました(寫眞を示す)。近頃長崎高等商業學校教授の武藤長藏氏は非常な熱心でフェートン號事件に關する日本側の新史料を發見紹介されて居ります。

ゾーフは一八〇四年から一八一七年まで館長を勤め、その以前四年間書記を勤めてゐましたから、日本在勤は前後十八年、年限が長いだけその間色々重大事件が起つてゐます。第一が露西亞の特派使節伯爵レサノフの來朝、第二が英艦フェートン號の長崎闖入、第三がバタビヤ政府を攻下した英吉利官權の日本貿易乗取計畫で、ゾーフは徹頭徹尾これに反對し、和蘭の三色旗をわが出島の一角に翻翻たらしめた。その功績は千古没すべからざるものと存じます。

歐洲では英佛の争が將に酣である。ナポレオン一世は和蘭を併合し、ジャバ總督として將軍ヤ

ンセンを送つた。英領印度太守は一大艦隊を派遣してジャバを攻撃し、ヤンセンを降し、ジャバ全部とこれに附屬する土地とを一切その手に收め、ジャバ總督として新にトーマス・スタンフォード・ラップルスを任命した。ラップルスは總督任命以前から日本貿易を英吉利の手に收めようといふ考のあつた人ですから、早速その實行にとりかかり、一八一三年一四年兩度まで使を出した。ヤンセン降服條件としてジャバ及びその附屬地を擧げて一切英吉利政府の手に歸したのであるから、日本の和蘭商館は當然英吉利政府に引渡すべきものだとしてゾーフに告げ、ゾーフは自分本國が佛國に併合されたことも知らなければ、自身として佛國に忠誠を誓つたこともなく、またヤンセンの降服條件なるものも知らぬ。強ひて引渡を要求せられるなら、使者の便乗した英吉利船が、和蘭の國旗を掲げて長崎に入港したことを長崎奉行に暴露しようかと答へた。フェートン號事件について日本人が英吉利人に對する遺恨の深いことを利用したので、これには英吉利側も弱つた。さりながら和蘭船が近年一向入港せぬ。商賣が出來ぬなら和蘭人を長崎に置く必要はないといふのが長崎奉行かねての方針で、これには和蘭側が弱つた。大通詞の連中は内々ジャバ島に於ける政變を知つてゐるので、表向それが奉行の耳に入つては一大事變が生ずると心配し、祕密嚴守を勧告する。遂に双方妥協して商賣の方はゾーフの手で取捌き、新任館長として渡來した一英人は手を空しくして歸ることとなりました。本件については英吉利・和蘭双方に澤山史料があ



るので、対照しながら研究して行くと頗る興味が深い。

間もなく和蘭は佛國から獨立し、ジャバ及びその附屬地は和蘭に還付せられ、英吉利に亡命した前和蘭總督の子キルレムはやがて王位についてキルレム一世と稱し、歐洲の天地に平和が來ました。一八一七年ゾーフの後任館長が本國政府の命によつて持参したリッダー・ファン・デン・ネーデルランツェン・レーウーの勳章がゾーフの胸間に飾られた時、列席者皆感泣したといふ。嚙かし感激に満ちた光景であつたらうと想像します。

カロンにせよ、ゾーフにせよ、日本語は實に達者であつた。二十年前後も日本に滞在し、且つ日本婦人を娶つたせゐるもありませうが、本人の勉強が第一の必要條件であると信じます。その證據には兩名とも日本に關した著述を残してゐます。カロンの著述を「日本大王國志」といひ、ゾーフのそれを「日本回想録」と申します。回想録は齋藤阿具博士の手によつて翻譯されてゐますが、大王國志の方は長崎醫科大學の某氏が翻譯せられたといふ噂を聞いて居るだけです。本書は和蘭に數版あるのみか、英・獨・佛に翻譯がある位ですから、それから見ても名著たるに相違ない。古今を問はず外國へ出て働く人は、學者にせよ、商人にせよ、外交官にせよ、行先地の言語に充分精通し、さうしてその國に關する著述を残すやう心掛けねばならぬと、自分は平素固く信じてゐます。

まだ色々お話し申し上げたいことが御座います。就中キルレム一世の子キルレム二世が、一八四四年世界の形勢を説いて日本に開國を勧誘せられた親切は、我々日本人の感謝銘記すべき所で、いづれお話しする機會があるだらうと信じます。本夕はもう時間がありませんからこの邊で止めます。(昭和七年六月二十四日千駄ヶ谷茶話會席上にて)



和蘭雜話

初版一千部

12.20

昭和九年十二月十五日印刷  
昭和九年十二月二十日發行

定價二圓

著者 幸田成友

刊行者 東京市麹町區三番町一  
長谷川巳之吉

刊行所 東京市麹町區三番町一  
第一書房

東京市神田區三崎町二ノ二二  
印刷者 堀内文治郎  
製本者 橋本久吉



大島 豊著 茗溪會推薦

# 自然科学より哲學へ

菊判二百頁  
紙裝美本  
定價一圓二十錢

「自然科学より哲學へ」  
を推薦する

北海道帝國大學理學部長  
理學博士・農學博士 田所哲太郎

大島氏は既に「宇宙論」と「現代哲學史」とを公刊し、西洋に於ける多年研鑽の結果を發表して學界に貢獻したが、今また此書に依つて現代の科學萬能時代に生れた我々の人間的立場と云ふ重大な問題を掲げて、科學の應用に永久的生命を與へるものは哲

學であると喝破した。此の書の價値は少くも（第一）現代科學の爛熟時代から生じた今日の精神的動搖時代に對して、貴重なる一の哲學的指針を示した事、（第二）唯物論的概念のみに基いて經濟のみを重要視して、人間性理解の缺除せる現代の傾向に哲學的指導精神を賦與した事、（第三）人間性の保存のみを高調した結果生ずるところの文學藝術の過重の爲に、現代科學に習性付けられたる現代的理智生活を忘れる事の其墮落から救はるべき道を教へた事、等であると思ふ。随つて科學者の立場から、余は此書の價値を高く認め、之を推舉して止まぬ者である。



大島 豊著  
宇宙論

菊判四百六十頁  
總クロオス裝美本  
定價 二 圓

「宇宙論」を讀みて

同志社大學  
文學部教授 竹中 勝男

著者の著るしい性格として私に印象されて居るところは「ごまかし」や「不徹底」に對する著者の極端な潔癖である。それはどこ迄も追求し考へぬき自分の生命にまで同化しなければやまない著者の衝動と探究心である。而も不思議に、彼にあつてはそれが一面的でない。最初私が大島兄を知つたとき、彼は嚴肅そのもののやうな宗教信者であつた。その彼

が藝術に精進した時代も知つてゐる。それから外遊して七、八年振りに會つた時には著者は哲學的な深味と落着を持つた建設的な思索家になつてゐた。「宇宙論」はこの時代の一作物として、その過去を知るものにとつては、彼の永き眞剣な思想的苦闘の記念碑であるが、同時に彼や彼の現在を知るものにとつては、寧ろ多端なるべき今後の思想的建設の一基石たるべきものであると思つて居る。哲學の門外漢である私にはよく解らないが、彼のやうに宗教や藝術や、又、人間や科學や社會や經濟の動きに對しても眞剣な關心を持つものこそ、我々にも力強くよびかけてくれる思想の組織者であると信ずる。

大島 豊著  
現代哲學史

茗溪會推薦 日比谷圖書館推薦

菊判 四百 頁  
總クロオス裝美本  
定價二圓五十錢

「現代哲學史」推薦

茗溪會評

本書は過去百年間に於る歐米哲學の發達と其の動向とに就いて説明したものである。内容は第一講ドイツ哲學の發達、第二講フランス哲學の主潮、第三講現代イギリス哲學の傳統、第四講アメリカ哲學の勃興の四編より成立つてゐる。

特徴とする所は第一に從來の哲學體系を史的連續として解説するの傾向あるに對し、本書は一國の文化を形成する思想の繼統的發達として論述した點、第二に哲學思想の發展が其の時代の社會的國家的狀態に最も密接なる關係あるを明かにした點、第三に科學研究の結果が哲學思想發達に甚大の影響あることを力説した點にあると思はる。

蓋し一般には稍々難解と考へられるが、この方面に關心を有する人々には參考になる書物と思はれる。



シユライエルマヘル 陶山 務 譯  
獨 り 想 ぶ

四六判二百五十頁  
特製 定價二圓  
普及版 定價一圓

シユライエルマヘルを  
知るよき手引

福岡女子專門  
學校教授 櫻井 匡

シユライエルマヘルが天界の人となつたのは一八三四年二月十二日であり、今年はその百年忌に當るこの百年祭を記念するためにとて譯出されにものである。彼はシユレーゲルと共にロマンテイクの運動を始め、そのロマンテイクな環境の事から「宗教論」や今茲に譯著された「獨り想ぶ」を著して、宗教・

道德に關する意見を發表した。殊に後者は一八〇〇年の出版で、獨語録、若くは冥想録とも云ふべく、又同時に彼の倫理の根本思想を究めたものである。彼が三十一回の誕辰の日に筆を執り始め、僅か四週間に於て脱稿せりと云はれてゐる。その文學的意匠に於て確かに彼がロマンテイク運動者の一人である事を示してゐるが、陶山君の譯文また極めて流麗であり、更に譯書の卷末には「シユライエルマヘル論」が附せられてあつて、シユライエルマヘルを初めて知る人のためには誠によき手引である。

文學博士 得能 文著	哲學概論	菊判一六八頁 總クロオス裝	定價一圓三十錢
文學博士 得能 文著	哲學講話	菊判三〇〇頁 總クロオス裝	定價一圓八十錢
文學博士 得能 文著	現今の哲學問題	四六判二四八頁 總クロオス裝	定價一圓
高橋里美著	フツセルの現象學	菊判一〇二六頁 總クロオス裝	定價一圓
ヘルマン・コーヘン 村上寬逸譯	純粹認識の論理學	菊判八八〇頁 背ククロオス裝	定價三圓五十錢
ヘルマン・コーヘン 村上寬逸譯	純粹意志の倫理學	菊判九二〇頁 背ククロオス裝	定價三圓八十錢
ヴインデルバント 井上忻治譯	一般哲學史 第一卷	菊判三六三頁 總ククロオス裝	定價二圓五十錢
ヴインデルバント 井上忻治譯	一般哲學史 第二卷	菊判四七〇頁 總ククロオス裝	定價二圓五十錢
ヴインデルバント 井上忻治譯	一般哲學史 第三卷	菊判四六〇頁 總ククロオス裝	定價二圓五十錢
ヴインデルバント 井上忻治譯	一般哲學史 第四卷	菊判四七〇頁 總ククロオス裝	定價二圓五十錢
獨逸哲學—十九世紀の哲學—索引			



アロイス・ミューラー  
寺田彌吉譯

最新哲學概論

菊判二八〇頁 定價二圓

法學博士 田中萃一郎  
文學博士 川合貞一 共譯

ヘルデル歴史哲學

四六倍一〇〇頁 定價七圓五十錢

ベルグソン  
小林太市郎譯

精神力

新菊判二五五頁 定價一圓八十錢

テオバルト・タイクセル  
伊藤吉之助 共譯  
飯田忠純

現代獨逸の  
精神的社會的潮流

四六倍判九三〇頁 定價七圓五十錢

渡邊吉治著

美學原論

菊判一六〇頁 定價一圓五十錢

渡邊吉治著

美學概説

菊判二七二頁 定價二圓

渡邊吉治著

現代美學思潮

菊判四七〇頁 定價三圓

エミール・ウテイツ  
德永郁介譯

美學史要

菊判一五二頁 定價一圓五十錢

デイルタイ  
德永郁介譯

近世美學史

菊判一〇六頁 定價一圓

岡田正三譯

プラトンメノン篇

小型一八〇頁 定價一圓五十錢

岡田正三譯

プラトンカルミデス篇

小型一九四頁 定價一圓五十錢

岡田正三譯

プラトンゴルギアス篇

小型三二〇頁 定價一圓五十錢

岡田正三譯

プラトン饗宴篇

小型二一四頁 定價一圓五十錢

岡田正三譯

プラトンパイドン篇

小型二三〇頁 定價五十錢

チエルバツキイ  
市川白弦譯

佛教哲學概論

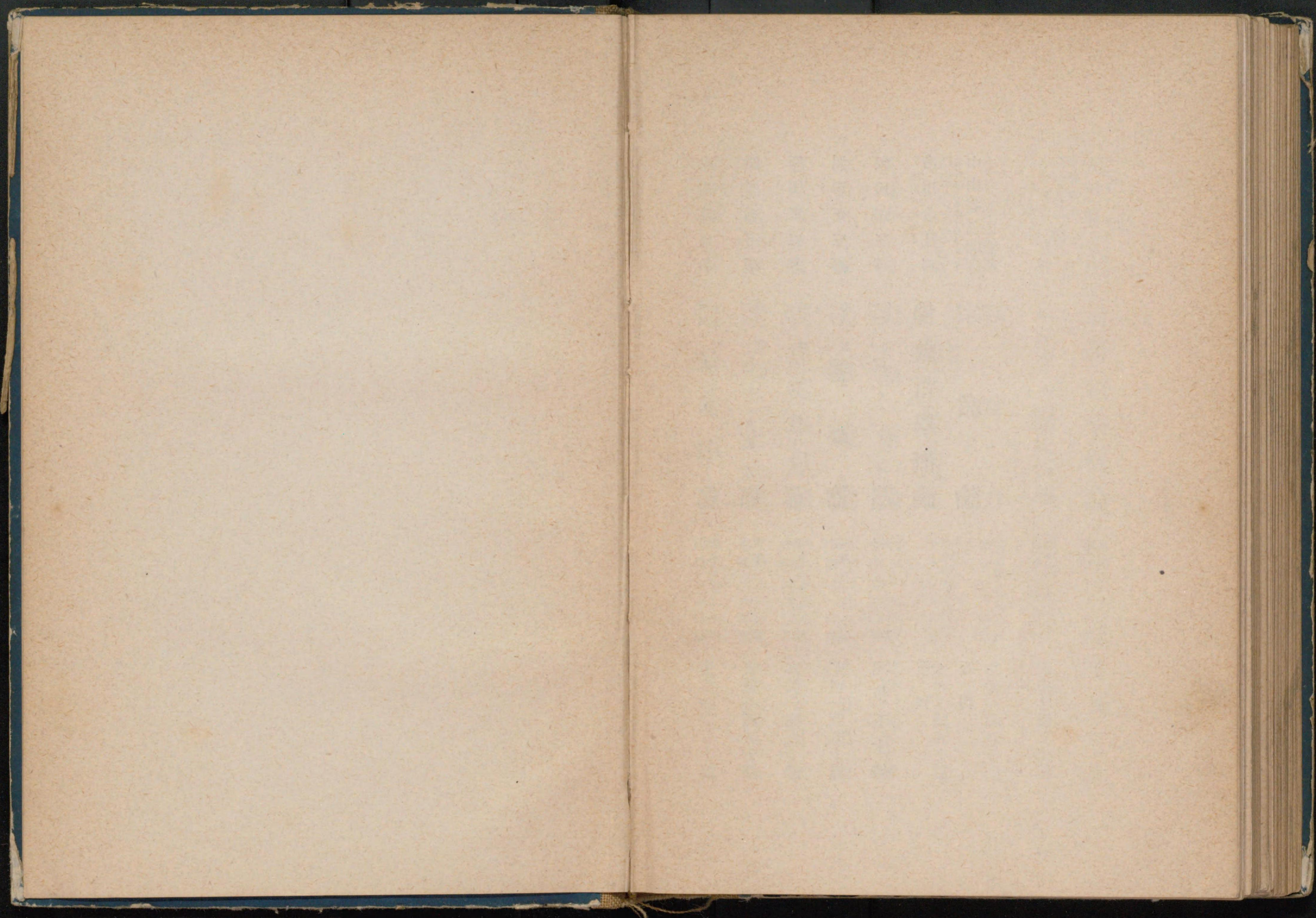
近刊

メレシコオフスキイ  
中山省三郎譯

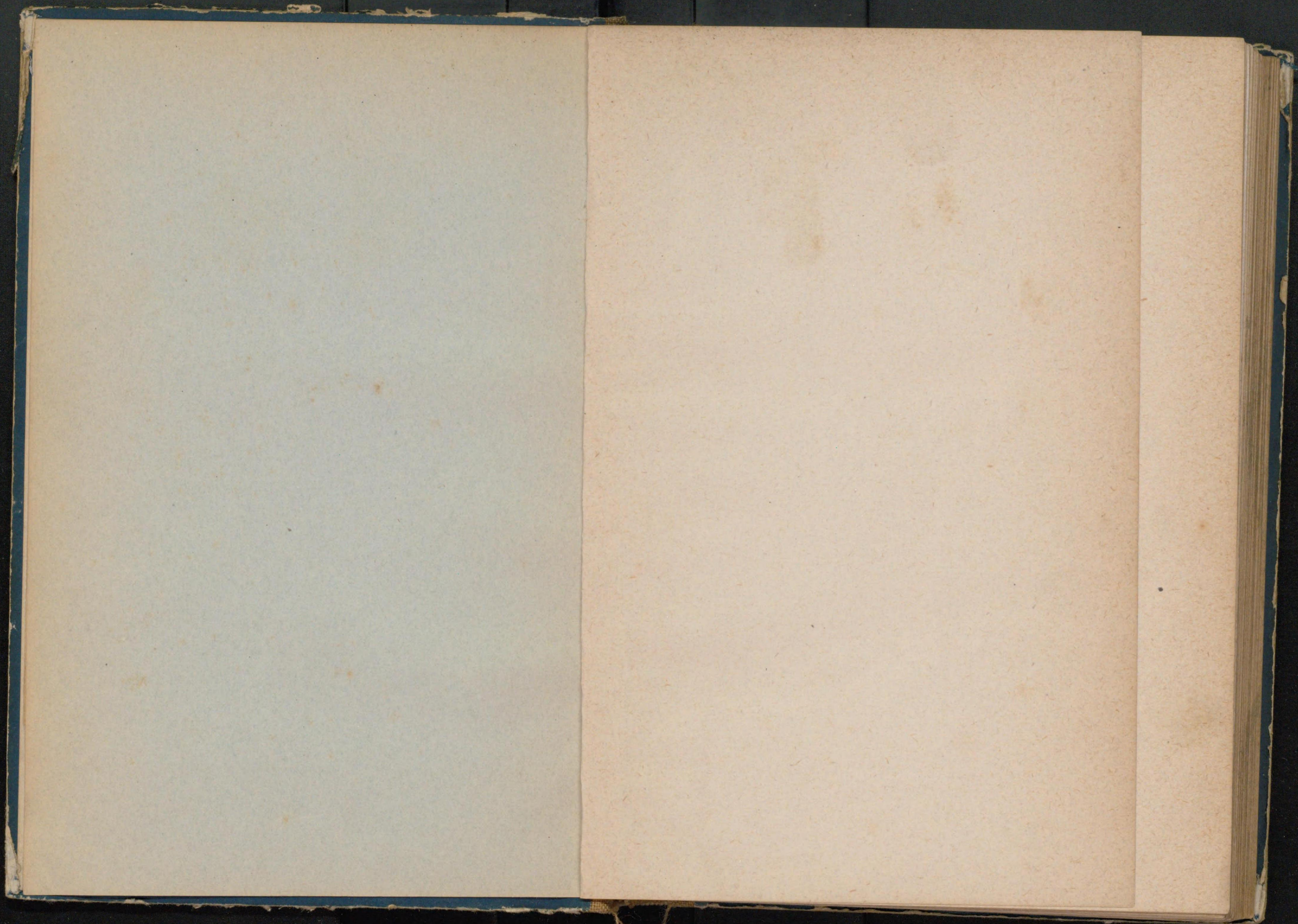
宗教論

近刊





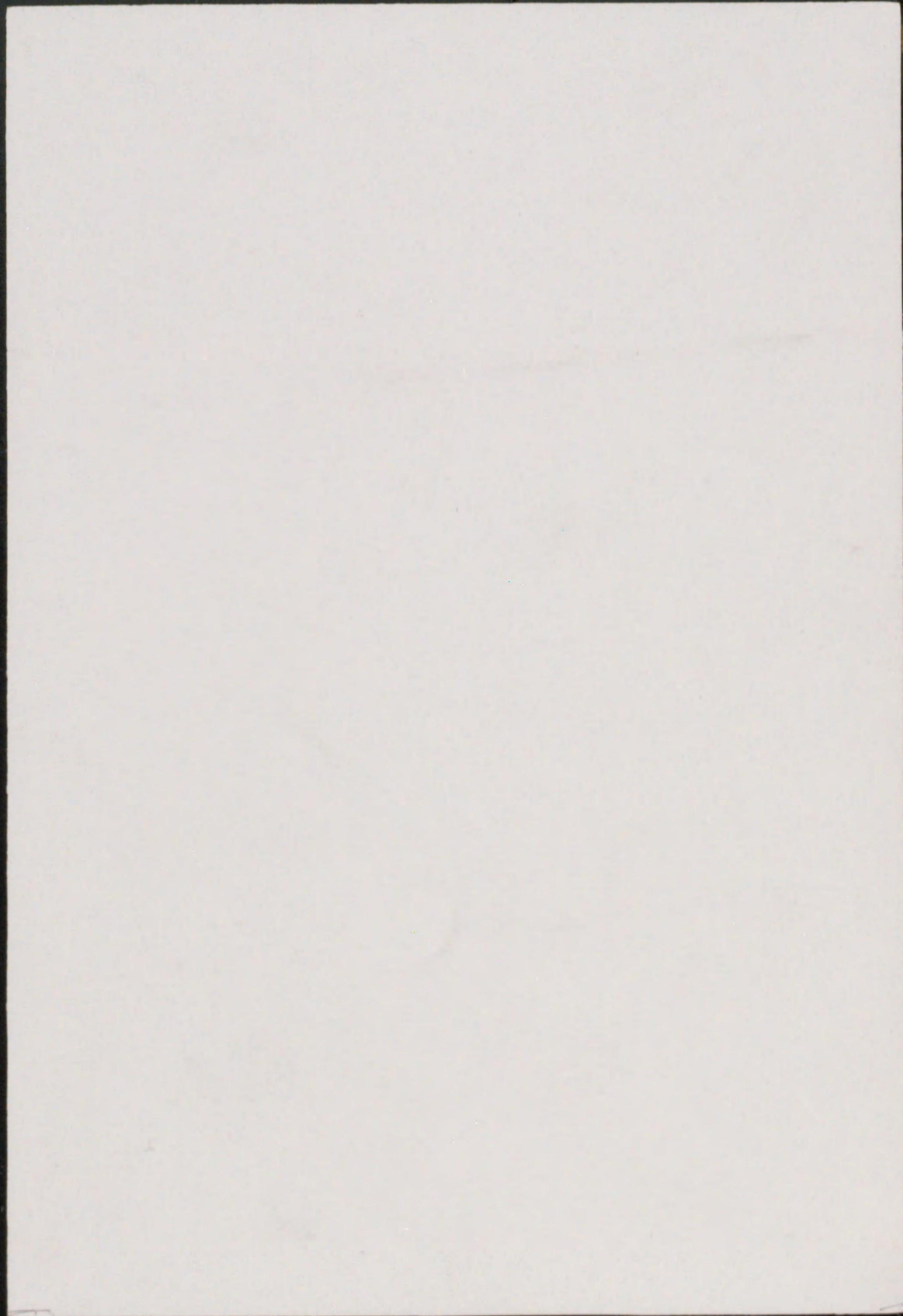












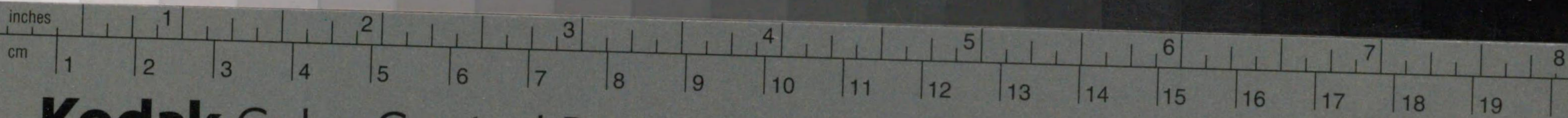
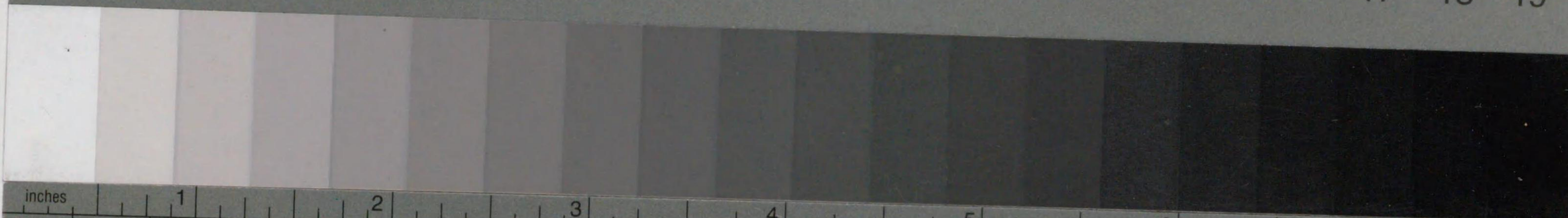


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

